第六部　教育・文化・体育編

第一章　教育行政機関

一　教育委員会

教育委員会は、昭和二十二年三月三十一日公布された教育基本法に基づき、昭和二十三年六月、教育の民主化、地方分権化、自主性の確立を目標として、教育委員会法が施行された。

昭和二十七年六月二十一日、制度の一部改正を経て、同年十一月一日、市町村教育委員会が発足した。

昭和二十七年十月五日、最初の教育委員選挙が行われ、市町村の公選による五人の委員が選出され、昭和二十八年四月、新たに教育長を任命して、溝辺村教育委員会がその地域の実情に即した教育行政を行うようになった。

最初の公選による教育委員は次のとおりである。

教育委員長　松山　績
教育委員　二見　源吾
教育委員　外山　一枝
教育委員　田上　静
教育委員　国生　重義（議会選出）
教育長代行　野村　秀男（助役）

昭和三十一年六月、地方教育行政の組織及び運営に関する法律の施行により、教育委員会法は廃止され、市町村長が議会の同意をえて任命することとなった。

昭和五十九年十月以降の委員長　教育長　委員は第247表のとおりである。（それ以前については、郷土誌続一参照）

第247表

年度	委員長	教育長	委員
昭和五十九年～昭和六十年	村田三夫	榎園髙雄	松山淳一郎 米丸光武 徳永重幸
昭和六十一年～昭和六十二年	村田三夫	荻田三郎	松山淳一郎 米丸光武 徳永重幸
昭和六十三年	村田三夫	荻田三郎	松山淳一郎 徳永重幸 有村秀忠

平成元年～平成二年	村田三夫	荻田三郎	松山淳一郎 二見剛史 有村秀忠
平成三年～平成五年	松山淳一郎	荻田三郎	川口孝雄 二見剛史 有村秀忠
平成六年～平成八年	松山淳一郎	海江田幸雄	川口孝雄 末重良規 有村秀忠
平成九年～平成十六年	松山淳一郎	壹岐　修	川口孝雄 末重良規 有村秀忠

二　教育委員会事務局

教育委員会が発足した当時は、独立した事務所はなく、溝辺小学校の一部を借り事務所を設け、昭和四十一年に旧役場庁舎の上に建設された中央公民館を事務局として入居した。

しかし、文部省の補助事業で建設されたことにより、国の会計検査の対象で検査をうけ、中央公民館は教育機関であるから、教育行政である教育委員会が使用することは適当でない旨の指摘により、社会教育課を除き昭和四十九年八月ごろ、溝辺郵便局が空家となっていたので、この郵便局舎を借り受け、教育委員会事務局とし庶務課が移転した。

昭和五十一年四月、溝辺小学校が現在地に新築移転したため、残存校舎の一部の教室に更に移転した。

昭和五十四年一月、役場新庁舎完成、二階に移転。

昭和六十三年十一月、社会教育課はコミュニティセンターに移転した。

中央公民館は、空家となった。

平成五年十月、生涯学習の拠点としてのグリーン文化ホールみそめ館完成、庶務課　社会教育課は生涯学習課と課名も変更となり、共に移転、現在にいたっている。

三　社会教育委員と公民館運営審議会

社会教育委員会は、社会教育法により市町村に委員を置き、委員の設置、定数、任期等は条例で定められ、任期二年一〇名以内で教育委員会が委嘱している。

委員は、学校教育及び社会教育関係者並びに学識経験者で構成され、職務として、社会教育の諸計画の立案、教育委員会の諮問に応じるとなっている。

公民館運営審議会も、社会教育法により設置され、審議会の委員は社会教育委員と同じである。

教育改革によって、生涯学習の振興が提唱され、審議会の委員は社会教育に生涯学習が叫ばれてきた。

社会教育委員並びに公民館運営審議会委員は、こうした生涯学習社会において、人々の生きがい活動を支援し、平成時代の社会教育の推進について活躍されてきた。

委員は次のとおり（平成元年以降分）

平成元年　今森通夫、兼廣晨史、北之園緑、笹峯純隆、岩元保雄、二見剛史、山村シゲ、上原正大

平成二年～三年　岩元喜吉、塩入薫、山下勝義、川添陸夫、岩元保雄、岩元喜吉、山下勝義、山村シゲ、町田良夫、塩入薫、井上洋一、古道康博、末重益雄、笹峯純隆、田上正人、深見正夫、重森吉利

平成四年　田上正人、古道康博、時任陽一郎、今吉歳晴、中馬秋雄、町田良夫、久木迫ヨシ子、重森吉利、岩元喜吉、岩元保雄、榎本眞人、城戸内義人

平成五年　田上正人、古道康博、時任陽一郎、今吉歳晴、中馬秋雄、町田良夫、久木迫ヨシ子、重森吉利、岩元喜吉、岩元保雄、榎本眞人、城戸内義人、向井田孜、笹峯勉、丸山忍、樺山資邦、榎本眞人、城戸内義人、永山作二、長野久、町田良夫、久木迫ヨシ子、丸山忍、岩元喜吉、満塩郁夫

平成六年　樺山資邦、榎本眞人、城戸内義人、永山作二、長野久、町田良夫、久木迫ヨシ子、丸山忍、岩元喜吉、満塩郁夫、牧田安博、松村治、

平成八年　竹下陸旺、西溜丸美
茶屋晃一、牧田安博、岩下哲郎、丸山幸男、長野久、町田良夫、久木迫ヨシ子、竹下陸旺、岩元喜吉、満塩郁夫
平成九年　茶屋晃一、牧田安博、丸山幸男、長野久、町田良夫、久木迫ヨシ子、竹下陸旺、岩元喜吉、満塩郁夫、山元春行、今吉康己、横山秀行、竹宮鐵郎
平成十年　牧野好捷、上村清志、松村治、加世田豊治、横山秀行、町田良夫、森田ミヨ子、今吉康己、岩元喜吉、満塩郁夫
平成十一年　牧野好捷、上村清志、加世田豊治、横山秀行、町田良夫、森田ミヨ子、今吉康己、岩元喜吉、満塩郁夫、岩澤豊、西　政志、今村日出子
平成十二年　満塩郁夫、横山秀行、今村日出子、木佐木俊春、鶴薗佑子、笹峯勉、二見朱實、永山隆信、鎌田紀幸、蔵園幸子
平成十三年　満塩郁夫、横山秀行、今村日出子、木佐木俊春、鶴薗佑子、笹峯勉、二見朱實、永山隆信、鎌田紀幸、蔵園幸子、植村和信、鈴木哲也　池澤正人、西溜丸美
平成十四年～十五年　植村和信、鈴木哲也、池澤正人、西溜丸美竹下大介、満塩郁夫、木佐木俊春、二見朱實、蔵園幸子、鶴薗佑子
平成十六年　甲斐惠子、鈴木哲也、満塩郁夫、二見朱實、野村勝次、西溜丸美、鶴薗佑子、木佐木俊春、蔵園幸子、竹下大介

四　文化財保護審議会

文化財保護審議会は、昭和二十五年に制定された文化財保護法により「文化財の保存活用を適正に行う」ため、溝辺町教育委員会に昭和五十三年四月設置された。

教育委員会は、条例で定める文化財の指定、解除など保護管理を行うこととなっているが、文化財保護審議会条例より、教育委員会からの諮問に応じ、文化財の保存及び活用について調査審議し、これらに関し教育委員会に建議することとなっている。

設置以来、溝辺町の文化財保護に積極的に取り組み、顕著な功績をあげている。

主なものとして、昭和五十七年に五件（その内の鷹屋神社の檜は、平成五年襲来した台風七号により倒木し、消滅した）、平成三年に四件の文化財の指定を答申し、現在も保存活用に努めている。また昭和五十三年には、町内に点在している七九件もの文化財を網羅した小冊子、『溝辺の文化財』を発刊。町内外を問わずさまざまな分野で活用している。

委員の委嘱は教育委員会でなされ、任期は二年である。近年、市町合併が本格的に進むなか、溝辺町の文化財保護についての方針を明確にし、活路を見出したい。

委員は次のとおり。（平成元年度以降分）

平成元年度　岩元喜吉、岩元亨、松山寿、
上原正大、鮫島貞男
平成二～五年度　上原正大、岩元喜吉、鮫島貞男
岩元亨、松山寿
平成六～七年度　上原正大、岩元喜吉、鮫島貞男
岩元亨、鳥丸萩夫
平成八年度　上原正大、鮫島貞男、鳥丸萩夫
向井田孜、岩元亨
平成九年度　上原正大、鮫島貞男、鳥丸萩夫
向井田孜、岩元亨（九月三十日まで）
竹ノ内秀征（十月一日から）
平成十年度～十一年度　上原正大、鮫島貞男、
山口隆治、向井田孜、竹ノ内秀征
平成十二年度～十三年度　上原正大、山口隆治、
竹ノ内秀征、大野道夫、西野豊治
平成十四年度　山口隆治、竹ノ内秀征、大野道夫
西野豊治、岩元英雄
平成十五年度　山口隆治、大野道夫
西野豊治、岩元英雄
竹ノ内秀征（十一月六日まで）
海江田弘（十一月七日から）
平成十六年度　山口隆治、大野道夫、西野豊治
岩元英雄、海江田弘

第二章　溝辺町教育行政の重点施策

一　基本方針

溝辺町教育委員会は、県教育委員会の教育行政の重点施策や本町の町民憲章・総合計画の基本理念・構想等を踏まえ、生涯学習の観点に立って主体性・創造性・国際性を備え、人間性豊かでたくましく生きる町民の育成を目指して、活力ある教育の振興を図ります。

このために、「本町の教育的伝統や風土を生かした全人教育・生涯学習の推進に努める」ことを基本方針として、時代を超えて変わらい価値のあるものを大切にするとともに、社会の変化にも的確かつ柔軟に対応する教育を推進します。

その推進に当たっては、学校・家庭・地域社会がそれぞれの役割を十分に果たしながら、より一層の協力と連携のもと、体験活動等を通して幼児期からの「心の教育」の充実に努めるとともに、基礎基本の確実な定着や個性の伸長を図り、自ら学び自ら考える力や、豊な人間性、健康や体力等の「生きる力」を備えた青少年の育成に努めます。また、町民が潤いのある充実した人生を送ることができるよう、生涯学習の推進に努めます。

二　施策体系

[基本目標]

あしたをひらく心豊かな人・文化づくり

[基本方針]

郷土の教育的な伝統や風土を生かした全人教育・生涯学習の推進に努める。

[重点施策]　第10図

- 生涯学習の推進
  - 推進体制の充実
  - 学習機会の拡充
  - 学習歴活用の環境づくり
- 学校教育の充実
  - 学力の向上
  - 調和のとれた児童生徒の育成
  - 教職員の人事管理と資質向上

- 特色ある学校づくり
  - 教育環境の整備・充実
- 社会教育の充実
  - 社会教育諸条件の整備・充実
  - 家庭教育・成人教育の充実
  - 青少年教育の充実
- 文化の高揚
  - 文化活動の促進
  - 文化財の保存活用
- スポーツの振興
  - 推進体制の充実
  - スポーツ活動の充実
- 新時代に対応する教育の推進
  - 国際化への対応
  - 情報化への対応

三　生涯学習の推進について

(一) 社会教育から生涯教育へ

昭和二十四年に社会教育法が制定されて以来、時代に応じて社会教育に関する様々な建議が行われ、それぞれの時期における社会教育の施策推進上の指針が示されてきた。

本町の社会教育行政も、これらの国の指針を受け、住民のニーズに応えるべく、広く町民に社会教育活動を推進しながら、公民館施設等の社会教育施設を整備するなど、社会教育行政としてはその役割が担われてきたところである。

しかし、著しい経済発展等がもたらした住民の生活態様が変化した現代社会において、高度で多様な学習機会の充実が求められ、平成二年六月「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」が制定された。それに伴い、本町でも平成五年十二月、「生涯学習推進会議」が設立され、町民が気軽に自ら進んで様々な活動を行うための施策を進めて行くようにした。推進会議では、「いきいきタウン部会」「しなやかヘルス部会」「さわやかライフ部会」「すこやかジュニア部会」等の専門部会を設け、社会教育分野のみならず、保健・福祉・文化・産業・経済等のすべての部門において、住民の日常生活における生涯学習の定着化を提唱してきた。その後、平成十四年度からは次のような考え方で、生涯学習の推進に努めている。

(二) 基本的な考え方

①高齢化の進展、情報化の進展、国際化の進展など社

会の変化に、絶えず新たな知識・技術を習得する必要が生じている。

②町民一人一人が、健やかで生きがいのある人生を送るとともに、潤いのある郷土社会の実現を図るため、生涯にわたり、自発的な意思に基づいて、自分に適した方法等により、継続的に学習できる環境を総合的に整えることが重要である。

③そのために、町民が自己研鑽に努め、生涯の各時期における様々な課題に主体的に取り組めるよう、関係課、団体等と相互に緊密な連携を取りながら、多様な学習機会を体系的に提供することにより、生涯学習社会の実現を目指す。

④[基本目標]

・元気で存在感のあるまち（人輝くまちみぞべ）」を目指して

[二つの力点]

・生きがいのある人生（個性豊かな人づくり）の実現

・ふれ合い学び合う社会（潤いと活気のある地域づくり）の実現

この趣旨が十分生かされるよう、関係者及び町民の理解を更に得られるよう、啓発資料の活用、研修会の開催、イベント等での紹介に努めていくとともに、関係課が生涯学習の観点に立って、具体的な学習事業の推進に努める。事業の推進に当たっては、生涯学習課が中心になって、推進体制の充実、学習機会の拡充、学習歴活用の環境づくりに努力する。

第三章　学校教育

一　指導行政の重点

(一)　学力の向上

(1)学習指導の充実

・的確な実態把握

・適切な指導計画作成とわかる授業の創造

・基礎的・基本的事項の定着と創造性や自己教育の育成

・指導法の改善

・姶良教育事務所学力向上努力点・・「ラスト十五分のチャレンジ」「デ・ト・ニ」学習の推進

・教育委員会学力向上努力点[三速]・・学年に応じた「速読」「速書」「速算」の実践
・「総合的な学習時間の実践」
・習熟度別指導・少人数指導

(二)調和のとれた児童生徒の育成

(1) 保健体育の充実
・児童生徒の健康・体力の保持増進
・性教育や心の健康教育推進
・学校・家庭・地域社会及び関係機関・団体との連携
・健康で安全な生活を営むための基礎的な能力と態度の育成
・「食」に関する指導の充実

(2) 道徳教育の充実
・基本的生活習慣の確立と道徳的実践力を備えた児童生徒の育成
・郷土のよさを生かした心の教育
・豊かな体験を通した指導の実践
・「心のノート」の活用
・地区研究指定『道徳』「陵南小学校」への指導助言

(3) 生徒指導の充実
・個性豊かで心身ともにたくましい、思いやりのある児童生徒の育成
・心に届く生徒指導の態勢の確立
・三者連携を密にして学校・家庭・地域社会の教育力を高める
・いじめや校内暴力、不登校に対処するため、総合的対策の推進
・「喫煙○運動」の推進

(4) 進路指導の充実
・職業感や目的意識をもって、将来の生き方を考えさせる
・主体的に進路選択・決定できるように指導の充実に努める
・職場体験学習や体験入学等の推進
・進路相談の計画的実施

(5) 人権同和教育の充実
・なくそう差別、築こう明るい社会
・人権同和教育についての正しい認識と理解を深める
・人権同和教育講演会の充実

(三)教職員の資質向上

(1)　教職員研修の充実
・教職員の資質向上
・職責感の高揚を図るための研修の充実
・諸研修への積極的参加奨励
・町教科部会等の充実
・評価の研究・研修

(四)　特色ある学校づくり

(1)　学校経営の充実（幼稚園を含む）
・各学校の課題を明確にし、課題解決に努める
・経営方針の具体化・実践
・郷土に根ざした教育活動の展開と特色ある学校づくりに努める
・一校一自慢
・地域が育む「かごしまの教育」県民週間（十一月第一週）に伴う溝辺町参観週間の実施

(2)　施設設備の充実
・教育内容、方法の多様化、情報化の進展に対応した施設設備の充実に努める
・教育環境の整備、校舎、体育館整備

(3)　特別支援教育の充実
・障害児とその教育に対する理解・認識
・一人一人の能力等に応じた「生きる力」を育む教育の推進

(4)　幼稚園の教育の充実
・教職員の指導力を高め、発達の特性に応じた指導の充実
・三歳児教育の充実を掲げている

二　小学校

(一)　溝辺小学校

教育目標と重点施策

教育目標
明るく礼儀正しく「生きる力」を確かに身につけた人間性豊かな子どもの育成

校　訓
正しく・かしこく・つよく

重点施策
・基礎学力の定着と分かる授業の実践

・生徒指導の充実と心の教育推進
・体力気力づくりの推進
・総合的な学習に関する研究推進
・道徳教育の充実
・保健・安全・給食指導の充実
・人権同和教育の充実
・読書指導の充実
・特別指導の充実
・職員研修の充実
・環境整備と美化活動の充実

児童の推移

第248表参照(499頁)

本校の沿革

平成元年八月	陸上部全国少年少女リレー大会出場(県代表)
平成二年十一月	地区教育方法改善研究指定校(算数)研究公開
平成三年三月	町パソコン教育研究指定
平成五年一月	町教育方法改善研究協力校(パソコン活用)研究公開
平成七年二月	町教育方法改善研究協力校研究公開
平成七年十二月	県ＰＴＡ活動研究委嘱公開
平成八年十月	姶良地区教育方法改善研究協力校研究公開
平成十一年十一月	県学校給食コンクール準優良校受賞
平成十二年十一月	県学校給食コンクール優良校受賞
平成十三年一月	韓国培英初等学校との交歓会
平成十三年十月	学校給食部門文部科学大臣賞受賞
平成十三年十月	「総合的な学習」姶良地区研究公開
平成十四年二月	学校創立一二五周年・学校給食部門文部科学大臣賞受賞記念式典
平成十四年五月	みぞべ小学校区『若たか育み会』発足(学校週五日制対策)
平成十四年五月	「みぞべおやじネット二十一」(父親学級)活動開始
平成十四年六月	第十四回歯の衛生週間「加治木ロータリークラブ賞」受賞
平成十五年一月	韓国培英初等学校との交流会

学校の整備等

平成元年九月　校庭整備(排水暗渠工事)　七二八万四千円
平成二年十月　放送室放送器機の整備(AV各教室)　二六五万〇千円
平成四年十月　パソコン整備(十五台)
平成四年十月　体育倉庫温室新設　四二二万三千円
平成九年七月　屋外トイレ設置　三〇八万二千円
平成九年六月　大規模校舎改造工事に伴うプレハブ校舎工事
平成十年一月　大規模校舎改造工事完了　三億一一四〇万三千円
平成十四年四月　セキュリテイシステム　三九万三千円
平成十六年三月　体育館改築設計、監理、工事　二億八一四八万六千円

歴代校長(平成元年　三十五代から)

三十五代　(平成元・四～三・三)　末重益雄
三十六代　(平成三・四～六・三)　田上正人
三十七代　(平成六・四～九・三)　樺山資邦
三十八代　(平成九・四～十三・三)　牧野好捷

溝辺小学校

三十九代（平成十三・四～十六・三）植　村　和　信
四十代　（平成十六・四～　現　在）宮　下　　守

歴代ＰＴＡ会長

平成元年	荒　田　　満
平成二年	神田橋　正　弘
平成三年	小田島　信　男
平成四年・五年	今　吉　歳　晴
平成六年	木佐木　俊　春
平成七年	溝　口　悦　郎
平成八年	迫　間　清　文
平成九年・十年	山　元　春　行
平成十一年	松　元　　深
平成十二年	松　山　茂　樹
平成十三年・十四年	今　島　利　幸
平成十五年・十六年	今　吉　耕　己

(二)　陵南小学校

教育目標と重点施策

教育目標

やる気のある陵南の子どもの育成

校訓

なかよく・かしこく・たくましく

重点施策

・確かな学力の定着と分かる学習指導の展開
・学び方を学び、生きる知恵を身に付けさせる指導・支援
・心に届く指導・支援
・自ら身を守る指導・支援
・差別をなくする指導・支援
・自らを高める研修・研究の実践
・機能的で美しい教育環境
・特色ある学校づくり
・開かれた学校づくり

児童の推移　第248表　参照（499頁）

本校の沿革

平成元年一月　県学校緑化モデル校（紙土発表）
平成元年十月　第二十一回サンライフ南日本花壇コンクール最優秀賞
平成二年四月　文部省「勤労生産学習」研究推進指定校
平成二年九月　地区「特別活動」研究公開
平成二年十月　第二十二回サンライフ南日本花壇コンクール最優秀賞
平成三年四月　県学校環境緑化功労賞
平成三年八月　日韓交流の一環として、図画作品（三四点）・写真・メッセージを大韓民国釜山市培英国民学校へ発送
平成四年二月　文部省「勤労生産学習」研究公開
平成四年二月　日韓交流として培英国民学校から図画作品・壁飾り一点・アルバム一冊届く
平成四年八月　「日韓親善子ども大使」一行一三名表敬訪問のため渡韓
平成七年十二月　県ＰＴＡ活動研究委嘱公開
平成九年一月　「日韓親善子ども大使友好の翼」相互渡航交流となり培英初等学校一行八名来町
平成十一年五月　姶良教育事務所学校訪問
平成十二年八月　町花壇コンクール優秀賞
平成十三年八月　町花壇コンクール優秀賞
平成十五年四月　地区「道徳教育」研究協力校
平成十七年一月　地区「道徳教育」研究の公開

陵南小学校

学校の整備等

平成元年九月　教室、保健室、放送室、事務室、売店の改造　三四三万円
平成元年十月　校庭拡張工事　四一二〇万円
平成三年一月　補助プール(低学年用)付設　一二〇六万七千円
平成三年八月　プール改修工事　四〇一万七千円
平成五年十二月　大規模改造工事　一億八二二一万六千円
平成六年九月　パソコン十二台設置
平成九年一月　屋外トイレ新築　三四八万一千円
平成九年六月　機会警備システム開始
平成十一年八月　校舎空調施設改修工事　三八〇六万三千円
平成十二年六月　プール観覧席新築工事　九九万八千円
平成十四年四月　セキュリテイシステム　四三万九千円

歴代校長(平成元年三十五代から)

三十五代（昭和六十三・四～平成三・三）　北之園　緑
三十六代（平成三・四～五・三）　時任陽一郎
三十七代（平成五・四～七・三）　水間　司
三十八代（平成七・四～十・三）　茶屋晃一
三十九代（平成十・四～十四・三）　上村清志
四十代（平成十四・四～現在）　有村克孝

歴代PTA会長

平成元年・二年　横山公一
平成三年　末重　学
平成四年・五年　笹峯　勉
平成六年　有村国展
平成七年・八年　吉満耕一
平成九年　加世田豊春
平成十年～十二年　馬場勝芳
平成十三年・十四年　福永義和
平成十五年・十六年　濱川吉博

(三) 竹子小学校

教育目標と重点施策

教育目標

自ら考え、心を込めて、精いっぱいやり抜く子を育てる

―歌と花と読書の学校―

校訓

たくましく・かしこく・全力をつくす

重点施策

生涯学習の観点にたって、二十一世紀に生きる人間性豊かな児童の育成を目指し、心に届く教育実践と活力のある学校づくりに努める。

(1) 竹子小学校の歴史と伝統を創造的に継承し、児童・保護者・地域住民の願いや期待に応える特色ある学校づくりに努める。

(2) 課題意識をもち、自ら考え解決していく活動を進める。

(3) 信頼に応え、心に届く確かな教育実践に努める。

児童の推移　第248表参照(499頁)

本校の沿革(平成元年以降)

平成元年四月	町国語研究推進指定校
平成二年二月	県書写コンクール学校奨励賞
平成四年十一月	地区国語研究公開
平成五年十月	南日本花壇コンクール入選
平成六年十月	南日本花壇コンクール銅賞
平成七年十二月	県ＰＴＡ委嘱研究公開
平成八年十月	県優良子ども銀行表彰
平成九年二月	県人権作文コンクール奨励賞
平成十年	緑の少年団[優良少年・少女団体表彰]
平成十一年十一月	韓国培英初等学校来校
平成十三年十一月	緑の少年団[全国育樹祭]参加
十二月	ＧＣサウンド(グリーンクリーン学校賞)
平成十五年一月	韓国培英初等学校来校
四月	[人権の花]運動指定校
平成十六年十月	地域が育むかごしまの教育県民週間オープニング式典で特色ある教

育活動の発表

学校の整備等

平成三年二月　簡易温室農具倉庫設置

平成三年二月　プール改修　三七四万四千円

平成六年九月　パソコン設置(計八台)

平成九年九月　「木のぬくもりを伝える」木製机椅子の導入

平成十年十二月　プール更衣室、体育館倉庫新築工事　七八七万五千円

平成十二年十月　屋内運動場昇降口漏水防止工事　三五七万円

平成十四年一月　大規模改造設計、監理、工事(空調機個別方式)完成　二億六四三四万八千円

平成十四年四月　セキュリティシステム　三三万八千円

平成十五年一月　屋内運動場屋根漏水改修工事　七九九万八千円

歴代校長(平成元年二十八代から)

二十八代　(昭和六十三・四～平成四・三)　今森通夫

二十九代　(平成四・四～七・三)　榎本眞人

竹子小学校

三十代　（平成七・四～十・三）　牧田安博
三十一代　（平成十・四～十三・三）　永山隆信
三十二代　（平成十三・四～現在）　甲斐恵子

歴代PTA会長

平成元年　野村勝次
平成二年　蔵園和寛
平成三年・四年　深見正夫
平成五年　剥岩裕
平成六年・七年　竹下大介
平成八年　丸山幸夫
平成九年　西野伸一
平成十年　外山忠
平成十一年　上井義美
平成十二年　外山広幸
平成十三年　齊藤修
平成十四年　内山健志
平成十五年　日高浩二
平成十六年　西野伸一

三　中学校

(一)　溝辺中学校

教育目標と重点施策

教育目標

自ら意欲的に学び、心豊かに、たくましく生きようとする生徒を育成する。

(1)　自ら学び自ら考え、実践する基盤となる基礎的・基本的事項の定着(学力の向上)

(2)　規範意識や社会性、他人を思いやる心の育成(心の教育)

(3)　豊かな自己実現を目指し主体的、創造的に生きる資質・能力の育成(生き方の教育)

校訓

自主・友愛・明朗

重点施策

・本校の実態に即した調和と統一のある教育課程を編成する。

・教育目標を全教育活動の中で更に具体化し、全職員の連携を図りながら協働実践に努める。
・教育課程の実施に当たっては各教科・領域等の特性を生かすとともに、基礎的・基本的内容の指導を徹底し、個性を生かす指導の充実に努める。
・体験的な活動を重視し、働くことや創造することの喜びを体得させ、勤労・社会奉仕の精神を養うとともに、自らの健全な生き方を探求させる指導に努める。
・教育に関する情報や動向を収集し、自己研鑽に努めるとともに、校内研修を通して指導の工夫改善・充実に努める。
・すべての教育活動の基盤となる教師と生徒及び生徒相互の人間関係の醸成に努める。
・保護者及び地域社会との連携に努め、理解と協力を得ながら一体となって教育を推進する。
・学校の情報発信に努めるとともに、学校評議員制度の活用や保護者等の意見聴取により地域等の意向を把握し学校教育に反映していく。
・目指す学校像・生徒像を掲げ教育目標の達成を期する。

生徒の推移　第248表参照（499頁）

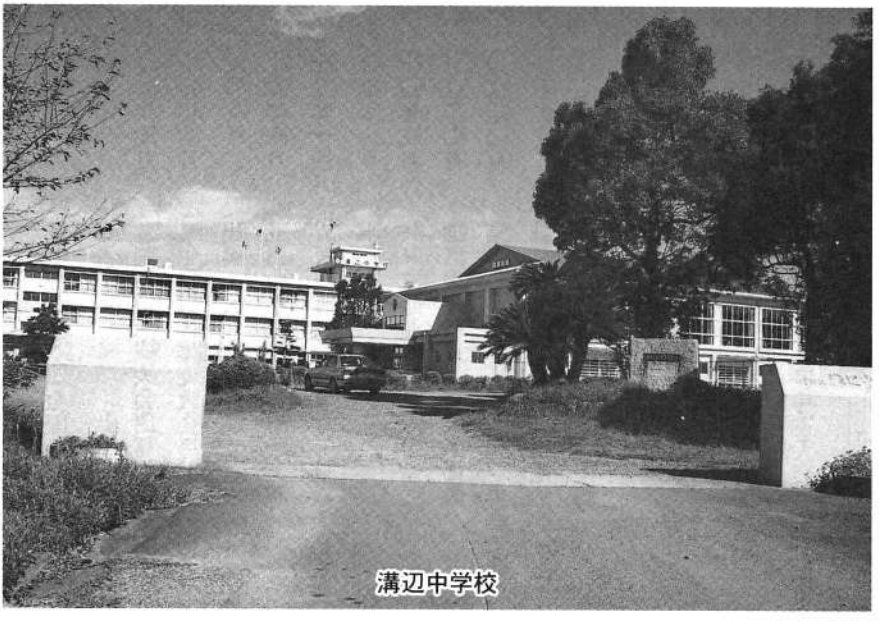
本校の沿革

平成元年二月	池田旗争奪弓道大会女子優勝
平成二年七月	地区総合体育大会野球優勝
平成二年八月	九州中学弓道大会個人一位
平成二年十月	義弘公弓道大会優勝
平成二年十一月	県新人弓道大会個人一位
平成三年七月	全国中学弓道大会出場
平成四年七月	全国中学弓道大会出場
平成五年七月	全国弓道錬成大会出場
平成五年八月	九州中学陸上競技大会出場
平成五年十一月	県作文コンクール特選
平成五年十一月	県児童作曲コンクール学校賞
平成六年六月	地区陸上大会女子総合優勝
平成六年八月	九州中学陸上競技大会出場
平成六年八月	九州中学弓道大会出場
平成六年八月	全国中学陸上競技大会出場
平成六年十一月	南日本花壇コンクール銅賞
平成七年八月	九州中学陸上競技大会出場
平成七年十一月	南日本花壇コンクール銀賞

平成七年十二月　県ＰＴＡ活動委嘱研究公開
平成八年七月　県中学総合体育大会弓道部男子優勝
平成八年八月　九州中学弓道大会男子準優勝
平成八年八月　九州中学陸上競技大会出場
平成八年十一月　文部省指定運動・部活動研究公開
平成九年六月　地区バレーボール大会優勝
平成九年七月　全国中学弓道錬成大会出場
平成九年八月　九州中学陸上競技大会出場
平成九年十一月　創立五〇周年記念式典
創立五〇周年記念事業費　六二一万九千円　記念碑　記念誌　学校整備費　記念講演　ほか
平成十年七月　地区中学校野球大会優勝
平成十一年一月　男子頭髪自由化許可
平成十一年四月　県春季選抜野球大会準優勝
平成十一年七月　県中学総合体育大会弓道部・ソフトテニス部出場
平成十一年七月　全国弓道錬成大会努力賞受賞
平成十一年八月　県ジュニア弓道大会男子優勝
平成十一年十月　「自転車安全モデル校」宣言
平成十二年三月　屋内運動場落成記念式典
平成十二年三月　都城弓まつり「全国弓道大会」女子優勝
平成十二年七月　全国弓道錬成大会出場
平成十二年七月　県中学総合体育大会弓道部・剣道部出場
平成十二年八月　九州中学弓道大会男子優勝
平成十二年十一月　かんぽ作文コンクール郵政大臣賞受賞
平成十三年二月　一・二年生林業体験学習
平成十三年七月　地区中学弓道大会女子優勝
平成十三年七月　県中学総合体育大会弓道部・陸上部・ソフトテニス部出場
平成十四年五月　県下中学校弓道大会準優勝
平成十四年七月　全国弓道錬成大会出場
平成十四年七月　地区総合体育大会秋季大会野球・弓道部優勝
平成十五年七月　県中学総合体育大会陸上部出場
平成十五年七月　県夏期ジュニア弓道大会男子団体第三位

学校の整備等

平成元年九月　体育倉庫増築工事　三二七万五千円
平成二年六月　下校庭トイレ改修工事(廃棄処分済)
平成二年十一月　体育館舞台幕設備(旧体育館)
平成三年七月　体育館屋根塗装工事(旧体育館)　五〇五万六千円
平成四年九月　パソコン教室改装　一六〇六万一千円
平成八年三月　屋内消火栓設備改修　五二五万三千円
平成十年二月　校舎大規模改造工事　三億八六八四万七千円
平成十二年三月　屋内運動場改築設計監理工事　三億一二三八万二千円
平成十三年三月　上校庭排水施設工事　一〇五万円
平成十三年八月　防球ネット整備　四八二万九千円
平成十四年四月　セキュリテイシステム工事　四一万三千円
平成十五年九月　下校庭ネットフェンス取替工事　一九八万円
平成十五年十月　テニスコート改修工事　二二二万六千円


溝辺中学校

歴代校長(平成元年代から)

十一代　(昭和六十二・四・～平成二・三)　兼廣晨史
十二代　(平成二・四～五・三)　古道康博
十三代　(平成五・四～九・三)　岩下哲郎
十四代　(平成九・四～十一・三)　竹宮鐵郎
十五代　(平成十一・四～十三・三)　鎌田紀幸
十六代　(平成十三・四～現在)　鈴木哲也

歴代PTA会長

平成元年　川添睦夫
平成二年・三年　隈元為次
平成四年　野村勝次
平成五年・六年　永山作二
平成七年・八年　剥岩裕
平成九年　今吉歳晴
平成十年・十一年　岩澤豊
平成十二年・十三年　竹下大介
平成十四年　岩元博昭
平成十五年　西野伸一
平成十六年　松元深

(二)　陵南中学校

教育目標と重点施策

教育目標

豊かな心と自ら学ぶ意欲を持ち心身ともに調和がとれ、目的意識を備えた生徒の育成

校訓

自主・自立

重点施策

・新学習指導要領の趣旨に則して、生徒や地域の実態を踏まえ、ゆとりの中に特色ある教育を推進し、「生きる力」を育む教育課程を編成する。

特に基礎学力の定着・「総合的な学習の時間」啓発的体験学習を重視した進路指導の教育課程編成の工夫とその完全実施を図る。

・学校の教育課題の共有化を図り相互理解と協力のもとに、生徒一人一人に応じたきめ細かな教育を推進する。

・生徒活動を基盤にした学年・学級経営の充実を通し

て学級(学年)集団の質を高め、生徒一人一人を生かす。
・生徒会活動の充実を図り、学校行事の企画・運営において生徒の創意を十分に生かす。
・特色ある学校づくりとして、基礎学力の向上・充実した運動部活動・生徒会活動の活性化(学校行事の充実・合唱の日常化)を柱におく。
・習熟の程度に応じた指導及び積極的な機器利用を視点にした学習指導法の改善を全校的にはかる。
・校内研修の充実と実践をとおして、説明責任を果たせる絶対評価の段階的な質の向上を図る。
・学校・家庭・地域が一体となる教育を推進する。
・施設設備を計画的に組織し、校舎内外の環境整備に努める。

生徒の推移　第248表参照(499頁)

本校の沿革

平成元年六月	全日本弓道練成大会六位入賞
平成元年十一月	県中学校女子テニス秋季大会優勝
平成二年三月	全国テニス大会ベスト一五位
平成二年五月	地区北部野球大会優勝
平成二年七月	地区中学校総合体育大会
	女子テニス団体優勝
平成二年七月	男子弓道団体優勝
	県中学校総合体育大会
平成二年八月	女子テニス団体優勝
	女子テニス個人入賞二位
	九州中学校総合体育大会
平成二年八月	女子テニス個人入賞三位
	世界ジュニア軟式庭球大会女子三位
平成二年十一月	地区研究協力校(音楽科)研究公開
平成三年十一月	県中学校春季野球大会三位
平成四年三月	九州軟式庭球鹿児島大会出場
平成四年四月	県指定研究協力校(学校給食)
平成四年五月	第一回エアポート陵南旗選抜野球大会開催
平成四年五月	地区中学校総合体育大会
	ソフトテニス　弓道　優勝
平成四年五月	全九州中学弓道大会三位入賞
平成五年一月	県中学ソフトテニスインドア大会準優勝

平成五年一月　県中学音楽コンクール春の祭典
　　二年二組　金賞受賞
平成五年一月　弓道場「至誠館」と命名
平成五年六月　県中学校弓道大会準優勝
平成五年十一月　県学校給食優良校として受賞
平成七年十月　学校給食優良校として文部大臣賞受賞
平成九年十一月　文部省指定「機器利用」研究公開
平成十一年五月　第八回エアポート陵南旗選抜野球大会優勝
平成十一年六月　地区中学陸上大会三段跳び優勝
平成十一年十月　県中学新人弓道大会二年男子個人優勝
平成十二年四月　春季県中学野球大会優勝
平成十二年五月　宮崎女子テニス研修大会優勝
平成十三年八月　九州地区卓球大会個人出場戦
平成十三年八月　全国中学卓球大会個人三回戦敗退
平成十三年十二月　全日本卓球選手権大会出場
平成十五年一月　県中学音楽コンクール春の祭典金賞
平成十五年四月　県春季選抜野球大会優勝
平成十五年五月　県下中学校春季弓道大会優勝
平成十五年八月　弓道九州大会準優勝
平成十五年十一月　県下中学校秋季選抜野球大会
平成十六年三月　九州中学選抜野球大会準優勝
平成十六年四月　県春季選抜野球大会優勝

学校の整備等

平成四年四月　茶給食施設完成
平成四年十月　パソコン教室改修工事　一〇二五万八千円
平成五年三月　テニスコート二面移転新設　四七万九千円
平成九年一月　屋外トイレ整備　三六三万六千円
平成十三年十月　バックネット整備　三七九万七千円
平成十四年十月　テニスコート改修工事　一四四万四千円
平成十五年三月　プール補修工事　三〇五万五千円

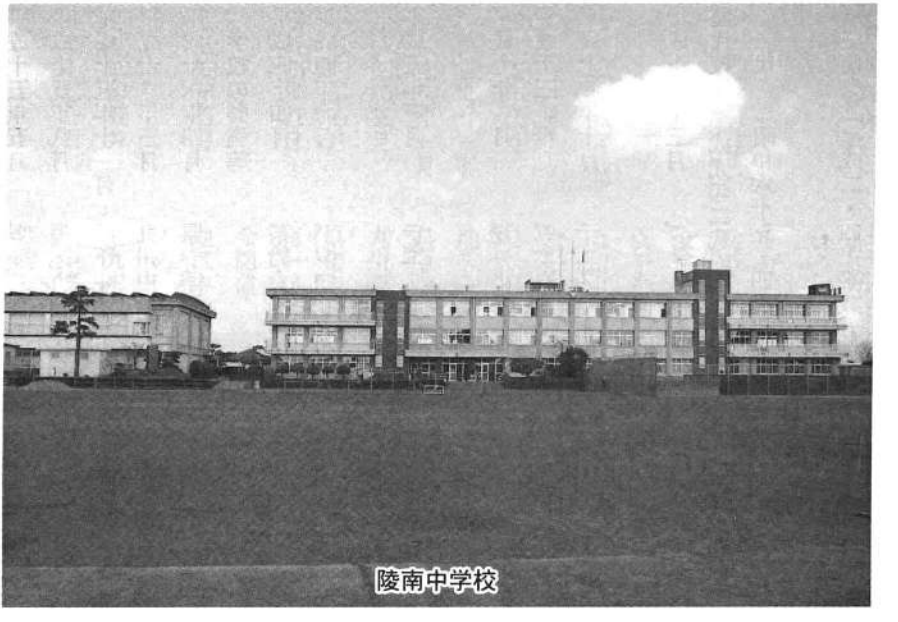
歴代校長（平成元年二代から）

二代　（昭和六十三・四～平成二・三）　下尾崎　正　信
三代　（平成二・四～平成五・三）　井　上　洋　一

四代（平成五・四～平成七・三）　城戸内　義人
五代（平成七・四～平成十一・三）　松村　治
六代（平成十一・四～平成十四・三）　西　政志
七代（平成十四・四～　現在）　今村　貞一

歴代PTA会長

平成元年　木佐木　信廣
平成二年・三年　笹峯　純隆
平成四年　末原　純男
平成五年　横山　公一
平成六年　住吉　康雄
平成七年　西溜　丸美
平成八年・九年　笹峯　勉
平成十年～十二年　加世田　豊春
平成十三年　上原　勝美
平成十四年～十六年　福永　博明


陵南中学校

四　児童生徒数の推移

平成三年からの児童生徒の推移は、別表第248表のとおりであるが、平成三年を一〇〇とした場合、平成十五年の児童数は、七三・四％　生徒数は、七六・八％で二六・六～二三・二％の減となっている。

第248表　児童生徒数・学級数の推移

学校名	年度	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
溝辺小学校	児童数	350	339	328	302	281	262	252	252	245	233	234	232	216	207
	学級数	13	13	11	12	12	11	11	11	10	9	9	9	8	6
陵南小学校	児童数	317	322	308	296	298	299	299	287	305	294	300	284	280	281
	学級数	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11	11
竹子小学校	児童数	104	102	108	95	93	89	86	85	81	77	72	72	70	63
	学級数	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
計	児童数	771	763	744	693	672	650	637	624	631	604	606	588	566	551
	学級数	31	31	29	30	30	29	29	29	28	27	27	26	25	23
溝辺中学校	生徒数	221	225	212	237	243	244	221	199	184	175	174	170	153	157
	学級数	7	7	7	8	8	8	7	7	7	7	7	6	7	7
陵南中学校	生徒数	162	160	160	156	150	146	137	143	137	157	146	154	141	143
	学級数	6	6	6	6	6	6	5	5	5	6	6	6	6	6
計	生徒数	383	385	372	393	393	390	358	342	321	332	320	324	294	294
	学級数	13	13	13	14	14	14	12	12	12	13	13	12	13	13

（注）溝辺小学校　　溝辺中学校は特殊学級を含む　　資料　　学校基本調査

五　児童生徒の体位・発育の状況

溝辺町学校保健会では、毎年体位・発育の状況等を調査し、全国及び鹿児島県と比較して今後の資料としている。

平成元年・平成五年・平成十年・平成十五年の調査資料によると、平成元年には身長　体重　胸囲　座高において、全国・本県を下回ったものが多く、平成五年では若干上回った年齢もある。

平成十年には、身長は男子は下回り、女子は上回っている年齢もあり。体重については、男女とも上回っている年齢もある。座高においては男女とも全国を上回っているのが増えている。

年を追うごとに体位等全国本県に近づきつつある。

比較表は別表のとおりである。

年齢は四月一日現在

（資料　溝辺町学校保健会）

第249表　全国、県及び本町の児童、生徒体位比較

①　身　長　（平成元年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	116.7	122.3	127.9	133.0	138.2	144.1	150.9	158.4	164.1
	本県	115.6	121.3	126.7	131.0	137.0	142.7	149.4	157.0	162.9
	本町	115.2	120.3	127.6	131.8	137.3	141.8	149.1	156.8	162.1
	溝辺	114.0	121.0	126.8	130.5	136.6	140.1	148.0	154.9	160.5
	陵南	116.2	119.5	127.2	132.1	138.2	142.9	150.1	158.7	163.6
	竹子	115.5	120.6	128.8	132.8	137.2	142.4			
女子	全国	115.9	121.6	127.6	132.9	139.3	145.9	151.2	154.6	156.3
	本県	115.0	120.6	126.4	132.0	138.2	144.9	150.4	153.9	155.7
	本町	114.8	119.9	127.8	133.9	137.9	145.8	151.3	154.6	156.4
	溝辺	115.0	120.1	125.6	132.3	139.2	148.5	150.9	154.2	156.9
	陵南	114.7	119.7	126.3	134.2	138.6	143.5	151.6	155.0	155.9
	竹子	114.8	119.8	131.5	135.3	135.9	145.5			

② 体　重　（平成元年度）　(kg)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	21.4	23.9	26.9	30.0	33.5	37.4	42.9	48.3	53.6
	本県	21.0	23.4	26.2	29.1	32.4	36.1	41.1	47.0	52.1
	本町	20.6	32.2	26.4	28.7	33.1	34.1	40.0	45.9	51.0
	溝辺	20.1	23.6	25.1	29.4	31.7	34.6	39.5	44.8	49.0
	陵南	20.9	22.7	25.3	28.6	32.5	35.1	40.5	46.9	53.0
	竹子	20.9	23.3	28.9	28.1	35.1	32.7			
女子	全国	20.9	23.3	26.3	29.6	33.6	38.5	43.6	47.3	49.9
	本県	20.6	22.9	25.8	28.9	32.8	37.6	42.8	46.8	49.8
	本町	20.3	22.2	26.2	30.4	32.5	38.2	43.3	47.6	49.0
	溝辺	20.2	22.5	25.5	29.3	33.4	41.2	44.1	46.0	49.8
	陵南	19.9	25.7	25.7	32.3	33.5	36.8	42.5	49.1	48.1
	竹子	21.0	27.3	27.3	29.6	30.5	36.7			

③ 胸　囲　（平成元年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	57.9	60.0	58.4	61.8	64.2	65.3	70.9	70.8	80.3
	本県	57.4	59.5	62.5	64.9	67.5	70.2	73.5	75.9	79.2
	本町	57.4	59.6	61.8	64.1	66.5	69.1	72.2	74.9	79.3
	溝辺	56.2	59.6	62.4	63.8	67.7	68.0	72.2	73.6	78.1
	陵南	58.0	59.3	60.3	63.1	65.8	68.2	71.9	76.1	80.4
	竹子	58.2	59.9	62.0	64.2	67.1	68.6	72.5		
女子	全国	56.6		64.9	64.1	70.3	67.2	75.3	77.8	79.7
	本県	56.0	58.6	61.1	63.7	67.0	70.9	74.4	77.3	79.4
	本町	56.2	57.9	61.1	62.8	66.0	70.0	74.1	77.3	78.8
	溝辺	55.2	57.8	60.8	64.4	66.1	70.9	74.5	75.9	79.5
	陵南	56.2	57.0	60.2	62.8	65.8	72.0	73.7	78.7	78.0
	竹子	57.1	58.0	60.5	66.1	67.2	69.9			

④　座　　高　（平成元年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	67.3	67.8	70.3	72.5	74.7	77.2	80.5	84.1	87.2
	本県	64.7	67.3	69.8	72.0	74.2	76.7	79.7	83.4	86.6
	本町	64.1	66.5	70.0	71.2	74.4	75.8	79.7	83.6	86.2
	溝辺	64.0	66.5	69.6	70.7	73.6	75.0	79.4	82.8	85.4
	陵南	63.8	65.8	69.3	71.0	74.6	76.5	79.9	84.6	86.9
	竹子	64.6	67.1	71.1	71.8	74.9	75.9			
女子	全国	64.8	67.4	70.0	72.5	75.4	78.7	81.7	83.5	84.5
	本県	64.4	66.9	69.5	72.1	75.1	78.4	81.4	83.3	84.3
	本町	64.1	66.0	69.4	72.9	74.7	78.7	81.4	83.4	83.9
	溝辺	64.5	66.5	67.8	71.4	76.0	80.0	81.7	83.6	83.1
	陵南	63.8	65.7	68.5	73.7	74.5	77.7	81.1	84.0	84.0
	竹子	63.9	65.8	72.0	73.5	73.5	78.4			

第250表　全国、県及び本町の児童、生徒体位比較

①　身　長　（平成5年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	116.8	122.5	128.1	133.5	138.7	144.6	151.9	159.3	165.0
	本県	115.7	121.7	127.1	132.4	137.6	143.3	150.2	157.9	163.8
	本町	115.3	121.5	126.9	132.7	137.0	142.5	150.4	157.6	164.1
	溝辺	114.8	121.5	126.6	132.9	135.2	143.1	150.8	156.3	163.4
	陵南	115.7	123.2	126.4	133.5	138.3	142.4	150.0	158.9	164.7
	竹子	115.5	119.8	127.8	131.8	137.7	142.0			
女子	全国	115.9	121.7	127.4	133.2	139.8	146.4	151.7	155.0	156.6
	本県	115.3	120.9	126.6	132.3	138.8	145.4	151.0	54.3	156.0
	本町	115.6	121.0	125.8	132.1	138.2	143.8	150.8	155.7	156.6
	溝辺	115.5	119.9	125.9	131.1	140.3	143.1	150.8	155.4	156.3
	陵南	115.4	121.8	127.5	131.9	139.1	144.2	150.7	156.0	156.8
	竹子	116.0	121.3	124.0	133.0	135.2	144.3			

※小学校4年生，中学校の3年生の男子及び，小学校1・2年生，中学校2・3年の女子が県平均を上回っている。特に中学3年生の女子は全国平均よりも良い。

② 体　重　（平成5年度）　(kg)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全　国	21.6	24.2	27.2	30.6	34.2	38.2	44.0	49.4	54.7
	本　県	21.2	23.7	26.6	29.8	33.2	36.9	42.1	47.8	53.0
	本　町	20.6	24.3	26.2	28.9	32.6	35.9	41.1	45.9	51.9
	溝　辺	19.4	24.6	26.5	28.1	30.5	37.8	40.7	45.0	51.7
	陵　南	20.8	24.0	25.0	29.9	33.3	33.9	41.5	46.7	52.1
	竹　子	21.6	24.3	27.2	28.8	34.1	36.1			
女子	全　国	21.1	23.6	26.6	30.1	34.2	39.1	44.3	47.8	50.5
	本　県	20.9	23.3	26.1	29.5	33.6	38.3	43.7	47.3	40.9
	本　町	21.2	23.1	26.0	28.8	33.5	36.2	44.3	50.8	50.8
	溝　辺	21.9	23.7	25.5	29.3	33.0	36.2	43.6	48.4	49.9
	陵　南	20.6	23.1	26.8	28.0	33.6	36.6	45.0	53.1	51.6
	竹　子	21.2	22.7	25.7	29.1	34.0	36.0			

※男子が小学校2年生，女子では小学校1年生と中学校の全学年が県の平均より良い。

③ 胸　囲　（平成5年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全　国	58.1	60.3	62.8	65.4	68.0	70.8	74.2	77.5	80.8
	本　県	57.5	59.6	62.0	64.4	67.1	69.6	72.8	76.4	79.7
	本　町	57.3	59.9	61.2	65.9	66.1	68.0	71.4	74.6	78.3
	溝　辺	57.9	60.8	61.8	62.9	65.6	70.3	71.3	74.3	78.2
	陵　南	57.2	60.2	60.9	63.9	67.0	66.6	71.5	74.9	78.4
	竹　子	56.8	58.9	61.0	62.8	65.9	67.2			
女子	全　国	56.7	58.8	61.3	64.2	67.5	71.4	75.8	78.2	80.2
	本　県	56.2	58.1	60.5	63.2	66.6	70.4	75.1	77.9	79.8
	本　町	55.8	57.4	59.9	62.0	66.1	67.6	75.4	80.6	80.5
	溝　辺	57.4	58.5	60.0	62.8	66.0	67.3	74.0	78.1	79.7
	陵　南	55.8	58.2	60.4	62.1	66.5	68.0	76.9	83.1	81.3
	竹　子	54.2	55.7	59.3	61.1	65.9	67.5			

※男子は，ほんどの学年で町平均が県平均を下回っている。女子は，小学生はすべての学年で，県平均を下回っている。全体的に溝辺町の子ども達は，胸囲は小さい。

④　座　高　（平成5年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	65.2	67.9	70.4	72.7	75.0	77.5	80.9	84.5	87.6
	本県	64.8	67.4	70.0	72.3	74.6	76.9	80.0	83.8	87.0
	本町	64.8	67.0	69.0	73.8	73.9	76.0	80.5	83.1	87.1
	溝辺	64.3	67.1	68.4	72.4	72.6	75.7	80.0	82.1	86.8
	陵南	64.9	67.6	69.2	73.2	75.0	76.5	80.5	84.1	87.5
	竹子	65.2	67.1	69.5	72.1	74.1	76.0			
女子	全国	64.7	67.4	70.0	72.7	75.8	79.0	82.0	83.7	84.7
	本県	64.4	67.0	69.6	72.3	75.5	78.7	81.7	83.5	84.4
	本町	64.9	66.9	68.9	71.8	74.6	77.7	81.7	84.4	84.7
	溝辺	64.6	66.1	68.2	70.7	74.3	77.3	81.8	84.0	84.6
	陵南	64.7	66.9	69.9	72.3	75.8	78.7	81.7	84.8	84.8
	竹子	65.5	67.9	68.6	72.5	73.7	77.3			

※男子は，小4と中1，中3県平均を上回っている。女子は，中学生のすべての学年で町平均が県平均を上回っている。

第251表　全国、県及び本町の児童、生徒体位比較

①　身　長　（平成10年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	116.7	122.6	128.3	133.5	139.0	145.0	152.3	159.7	165.3
	本県	115.6	121.3	127.5	133.0	137.8	144.0	151.1	158.5	164.6
	本町	115.5	122.2	128.0	133.3	138.3	144.2	151.5	158.0	164.9
	溝辺	115.3	123.0	127.8	133.5	139.1	143.7	150.1	157.0	163.8
	陵南	117.2	122.8	127.1	134.2	137.5	144.6	152.8	158.9	165.9
	竹子	113.9	120.7	129.2	132.2	138.3	144.2			
女子	全国	114.7	121.4	126.6	132.0	139.0	147.4	152.1	155.1	156.8
	本県	115.4	120.7	126.7	133.1	139.5	146.7	151.7	154.5	156.3
	本町	115.0	122.0	127.2	131.8	140.6	148.5	152.5	155.6	155.9
	溝辺	115.1	121.5	129.1	132.0	139.8	147.4	152.8	156.7	155.9
	陵南	114.7	121.4	126.6	132.0	139.0	147.4	152.2	154.5	155.9
	竹子	115.2	123.0	125.8	131.3	142.9	150.7			

※　小学男子1年以外は全国あるいは県平均を上回っている。女子は1・4年以外は全国平均を上回っている。中学男子の2年・女子の3年以外は,全国あるいは県平均を上回っている。

② 体　重　（平成10年度）　(kg)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	21.7	24.5	27.7	31.2	34.9	39.1	44.6	49.9	54.9
	本県	21.3	23.9	27.3	30.6	34.3	38.1	43.2	48.7	53.7
	本町	21.5	25.6	27.4	32.3	34.3	39.5	43.6	47.3	53.1
	溝辺	21.3	24.9	27.2	33.2	34.1	39.9	43.3	48.9	51.6
	陵南	22.5	24.9	27.2	32.7	33.8	39.4	43.8	45.6	54.5
	竹子	20.7	24.1	27.7	30.9	35.1	39.3			
女子	全国	21.2	23.8	27.0	30.5	34.8	39.8	44.7	47.9	50.4
	本県	21.1	23.3	26.6	30.1	33.8	41.1	44.3	47.2	50.0
	本町	20.6	24.7	26.2	28.6	35.0	41.4	45.0	46.6	49.2
	溝辺	20.7	23.2	27.0	28.9	32.5	41.7	45.8	47.9	50.0
	陵南	20.5	23.9	26.5	28.9	33.9	40.3	44.1	45.3	48.3
	竹子	20.6	27.0	25.0	28.0	38.5	42.2			

※　小学男子5年以外は全国あるいは県平均を上回っている。女子の2・5・6年が全国あるいは県平均を上回っている。中学1年の男子が県平均及び女子の1年が全国平均を上回っている。

③ 座　高　（平成10年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	65.1	67.9	70.5	72.8	75.2	77.8	81.2	84.7	87.7
	本県	64.5	67.2	70.1	72.8	74.8	77.4	80.0	83.7	87.0
	本町	65.0	68.1	70.6	72.8	75.1	77.9	80.6	83.2	88.2
	溝辺	64.6	68.0	69.9	72.3	74.3	77.2	80.4	82.4	87.7
	陵南	65.6	68.3	70.4	73.2	75.1	78.4	80.8	84.1	88.6
	竹子	64.7	68.0	71.6	72.8	76.0	78.2			
女子	全国	64.7	67.4	70.2	73.0	76.1	79.5	82.3	83.8	84.7
	本県	64.3	66.9	69.7	72.7	75.7	79.5	81.9	83.3	84.4
	本町	64.2	67.8	69.9	72.2	76.1	80.5	82.4	83.7	84.4
	溝辺	63.9	67.0	70.4	71.4	75.2	79.2	82.9	83.6	84.6
	陵南	64.2	67.2	70.0	72.5	75.7	80.2	81.9	83.7	84.2
	竹子	64.4	69.2	69.2	72.6	77.5	82.0			

※　男子の4年以外は，全国あるいは県平均を上回っている。また女子でも1・4年以外は全国あるいは県平均を上回っている。中学2年の男子と3年の女子以外は,全国あるいは県平均を上回っている。

252表　全国、県及び本町の児童、生徒体位比較

① 身　長　（平成15年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全　国	116.7	122.5	128.2	133.6	139.0	145.2	152.8	160.2	165.5
	本　県	116.1	122.1	127.2	132.7	138.1	144.6	152.1	159.0	164.3
	本　町	115.7	122.7	126.4	132.6	138.8	144.9	155.1	160.6	164.8
	溝　辺	115.7	123.0	126.4	132.3	139.6	143.5	155.4	160.3	163.4
	陵　南	115.4	122.9	128.2	134.2	138.2	148.0	154.8	161.0	166.2
	竹　子	116.0	122.3	124.6	131.2	138.7	143.3			
女子	全　国	115.8	121.8	127.5	133.5	140.2	146.8	152.1	155.2	156.7
	本　県	115.3	120.9	127.0	132.5	139.9	145.7	151.9	154.3	156.3
	本　町	115.0	120.0	126.3	132.4	141.1	147.2	152.3	155.2	156.2
	溝　辺	116.4	121.2	126.3	132.2	142.7	146.0	151.4	155.5	156.4
	陵　南	115.0	120.0	126.1	134.4	142.7	146.6	153.2	154.9	156.0
	竹　子	113.6	119.0	126.5	130.6	137.9	149.0			

※　小学5年・6年男子及び中学2年女子が県平均を上回っている。小学2年・中学1年・2年男子及び小学校5年・6年・中学1年の女子は全国平均よりも良い。

② 体　重　（平成15年度）　(kg)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全　国	21.7	24.3	27.7	31.2	34.9	39.4	45.2	50.6	55.5
	本　県	21.5	24.5	26.9	30.3	34.1	39.1	44.1	49.2	54.1
	本　町	21.3	23.9	25.9	30.5	35.2	38.8	47.4	50.6	57.4
	溝　辺	21.3	24.2	25.5	30.0	36.2	35.7	49.1	50.3	56.7
	陵　南	21.4	23.9	26.6	32.9	34.0	44.0	45.7	50.8	58.0
	竹　子	21.2	23.6	25.5	28.7	35.4	36.8			
女子	全　国	21.1	23.8	26.9	30.4	34.8	39.8	44.9	48.3	50.9
	本　県	20.8	23.3	27.0	29.6	34.5	38.8	44.5	47.8	50.1
	本　町	19.3	23.0	26.0	29.2	33.7	38.3	45.1	46.4	49.2
	溝　辺	20.5	23.1	26.0	28.9	34.6	38.6	45.2	45.5	48.5
	陵　南	19.7	23.9	27.6	30.3	36.0	36.8	44.9	47.2	49.8
	竹　子	17.8	21.9	24.3	28.5	30.5	39.5			

※　小学4年・中学2年の男子及び中学1年の女子が県平均を上回っている。また，小学5年・中学1年・3年の男子が全国平均よりも良い。女子は小学生はすべての学年で県平均を下回っている。

③　座　高　（平成15年度）　(cm)

性	学校名＼年齢	小学校 6	7	8	9	10	11	中学校 12	13	14
男子	全国	65.0	67.7	70.4	72.8	75.1	77.9	81.5	85.2	88.1
	本県	64.8	67.6	70.0	72.5	74.8	77.6	81.2	84.5	87.5
	本町	64.9	68.2	69.5	72.1	74.9	77.6	82.9	86.0	87.9
	溝辺	64.3	67.8	69.0	71.5	75.1	76.7	83.4	85.9	88.1
	陵南	64.6	67.9	71.0	73.3	75.3	80.4	82.3	86.1	87.7
	竹子	65.9	69.0	68.5	71.6	74.2	75.6			
女子	全国	64.6	67.4	70.1	72.9	76.0	79.3	82.2	83.8	84.8
	本県	64.4	67.1	70.0	72.4	75.9	78.9	81.9	83.4	84.5
	本町	63.8	66.0	70.0	72.5	75.0	78.9	82.1	84.7	85.0
	溝辺	64.4	66.8	69.3	72.3	76.1	78.3	82.2	84.6	85.4
	陵南	64.6	67.1	70.5	73.5	75.5	79.5	81.9	84.8	84.6
	竹子	62.3	64.2	70.1	71.8	73.4	78.8			

※　小学1年・5年，中学3年の男子及び小学4年・中学2年の女子が県平均よりも上回っている。
また，小学2年・中学1年・2年の男子及び中学3年女子が全国平均よりも良い。

六　完全学校週五日制への移行

一九九二年(平成四年)の九月から月一回(第二土曜日が休み)の学校週五日制が始まり、一九九五年(平成七年)四月から第四土曜日も休みとする月二回の学校週五日制になった。

そして、二〇〇二年(平成十四年度)から毎週土曜日を休みとする完全学校週五日制が、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校、盲学校、聾学校、及び養護学校において全国的に実施された。

完全学校週五日制は、次代に生きる子どもたちの望ましい人間形成を図ることを基本的なねらいとして、学校、家庭、地域社会が一体となり、社会全体で子どもたちに「生きる力」を育み、健やかな成長を促すことを目的として実施された。子どもの生活時間に「ゆとり」をもって子どもたちが臨むような、生活体験、自然体験、社会体験、文化・スポーツ活動を楽しみながら生活できる能力を身に付けるために、新学習指導要領は、意欲を持って、自ら学び、自ら考えるなどの「確かな学力」を身に付けた子どもを育てることを目的としている。

新しい学習指導要領では、「生きる力」「確かな学力」を持った子どもを育てるために次のような事が実践されている。

(一)　教育内容の厳選

(二)　「総合的な学習の時間」の充実

(三)　選択学習の幅の拡大(中学校・高等学校)

(四)　新しい学習指導要領のねらいを実現するための「評価」

など「わかる授業」「工夫された授業」教科の枠を超えた、国際理解・環境・福祉・健康の学習や子どもたちの興味・関心・意欲・態度・進路希望など「個性を生かす教育」等が実施され、子どもたちのよさを、より引き出すための「評価」により子どもたちの「やる気」を起こさせる「評価」に変わっている。

また、家庭や地域社会においては、子どもがゆとりのある生活の中で、人間形成の基礎を培い豊かな自己実現を図るようにするとともに、子どもが様々な体験を通して生き方を学んだり人間性を高めたりするよう配慮する必要がある。

家庭や地域社会において子どもの生活がこのように変わるためには、親や地域住民に、自ら主体的に判断し行動できる子どもを育成する教育についての理解を深め、その実現に向けて協力を得ることが肝要である。また、子どもが学校外における豊かな体験をする機会や場を増やすため、家庭や地域社会と連携を強化し、子どもの学校外における活動が一層活性化するよう努めることが必要である。

完全学校週五日制は大きな教育改革で、親や地域社会、教師等の意識の転換に支えられるものである。「授業が変わる。」「評価が変わる。」「先生も変わる。」「子どもたちが変わる。」そして「学校が変わる。」ための努力が必要である。

七　PTA会長等

第253表　歴代PTA連絡協議会長

年度	会長	所属	年度	会長	所属
61	中久保　稔	竹小	7	西留　丸美	陵中
62	森田　二男	溝小	8	丸山　幸男	竹小
63	笹峯　純隆	陵小	9	山元　春行	溝小
元	川添　睦夫	溝中	10	馬場　勝芳	陵小
2	笹峯　純隆	陵中	11	岩澤　豊	溝中
3	深見　正夫	竹小	12	加世田豊春	陵中
4	今吉　歳晴	溝小	13	齋藤　修	竹小
5	笹峯　勉	陵小	14	今島　利幸	溝小
6	永山　作二	溝中	15	濵川　吉博	陵小
			16	松元　深	溝中

第254表　年度別各単位役員PTA役員

		溝辺小Ｐ	陵南小Ｐ	竹子小Ｐ	溝辺中Ｐ	陵南中Ｐ
H元	会　長	荒田　満	横山　公一	野村　勝次	川添　睦夫	木佐木信廣
	副会長	神田橋正弘	山口　道哉	蔵園　和寛	中久保　稔	山下　春幸
	副会長	岩下　徳	芦田真智子	仮屋園恵美子	大住　友代	前田とみ子
H2	会　長	神田橋正弘	横山　公一	蔵園　和寛	隈元　為次	笹峯　純隆
	副会長	小田島信男	末重　学	仮屋園恵美子	中久保　稔	末原　純男
	副会長	永山　久子	福徳　陽子	深見　正夫	山村　晴子	福丸タキ子
H3	会　長	小田島信男	末重　学	深見　正夫	隈元　為次	笹峯　純隆
	副会長	今吉　歳晴	笹峯　勉	今吉　孝一	岩切　正信	末原　純男
	副会長	野間　康子	鎌田　明美	仮屋園恵美子	松山　節子	満塩美代子
	副会長	田畑　栄				
H4	会　長	今吉　歳晴	笹峯　勉	深見　正夫	野村　勝次	末原　純男
	副会長	長崎　美二	東郷　年幸	竹下　大介	永山　作二	横山　公一
	副会長	秋山　実嗣	末永　利治	竹内　智子	重丸　静美	川原サツエ
	副会長	今吉　智子	鎌田　明美			
H5	会　長	今吉　歳晴	笹峯　勉	剥岩　裕	永山　作二	横山　公一
	副会長	宮森　克己	有村　国展	竹下　大介	祝儀園　實	住吉　康雄
	副会長	秋山　実嗣	末永　利治	犬堂　常子	中尾　桂子	川原サツエ
	副会長	萩原　千鶴	三好　昭子		中原　正美	
H6	副会長	木佐木俊春	有村　国展	竹下　大介	永山　作二	住吉　康雄
	会　長	溝口　悦郎	吉満　耕一	丸山　幸男	藤谷　文孝	西溜　丸美
	副会長	今吉　敬子	山下　容子	中久保治子	今吉　達男	福永まゆみ
	副会長	秋山　実	末永　利治	貞　しげ子	蔵園　幸子	
	副会長				西原　正美	
H7	副会長	溝口　悦郎	吉満　耕一	竹下　大介	剥岩　裕	西溜　丸美
	会　長	北里　洋一	岩元　康良	丸山　幸男	藤谷　文孝	笹峯　勉
	副会長	宮地まゆみ	山下　容子	中久保治子	木佐木俊春	三好　昭子
	副会長	田丸　茂樹	末永　利治	貞　しげ子	今吉　智子	
	副会長				中原　正美	
H8	会　長	迫間　清文	吉満　耕一	丸山　幸男	剥岩　裕	笹峯　勉
	副会長	山元　春行	加世田豊春	西野　伸一	今吉　歳晴	国生　哲也
	副会長	下久保里見	水流添律子	久木田由美子	田方　良子	三好　昭子
	副会長	田丸　茂樹	下田　眞澄	貞　しげ子		

H	会　長	山元　春行	加世田豊春	西野　伸一	今吉　歳晴	笹峯　勉
	副会長	松元　深	馬場　勝芳	外山　忠	木佐木俊春	水流添　寿
	副会長	川越　生子	水流添律子	大山　文代	岩澤　豊	中村加奈子
9	副会長	田丸　茂樹	下田　眞澄	本田　博隆	三宅多喜子	
	副会長				廣瀬　平	
	会　長	松元　深	馬場　勝芳	外山　忠	岩澤　豊	加世田豊春
H	副会長	神園　輝美	上原　勝美	上井　義美	溝口　瑞代	楠木　四美
	副会長	川越　生子	水流添律子	下久保悦子	今吉　睦美	永田　郁子
10	副会長	田丸　茂樹	下田　眞澄	本田　博隆	石野　孝昭	青木　利博
	副会長				廣瀬　平	
	会　長	松元　深	馬場　勝芳	上井　義美	岩澤　豊	加世田豊春
H	副会長	松山　茂樹	有村　友志	外山　広幸	今吉　睦美	上原　勝美
	副会長	溜村久留美	森　康子	吉田美保子	竹下　大介	永田　郁子
11	副会長	辻　建男	下田　眞澄	本田　博隆	平賀　美幸	青木　利博
	副会長				廣瀬　平	
	会　長	松山　茂樹	馬場　勝芳	外山　広幸	竹下　大介	加世田豊春
H	副会長	今島　利幸	福永　義和	齋藤　修	岩元　博昭	上原　勝美
	副会長	山村　雪子	酒匂加代子	小浜富士子	外山　忠	山下　容子
12	副会長	辻　建男	豊重　勝徳	岩切　博文	溜村久留美	青木　利博
	副会長				濱崎　功	
	会　長	今島　利幸	福永　義和	齋藤　修	竹下　大介	上原　勝美
H	副会長	今吉　耕己	今吉　裕一	内山　建志	岩元　博昭	山下　容子
	副会長	山口　博美	村田　美和	小浜富士子	西野　伸一	福永　博明
13	副会長	辻　建男	豊重　勝徳	岩切　博文	溜村久留美	西園　浩二
	副会長				濱崎　功	
	会　長	今島　利幸	福永　義和	内山　建志	岩元　博昭	福永　博明
H	副会長	今吉　耕己	濵川　吉博	日高　浩二	西野　伸一	上捨石秀之
14	副会長	山口　博美	村田　美和	荒武　千鳥	松下美千代	水流添律子
	副会長	和田　敏郎	豊重　勝徳	岩切　博文	濱崎　功	西園　浩二
	会　長	今吉　耕己	濵川　吉博	日高　浩二	西野　伸一	福永　博明
H	副会長	山口　紀史	立岩　泉	藏園　成美	松元　深	上捨石秀之
15	副会長	満塩　晴美	村田　美和	荒武　千鳥	小浜富士子	馬場　和代
	副会長	和田　敏郎	豊重　勝徳	鶴丸　博文	堀　正信	西園　浩二
	会　長	今吉　耕己	濵川　吉博	西野　伸一	松元　深	福永　博明
H	副会長	山口　紀史	有川　剛	久木田富士郎	仮屋園　修	上捨石秀之
16	副会長	満塩　晴美	村田　美和	福村　美紀	小浜富士子	有村　靖子
	副会長	和田　敏郎	上原　祐二	鶴丸　博文	堀　正信	石塚　宏志

八　学校給食

学校給食センター

学校給食の歴史は意外と長い。戦前は世界大戦による多くの海外出兵をかかえ、戦死する者も多く、国策として産めよ増やせよを奨励し『子どもは国の宝』であるとし、特に男子の出生が望まれていた。

食糧難の中、将来国を支える子どもとして、コッペパン味噌汁・肝油などの給食があった。

ただ、都会が中心で比較的食糧があった地方では給食はなかった。

戦後、アメリカから無償提供された脱脂粉乳による栄養補給のための給食が再開された。

その後栄養のバランスが主体となってきた。パンから米飯の給食に移り、内容も著しく充実し、家庭の食事内容の補完に重要な役割と、『食』に対する『教育と躾』が学校給食の大切な目的となってきた。

溝辺町における学校給食は、郷土史続一に記述されて

いるように、児童生徒の体位向上に果たしている役割は大きい。

学校給食の沿革

本町の学校給食は、昭和三十三年にミルク給食から始まり、昭和三十九年にはすべての学校が単独方式の完全給食となったが、昭和四十年には栄養格差解消や効率的な運営を図るため、センター方式に切り替えられた。

給食センターは、旧溝辺小学校敷地の一角(現役場駐車場入口付近)に新築し、センター方式による給食が始まった。

しかし、昭和五十二年施設の老朽化、旧型化した上、給食人員の増加が見込まれ、狭隘となってきたため、溝辺小学校の一角(現シルバー人材センター)に新築移転した。

平成八年に全国の学校給食施設で腸管大腸菌O―一五七による食中毒が多発し、学校給食管理基準が改正され、平成十三年四月ドライシステムによる施設を、上床公園内の一角に建設し共用開始となった。

各学校の単独給食

竹子小学校　昭和三十三年十二月八日　ミルク給食（脱脂粉乳）

溝辺中学校　昭和三十三年十二月八日　ミルク給食（脱脂粉乳）

溝辺小学校　昭和三十七年十一月九日　完全給食（A型五日）

玉利小学校　昭和三十九年一月九日

馬立分校　昭和三十九年一月九日　完全給食（委託乳）

玉利中学校　昭和三十九年一月九日　完全給食（委託乳）

（現陵南中学校）

昭和四十年三月　学校給食センター完成　二三三、五㎡(旧溝辺小学校現役場駐車場入口付近)

センター方式発足、完全給食開始(A型五日)

昭和五十二年六月　学校給食センターの老朽化、旧型化将来的に給食人員の増加が見込まれ、溝辺小学校の一角(現シルバー人材センター)に新築移転　三〇八㎡　業務開始

昭和五十二年十一月　米飯給食　週一回実施
昭和五十九年四月　米飯給食　週二回実施
昭和五十九年九月　優良給食センターとして文部大臣表彰
平成元年四月　米飯給食　週三回実施
平成十年七月　腸管大腸菌O―一五七による給食センター改築検討委員会発足
平成十三年二月　給食センター完成(上床公園)
鉄骨平屋建　八〇六、一㎡
敷地面積　四、一〇九㎡
事業費　三四五、八七三、〇〇〇円
財源内訳
一般財源　三〇四、二三二、〇〇〇円
国庫補助金　四一、六四一、〇〇〇円
料理能力　一日　一、五〇〇食
平成十三年四月　ドライシステム方式による供用開始
平成十三年五月　脇田稔県教育長来町　野菜協議会の会員と「地産地消の取り組み」等について意見交換をする。
平成十三年八月　鹿児島県学校給食センター調理コンクール最優秀賞受賞
平成十三年十一月　NHKテレビ番組「九州沖縄一本勝負」で給食センターの歴史ある地産地消の取り組みについて九州一円に放映される。
平成十三年十一月　MBCテレビで食物アレルギー代替食の取り組みについて放映される。
平成十四年七月　岩手県で開催された全国学校栄養士大会で外山澄子栄養士が「地域・家庭と連携した学校給食」について実践発表をする。
平成十四年八月　東京都で開催された全国学校給食調理師大会で岩切アツ子調理師が「地場産物を取り入れた献立の工夫」について実践発表をする。
平成十五年一月　福元紘県教育長来町　野菜協議会の会員と「野菜作りの苦労や子どもたちに安全でおいしい野菜を食べてもらいたい思い」等について

意見交換をする。

学校給食野菜協議会

最近『地産地消』が大きく取り上げられ、地元志向が高まりつつあるが、学校給食センターではいち早く、地産地消は学校から取り組んでいる。

昭和四十年学校給食センターが開設されたのを期に、野菜協議会が結成され、野菜スープの野菜八八％は野菜協議会の会員の栽培されたものであった。

発足当時は会員九名だったが、昭和六十年には六名、平成六年には三名と一時は減少したが、同年十月には極楽婦人部とほか一名が加わり活発化する。

平成十二年には、月刊誌『学校の食事』に学校給食について外山栄養士が寄稿掲載されるなど、給食センターと地場産の給食材料の安全と愛着が定着している。

平成十三年七月八日鹿児島新報で『地産地消』は学校から、と大きく報道され、消費拡大につながると農家も期待している。

平成十三年九月第五二回全国学校給食協議会大会（名古屋）で山村事務長が「実践発表」のあと、同大会において野菜協議会は文部科学大臣表彰　受賞

最新の調理機器

第四章　幼児教育

一　陵南幼稚園

陵南幼稚園は、学校教育法で定める公立の幼稚園で、幼児を保育し適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的として、昭和四十七年四月鹿児島空港開港にあわせ陵南小学校の一教室を借用して、幼稚園設置基準に基ずき二学級定員八〇人で発足した。

当初の入園児は、男子一〇人　女子一一人だった。

その後、昭和五十一年度に園舎が建設された。

平成十四年四月、園舎は耐震診断の結果、改築の必要性が生じ全面改築となった。この全面改築にあわせ、四歳児・五歳児の二学級から、三歳児学級を増設し平成十五年度から定員も九〇人となった。

各年齢の学級定員編成は

五歳児　三五人以内

四歳児　三五人以内

三歳児　二〇人以内となっている。

歴代園長　（平成元年七代から）

七　代　荒田　耕

八　代　北之園　緑

九　代　時任　陽一郎

十　代　水間　司

十一代　茶屋　晃一

十二代　上村　清志

十三代　有村　克孝

園長・副園長は、陵南小学校の校長教頭兼務であったが、平成七年四月副園長は専任となった。

初代副園長　榎本　眞人

二　代　野元　耕一

三　代　本田　允章

四　代　蔵園　輝美

幼児教育の振興

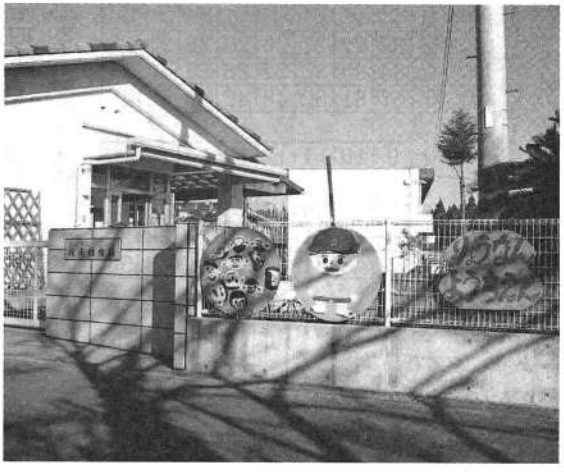
基本的事項

○幼児教育は、人間形成の基礎が培われる極めて重要な時期であることを踏まえ、幼児一人一人の望ましい発達を促していく教育環境の整備を重視していく。

○入園を希望するすべての満三歳児～五歳児の就園を目標に、次の視点に立って施策の展開を図る。

施策の展開

・集団生活を通じて幼児一人一人の発達に応じ、「生きる力」の基礎や小学校以降の学校教育全体の生活・学習の基礎を培うという基本に立って、教育活動・教育環境の充実を図る。



陵南幼稚園

・地域の幼児教育のセンターとしての機能を活用して、「親と子の育ちの場」としての幼稚園の役割・機能を充実する。

・幼稚園と小学校の連携を推進する。

・幼稚園と保育園は、各々の目的と役割を有するとともに両施設の連携を一層推進する。

教育目標

友達と元気よく遊び、自分の思いを精いっぱい表現し豊かな心をもち、たくましく生きる園児の育成

幼稚園の沿革（平成元年以降）

平成七年四月　副園長専任となる

平成十年十月　九州国公立幼稚園研究大会鹿児島大会公開保育分科会会場

平成十一年七月　地区幼稚園教育研修会（本園会場　保育参観）

平成十四年三月　園舎大規模改造新増改築設計、監理工事（空調機個別方式）

八六、四二五、〇〇〇円

平成十四年四月　三学級となる（三歳児　四歳児　五歳児）

平成十四年十月　園庭整備工事　九七〇、〇〇〇円

第255表　園児の推移

年度	元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
年少組	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	12	10	15
年中組	33	27	27	26	20	26	22	28	30	19	40	17	16	27	25	19
年長組	34	34	35	22	26	23	30	21	29	29	21	40	18	20	28	24
合計	67	61	62	48	46	49	52	49	59	48	61	57	34	59	63	58

昭和二十四年の九、〇三〇人をピークに、人口は減少の一途をたどってきた。これと同じく子どもの数も少なくなったが、生活圏の拡大、通勤圏の拡大、生活の形態の変化と、共稼ぎから共働きへと女性の社会進出が活発となり、保育園の必要性は益々重要となってきている。

少子化が深刻となる中、育児中の母親を支援する施設が、全国的にもひろがってきている。

大学にも、子育てに頑張る学生のために保育所を開設し、子連れで通学している大学院生の要望も実を結んでいる。

合計特殊出生率（一人の女性が生涯に産む子どもの数の平均）は平成十四年では、過去最低の一・三二まで落ち込んでいる。歯止めをかけるには女性が安心して出産し、育児に取り込める社会を、男女してつくるしかない。

少子高齢化がすすみ、子育て世帯を取り巻く環境は厳しい。働きやすい環境を整えることが大切である。

保育園は子育て支援、少子化対策の第一線だと思われる。

町内各保育園の現状は次のようになっている。

二　保育園

保育園は、児童福祉法による施設で「市町村は、保護者が労働や疾病により監護すべき乳幼児などで、保育に欠ける子ども達を、保育園に入所させなければならない」と定められている。

保育園は無認可と認可があるが、溝辺町は全て認可された保育園で町内に四カ所ある。

(一)　高陵寺保育園

保育方針及び目標

まことの保育

宗教情操を基盤とし、子どもの健全育成を基盤として、保護者も保育者も共に育てられる保育。

沿　革

昭和二十八年五月　農繁期季節託児所を有川の高陵寺本堂にて開設

昭和三十一年十一月　高陵寺保育園園舎建築

昭和三十二年一月　宗教法人高陵寺保育園認可

初代園長　加　来　貞　信

昭和四十年三月　園舎増改築

昭和四十年四月　定員六〇人となる

昭和四十五年四月　二代園長　加　来　宗　暁　就任

昭和五十八年七月　便所等増改築

平成　三年九月　社会福祉法人　白蓮福祉会経営となる

平成　五年三月　新園舎建築工事完了

平成　七年四月　学童保育開始（平成八年四月認可）

平成十二年二月　少子化対策事業により、園舎増改築工事完了

平成十三年四月　三代園長　加　来　宗　慶　就任

平成十三年四月　自主事業『子育て子育ち支援センター』設立

平成十四年四月　びゃっこうだいこ発足

平成十六年十一月　太陽光発電導入

定員と入園児数の推移（毎年十月一日現在）

※平成十一年以降は法改正により広域入所が可能になったことによる全入園児数を示す。以下同じ

年　度	定　数	入園児数
平成　元年	六〇人	六一人
平成　二年	六〇人	五八人
平成　三年	六〇人	五六人
平成　四年	六〇人	六〇人
平成　五年	六〇人	六一人
平成　六年	六〇人	六四人
平成　七年	六〇人	六二人
平成　八年	六〇人	六三人

平成　九年	六〇人	六二人
平成　十年	六〇人	六八人
平成十一年	六〇人	七〇人
平成十二年	六〇人	六五人
平成十三年	六〇人	六二人
平成十四年	六〇人	五五人
平成十五年	六〇人	六四人
平成十六年	六〇人	六七人

このほか、特別保育事業として、延長保育の促進・一時保育・地域活動・学童保育などを積極的に行っている。

高陵寺保育園

(二)　白蓮保育園

保育方針及び目標

まことの保育

宗教情操を基盤とし、子どもの健全育成を基盤として、保護者も保育者も共に育てられる保育。

沿　革

昭和五十一年・五十二年　町立農山村保育所として経営される
昭和五十二年二月　社会福祉法人　白蓮福祉会設立
昭和五十三年四月　白蓮保育園竹子に開設　定数三〇人
　初代園長　加　来　稔　子　就任
平成　一年二月　補助事業により園舎増築
平成　一年四月　定数増　六〇人となる
平成　一年四月　二代園長　加　来　白　鳴　就任
平成　四年四月　三代園長　加　来　稔　子　就任
平成　七年四月　自主事業　学童保育開始
平成　八年四月　定数改定　四五人となる
平成　八年六月　園舎改修

平成十一年四月　四代園長　加　来　宗　慶　就任
平成十二年二月　少子化対策事業園舎増改築完了
平成十三年四月　五代園長　加　来　康　代　就任
平成十三年四月　自主事業・子育て子育ち支援センター設立
平成十五年四月　六代園長　加　来　敏　道　就任

定員と入園児数の推移（毎年十月一日現在）

年度	定数	入園児数
平成　元年	六〇人	四七人
平成　二年	六〇人	四四人
平成　三年	六〇人	四二人
平成　四年	六〇人	四五人
平成　五年	六〇人	五〇人
平成　六年	六〇人	五一人
平成　七年	六〇人	四〇人
平成　八年	四五人	三八人
平成　九年	四五人	四三人
平成　十年	四五人	三九人
平成十一年	四五人	五三人
平成十二年	四五人	三四人
平成十三年	四五人	三九人
平成十四年	四五人	三八人
平成十五年	四五人	三一人
平成十六年	四五人	三九人

このほか、特別保育事業として、延長保育の促進・一時保育・地域活動・学童保育などを積極的に行っている。

白蓮保育園

(三)　照明保育園

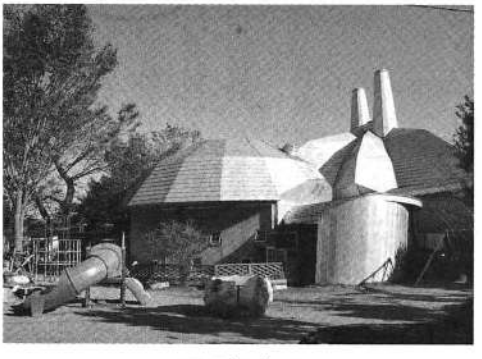
保育方針及び目標

家庭や地域社会との連携を密にして家庭養育の補完を行い、子どもが健康で安全で情緒の安定した生活ができる環境の下で、自己を十分に発揮しながら活動できるようにするとともに、健全な心身の発達を助長する。

子どもを囲むすべての大人たちの愛情と叡知と良識をもって、子どもをよく理解し、子どもにふさわしい『生存と人権が守られた安定した生活』をめざし、共に学び、育ちあう姿勢を大切にする。

沿　革

昭和三十六年三月　照明保育園として麓に設立(無認可)
昭和三十七年五月　社会福祉法人照明保育園設立認可
　　定員六〇人
　　初代園長　藤　谷　瑛　徹　就任
昭和五十一年三月　定員八〇人となる
昭和五十五年四月　二代園長　藤　谷　文　孝　就任
昭和五十六年四月　心悦保育園（定員六〇）設置経営
昭和六十三年十二月　法人の名称変更　照明福祉会となる
平成　七年十月　園舎増改築
平成　十年四月　三代園長　藤　谷　やよい　就任
平成十四年二月　定員九〇人となる
平成十四年三月　新に光耀福祉会設立　照明福祉会から分離独立
平成十四年四月　新法人として設置経営



照明保育園

定員と入園児数の推移（毎年十月一日現在）

年度	定数	入園児数
平成　元年	八〇人	八一人
平成　二年	八〇人	八三人
平成　三年	八〇人	八〇人
平成　四年	八〇人	八二人
平成　五年	八〇人	八一人
平成　六年	八〇人	八三人
平成　七年	八〇人	八一人
平成　八年	八〇人	八七人
平成　九年	八〇人	八二人
平成　十年	八〇人	九二人
平成十一年	八〇人	九九人
平成十二年	八〇人	一〇〇人
平成十三年	八〇人	一〇七人
平成十四年	九〇人	一〇八人
平成十五年	九〇人	一一五人
平成十六年	九〇人	一一五人

このほか、特別保育事業として、延長保育の促進・一時保育・地域活動・地域子育て支援センター・乳児保育の促進などを積極的に行っている。

（四）心悦保育園

保育方針及び目標

”あそびの天才・子どもゆめ工房“をモットーに「創造力豊でたくましく思いやりのある子ども」に育てたい。子どもは豊に伸びていく可能性を、そのうちに秘めています。その子どもが現在を最も良く生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことを基本としています。

沿革

昭和五十六年四月　社会福祉法人照明保育園　心悦保育園として崎森に設置　定員六〇人
初代園長　藤谷憲秀就任
昭和六十三年十二月　法人名を社会福祉法人照明福祉会に変更する
平成　十年二月　事務所を新築し乳児室を改造
平成十二年二月　乳児室を増築
平成十三年八月　法人事務所所在地変更

平成十四年八月　二階工作室等を増築
平成十五年七月　施設整備事業（増築・一時保育・地域子育て支援室）により増築し定員を九〇人に変更する。

定員と入園児数の推移（毎年十月一日現在）

年度	定数	入園児数
平成元年	六〇人	六〇人
平成二年	六〇人	六二人
平成三年	六〇人	六〇人
平成四年	六〇人	六二人
平成五年	六〇人	六五人
平成六年	六〇人	六一人
平成七年	六〇人	六二人
平成八年	六〇人	六五人
平成九年	六〇人	六三人
平成十年	六〇人	六七人
平成十一年	六〇人	八一人
平成十二年	六〇人	七三人
平成十三年	六〇人	八〇人
平成十四年	六〇人	七九人
平成十五年	九〇人	一〇〇人
平成十六年	九〇人	一〇四人

このほか、特別保育事業として、延長保育の促進・一時保育・地域活動・休日保育・乳児保育の促進などを積極的に行っている。

心悦保育園

第五章　社会教育

一　みそめ館の建設

(一)　建設に至る経緯

昭和四十一年、溝辺町中央公民館が旧溝辺町役場の上に建設されて以来、この中央公民館を拠点として生涯教育としての社会教育の確立に努めてきた。

日本経済の高度成長に伴い、人々の社会参加が進められるなかに、健康増進と心の豊かさを求めて、文化活動やスポーツ活動に参加する町民が増加し、社会教育施設や社会体育施設等の整備が求められてきた。

溝辺町中央公民館も老朽化するとともに、社会情勢の変化に伴い、町民のニーズに対応できる近代的社会教育施設が要求される時代となった。

そこで、上床公園を「教育の森」として位置付け、社会教育施設やスポーツ施設の整備を年次的に行ってきた。

平成四年、社会教育施設として、文化ホール、研修室、資料室、図書室等を備えた近代施設「溝辺町グリーン文化ホールみそめ館」を建設することとなり、本体工事一五社、電気設備工事一五社、機械設備工事一五社による入札の結果、本体工事　㈱間組、電気・機械設備工事㈱九電工が落札、着工の運びとなった。

尚、設計・監理業務は、㈱川元建築設計事務所であった。

こうして平成五年八月三十一日完成、十月九日開館記念式典を行った。式典終了後のこけら落としには、当時の今吉衛町長が次代を担う子どもたちに、ホールでの出演を願いたいとして、竹子小学校児童一五名、溝辺小学校児童一三五名、陵南小学校児童一〇五名、溝辺中学校生徒二一三名、陵南中学校生徒一六〇名、総勢六二八名による発表会を盛大に開催。また、県内外で活躍されている、マリンバ奏者中間貴子さんの演奏も花を添えていただき、町民の新しい学びの場の幕開けとなった。

緞帳原画の選定

ホールの顔とも言える緞帳は、溝辺町助役(当時岩元

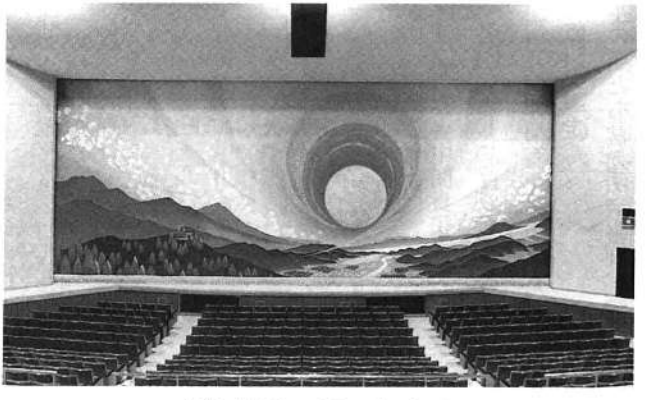
勝芳氏)を審査委員長とする「緞帳原画コンペ審査委員会(全一二名)」で、緞帳製作に携わる七業者から提出された一四点の原画について審査した。その結果、京都市の株式会社龍村美術織物から提出された作品に決定した。

次に緞帳原画の作成意図について述べる。(原文)

題名「　躍　動　」

この作品は、「未来に翔く空港の町」をテーマに描いた。画面中央に天空へ昇らんとする太陽、地上には左より霧島連山、高千穂の峰、右手遠方、錦江湾に浮かぶ桜島を、そして中央部には空港と茶畑で溝辺の町をグリーン系の色彩を主調に配し、その大地の景観を高屋山陵上空より東に望んだ構図をとっており、空の面積をおおらかにとることで、空へと開かれた溝辺町の明るい未来を象徴している。

また、中空には町花である「梅」を大空へ舞い上がるように幻想的に描きこみ、雄大な空へ向かって躍動して行く溝辺の姿を、昇る朝日に託し描きあげたものである。(上床公園から一望した景色を、そのまま織り込んでいる)



緞帳「躍動」(グラビア参照)

工事概要

○名　　称　溝辺町グリーン文化ホールみそめ館
○構　　造　鉄筋コンクリート(一部鉄骨)地上三階建
○総工事費　一七億六千二百万円
　地域総合整備事業費債及び一般財源

○工　　期　平成四年七月一日～平成五年八月三十一日
○敷地面積　九九三〇㎡
○延床面積　四一七四㎡

ホール棟設備

○客 席 数　八一四席
・固定席　七三二席
・移動席(オーケストラピット)　七六席
・車椅子用(スペース)　六席
○舞　　台　間口一七m　高さ七m　奥行一二m
○緞　　帳　テーマ「躍動」　天地七・五m　×間口一八・六m
○付属施設　・楽屋二室　・シャワールーム二室
・湯沸し室　・トイレ　・ピアノ庫(除湿機付)　・母子室(チェアーベッド四台)
○音響設備　・オーディオミキサー卓(ビクターPS－M3400M)一台　・CDプレーヤー一台
・ダブルカセットデッキ一台　・レコードプレーヤー一台
○照明設備　・調光卓(タマテックLCM－4500C)一台　・ピンスポットライト(ウシオUテック2kW)二台　・サスペンションライト三列　・ボーダーライト二列　・シーリングスポットライト一列　・フロントサイドスポットライト(各上下手)　・アッパーホリゾントライト一列　・ロアーホリゾントライト一列
○備　　品　・ピアノ(ヤマハG5E)一台　・所作台三一一枚　・平台四〇枚　・高所作業台一台
・譜面台八〇台外一式　・一六ミリ映写機(エイキEX－9100)一台　・スライド映写機(エイキEX－561AT)一台　・液晶ビデオプロジェクター(エイキLC－3000)二台　・ビデオデッキ一台　・レーザーディスクプレーヤー一台　・スクリーン(横一〇・六m　縦四・〇m)一基
○ホール残響時間　一・二七秒(五〇〇Hz)
○そ の 他　音響反射板(天板照明付)

管理棟設備

○一階施設　・図書室　・歴史民俗資料室(展示ギャラリー併設)　・会議室二室(全三〇名収容)

○二階施設　・研修室(三室に分割可、全使用時二〇〇名収容)　・音響設備(ビデオプロジェクター一台、ダブルカセットデッキ一台、ビデオデッキ一台、レーザーディスクプレーヤー一台、教材提示装置一台、一〇〇インチ電動スクリーン一台)　・視聴覚室(パソコン一九台、カラープリンター一〇台、ビデオプロジェクター一台、一〇〇インチ電動スクリーン一台)　・創作室(工作台五台)　・調理実習室(実習台七台)　・和室(三六畳)　・茶室(一二畳、茶道具一式)

(二)　みそめ館の利用状況

みそめ館の利用状況は、第257表に示したとおりであるが、経緯を若干述べてみたい。平成五年度は、一般利用が十月からだったので当然利用は少ない。平成六年から八年までの三カ年は、施設の新しさも手伝ってか全体的に利用が多かった。

当初は自主文化事業も年に六～七本実施しており、ホールの入場者も多かった。しかし、その自主文化事業も財政状況が厳しくなるとともに実施本数も減り、それに伴い入場者数も減少してきた。

視聴覚室の利用で、平成十三年度が飛び抜けて多いのは、政府が打ち出したIT(インフォメーションテクノロジー事業の一環でパソコンを導入し、「らくらくインターネット」、「ワード・エクセルソフトウェア講座」などのパソコン講座を実施したことによるものである。

また、コミュニティセンターの会議利用(第256表コミュニティセンター・青少年の家の利用状況　参照)が、平成六年度頃から若干減少しているのは、みそめ館の開館による影響があるのではと考察される。

自主文化事業は、みそめ館ホールの利用促進を図ることと、町民の文化意識の向上を目的に実施してきた。事業実施に当たっては、町内の「文化団体ひこうきぐも」の皆さんや各種団体の協力をいただいてきた。事業量については、先にも述べたように、開館当初は年に六～七本程度実施していたが、諸事情により最近では半数程度

までになってきた。

実施した事業は、主に第258表年度ごとの主な自主文化事業のとおり。

第256表　コミュニティセンター・青少年の家の利用状況　（単位：件，人）

区分	コミュニティセンター												青少年の家	
	合計		会議		宴会		昼食		休憩		その他			
年度	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員
平成元年	499	14,948	334	9,421	137	4,666	22	630	4	51	2	180	22	1,518
平成2年	469	12,670	300	6,702	134	4,490	26	1,282	9	196	0	0	182	1,801
平成3年	469	13,923	324	7,939	15	5,280	11	280	6	110	3	314	135	1,504
平成4年	454	13,209	339	8,910	109	4,099	4	105	1	60	1	35	139	1,564
平成5年	510	14,412	262	6,335	121	4,289	25	1,132	2	14	100	2,642	168	1,336
平成6年	414	17,035	169	4,416	125	4,732	41	3,058	9	273	70	4,556	222	1,855
平成7年	300	10,683	119	2,985	123	4,016	30	2,402	2	184	26	1,093	229	1,734
平成8年	340	11,452	162	4,406	118	4,237	19	1,431	0	0	41	1,378	165	1,098
平成9年	359	11,305	137	3,329	130	4,467	20	1,922	1	61	71	1,526	195	1,365
平成10年	386	13,474	164	4,227	126	5,234	32	2,133	0	0	64	1,880	196	1,112
平成11年	401	11,864	179	4,180	125	4,711	21	1,206	1	2	75	1,765	193	1,218
平成12年	399	12,048	192	4,522	113	4,590	13	1,169	1	60	80	1,707	225	1,321
平成13年	465	12,132	210	4,492	126	4,914	14	917	0	0	115	1,809	153	879
平成14年	477	10,896	231	4,230	112	4,166	13	962	0	0	121	1,538	95	687
平成15年	552	12,454	232	4,899	117	4,714	9	313	1	3	104	1,904	89	621

第257表　みそめ館の利用状況　　(単位:件, 人)

区分 / 年度	大ホール		研修室		視聴覚室		調理実習室		和室		茶室	
	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員
平成5年	30	12,479	81	3,757	6	95	7	145	43	811	11	108
平成6年	67	24,484	144	6,481	15	229	19	326	111	1,765	22	237
平成7年	38	11,335	171	8,182	13	238	26	495	147	2,308	20	343
平成8年	41	15,335	178	7,405	18	759	42	994	123	1,833	16	241
平成9年	77	13,443	132	6,644	22	545	17	354	72	809	18	179
平成10年	62	16,050	212	10,671	13	147	17	335	76	952	13	127
平成11年	54	9,290	171	9,235	8	138	15	298	40	475	40	196
平成12年	53	12,348	120	8,294	6	132	8	156	39	1,003	10	161
平成13年	45	13,841	170	9,248	144	2,190	12	257	37	1,075	10	81
平成14年	58	12,764	253	11,130	35	134	20	321	55	605	13	118
平成15年	39	10,672	202	7,309	0	0	5	75	72	939	8	75

第258表　年度ごとの主な自主文化事業

年　度	事　　業　　名	入場者数（人）
平成5年		
平成6年	ライコーオーケストラ　ザ・ジプシー(舞踊)	700
	夏休みファミリー映画会(とられてたまるか　クレヨンしんちゃん)	377
	NHK第一放送　ひるの散歩道　公開録音 西郷輝彦，松原のぶえ他	850
	ふるさとファミリー劇場　弦楽四重奏	204
	宝くじ助成　古典ミュージカルヤマトタケル 三田村邦彦，河合奈保子他	686
	劇団飛行船　マスクプレイミュージカル	894
	家庭教育講演会　武田イク	700
	カントリーフェスタインみぞべ　'95	702
平成7年	武田鉄矢コンサート	793
	ひこうきぐもコスモスコンサート　常田冨士男他	375
	劇団飛行船　マスクプレイミュージカル	842
	家庭教育講演会　羽仁進	700
平成8年	ひこうきぐも　イルカコンサート	695
	児童・生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座	572
	家庭教育講演会　ケント・ギルバート	700
平成9年	演歌まつり	961
	児童・生徒芸術鑑賞会　青年劇場	375
	素人いきいき芸能まつり	750
	家庭教育講演会　小林完吾	300
平成10年	児童・生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座	332
	家庭教育講演会　岡元冨士太	400
平成11年	演歌の夕べ　新沼謙治他	721
	児童・生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座	310
	家庭教育講演会　アントン・ウィッキー	468
平成12年	青少年のための青少年劇場　鹿児島交響楽団	638
	生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座　新しい獲物	316
平成13年	名作ファミリーミュージカル　白雪姫 矢部美穂，中山麻里，岡田真善他	285
	生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座　ベニスの商人	339
	読書講演会　松谷みよこ	300
平成14年	児童・生徒芸術鑑賞会　劇団芸優座　チェーホフ先生こんにちは	410
	読書講演会　なかえよしお	100
平成15年	児童・生徒芸術鑑賞会　ピアノ三重奏コンサート	392
平成16年	児童・生徒芸術鑑賞会　東京金管五重奏団	325

二　生涯学習講座(公民館講座)

町民が、自分の趣味や健康づくりなどの生涯学習の場として公民館講座が開設されたのが、中央公民館(旧役場跡、現有川地区集会センターの上)であった。

狭い学習の場でありながら講座を継続してきたが、生涯学習の拠点として平成五年にみそめ館が完成。時代のニーズに応じて各種の講座を開設し、趣味や学習を広げ、現在参加者の多い講座を中心に開設している。

また、時代の流れに応じたニーズを取り入れ、期待される講座を開設し、講座終了後も同好会として自主活動の継続が期待される。

平成三年からの資料によると、継続している講座は硬式テニス・弓道の二講座で、一回中断したものが絵画とバドミントン講座である。

初講座から継続している講座として、手芸・ちぎり絵・趣味の園芸・健康料理がある。

新しい講座として、フラワーアレンジメント・ビーズアクセサリー・いきいきスポーツクラブが開設され、時代の流れによる町民のニーズの変化が伺える。

公民館講座の移り変わりと推移は第260表のとおりとなっている。

ハーモニカ講座のようす

第259表　平成16年度　生涯学習講座参加・終了数一覧表

	講座名	参加者			修了者		
		男	女	合計	男	女	合計
1	絵画	1	10	11	1	7	8
2	絵手紙	0	14	14	0	11	1
3	押し花	0	11	11	0	9	9
4	韓国語	3	15	18	2	9	11
5	パソコンA	4	11	15	2	11	13
6	パソコンB	6	11	17	6	11	17
7	ハーモニカ	7	8	15	7	8	15
8	フラワアレンジメント	0	9	9	0	7	7
9	ビーズアクセサリー	0	13	13	0	9	9
10	パッチワーク	0	6	6	0	6	6
11	五つ太鼓	1	8	9	1	7	8
12	陶芸教室	2	22	24	2	19	21
13	健康料理	2	12	14	1	11	12
14	趣味の園芸	0	17	17	0	13	13
15	手話	0	16	16	0	8	8
	小計	26	183	209	22	146	168
16	バドミントン	6	14	20	5	6	11
17	テニス	5	22	27	4	15	19
18	ソフトテニス	8	27	35	6	19	25
19	弓道	14	10	24	14	6	20
20	ストレッチ	0	5	5	0	3	3
21	初心者ゴルフ	4	8	12	3	6	9
22	スポーツクラブ	2	5	7	2	4	6
	小計	39	91	130	34	59	93
合計		65	274	339	56	205	261

※男性に比べ、女性の参加が多い。（男性の４倍にあたる）
※途中から脱落し受講生の減っている講座もあるが、最初から最後まで殆どの方が参加した講座が多かった。
※修了率は７７％、４人に３人は修了したことになる。それぞれ仕事を持ち、夜の学習中心だったにしては良い結果だったと言える。
去年よりも1.4％参加者が増えている。これは新しく取り入れたハーモニカ・パソコン・五つ太鼓の参加者及び修了者が多かったからと言える。今後も親しみやすい新しい講座を取り入れていく必要がある。

第260表　公民館講座の推移（講座名と参加者数）

講座名＼年度	平成元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
大正琴			34	32	30	20	21	29	35	30		10				
レザークラフト			10	12	15	7	7	15	15		27					
絵画			9	11	10		15	22	18	19		11	19	12	11	11
三味線			15	14	14	13	16	23	22	18	19	22	16	15		
硬式テニス			23	39	30	33	29	38	20	29	18	24	23	22	23	27
バドミントン			27	37	23	25	20	40	16	39	29	31	24	28	18	20
卓球			6	12	17	18	17	14	16	16						
レクダンス			29	25	24						10					
弓道			16	14	16	16	19	33	13	22		12	17	14	28	24
ターゲットパードゴルフ				17	10	8	7	13	12	8	12					
日本舞踊					35	19	11	18	16	18		18	15	15		
竹細工					9	10	5	5			23					
グランドゴルフ					40	38	13	50							20	
和太鼓					12	11	15	27								9
囲碁講座					12				11							
手芸（編み物）					15	10	15	7	23	14	17	12	18	15	10	
生け花					15	15	24	24	20	18	21	13	14	12		
着付け					14	13	12	12	19	8						
3B体操教室						42	17	43	43	27	17	17				
日舞・民謡								15	19	17	16	11	14	10		
ハーブ								15	21	13						
カラオケ								40	32	20	30	18	13			
ゴルフ								50	85	40	32		26	21	20	12
ちぎり絵							17	14	16	17	17	12	17	11	10	
書道							16	14	14	20	12				12	
陶芸							14	21	30	20					26	24
趣味の園芸							15	37	40	20	24	21	14	27	17	17
健康料理							9	39	51	18	25	15	19	11	7	14

太極拳							12	15	25	18	16	11	24	25	28	
みそめ館娯楽部								15	23	30	14					
中国語									21	10			8	10	7	
短歌									10	20	12					
木工								10	8	6						
ソフトテニス									26	37	17		23	16	18	35
社交ダンス									62	39	30	14	12	8	15	
菊つくり									9	13		16	15	19		
世界の食										25		17				
英会話										29		13				
ペーパーフラワー										10	21	11				
パソコン										20	20	40		134	85	32
茶道											17					
硬筆											30	26	13		11	
音楽しま専科											19	11				
実用かな書道												14	19	10	20	
韓国語												14		20	14	18
手話												30	45	15	13	16
フラダンス												29		18		
健康体操							19						12	15		5
コーラス							24									
トールペイント														11		
フラワーアレンジメント															10	9
ビーズアクセサリー															28	13
いきいきスポーツクラブ															25	7
絵手紙																14
押し花																11
ハーモニカ																15
パッチワーク																6
講座数			10	10	17	16	25	29	32	35	27	29	23	24	23	22
参加者数			172	213	334	298	389	698	799	708	545	493	420	529	471	339

三　国際交流

(一)　民間交流グループ

①みぞべ西郷どん交流館

昭和五十七年四月に結成された民間国際交流グループ。主に「からいも交流　春、夏」の学生受け入れや、町内の受け入れ家庭へのアドバイスなどを行っている。近年は、鹿児島空港から週三回運行している大韓航空パイロットとの交流も行っている。

②からいも交流

家庭や地域での国際交流を深めることを目的に、みぞべ西郷どん交流館が中心となり、昭和六十一年から始まっている。（詳しくは、『文化みぞべ』を参照）

日本国内の大学に留学している学生を二週間受け入れるからいも交流「春」、韓国、香港、マカオの大学で日本語や日本文化を学んでいる学生を二週間受け入れるからいも交流「夏」がある。これまで溝辺町内にホームスティした学生は一二カ国、一三〇名を超える。

(二)　海外派遣事業

①日韓親善子供大使友好の翼

国際性豊かな青少年を育成し、日本に一番近い外国「韓国」との友好親善に寄与するために青少年を韓国に派遣する青少年国際交流事業。平成三年、韓国釜山(プサン)市の培英(ペーヨン)初等学校との図画作品交換から始まり、平成四年八月に初めて培英(ペーヨン)初等学校を表敬訪問している。平成十六年度までに一三〇名の小学生を派遣している。

平成八年一月にはペーヨン初等学校の児童や引率者が溝辺町を訪問し、相互訪問、相互交流が実現し、平成十六年七月までに、六八名の児童が溝辺町を訪問している。

②鹿児島県青少年国際協力体験事業

国際交流に対する理解を深めるとともに、相互理解を深め国際性豊かな人材を育成するために、中学生以上の青少年を東南アジアへ派遣する事業。これまでに三回、計八名の中・高校生を派遣している。

平成十年　タイ　　高校生　三名

平成十三年　ベトナム　中、高校生二名
平成十四年　ベトナム　中、高校生三名

③鹿児島県青少年海外ふれあい事業

異年齢の青少年集団を中国に派遣し、中国の青少年との交流や異年齢集団の中での切磋琢磨を通じて幅広い視野を広げ、次代の郷土を担う心豊かでたくましい青少年の育成を図ることを目的に実施されている。これまで平成十三年に六名派遣している。

平成十三年　中国　小学生　二名
中学生　二名
高校生　一名
一　般　一名

培英（ペーヨン）初等学校訪問

(三)　国際交流員

本町の鹿児島空港から就航している国際線には、韓国のソウル直行便がある。また、釜山(プサン)市の培英(ペーヨン)初等学校との交流事業など韓国との縁は深い。

そこで、平成八年度からは、「語学指導等を行う外国青年招致事業(ＪＥＴプログラム)」により、韓国の国際交流員(ＣＩＲ)を招致している。

韓国の歴史・文化・習慣を紹介し、また町民と交流活動を行うことにより、町民の国際性の涵養及び韓国に対する理解を深めることを目的としている。

歴代の国際交流員は次のとおり。

平成　八年　四月～平成十一年　四月
　　初代国際交流員　　朴　宣姫(パク・ソンヒ)
　　大田(テジョン)市出身

平成十一年　四月～平成十四年　三月
　　二代目国際交流員　慎　祥恩(シン・サンウン)
　　ソウル市出身

平成十四年　四月～現在
　　三代目国際交流員　李　惠英(イ・ヘヨン)
　　釜山(プサン)市出身

主な仕事として

「日韓親善子供大使友好の翼」事業の企画、町内学校訪問による児童・生徒の国際理解教育の促進、自治公民館・家庭教育学級生との交流、韓国語講座の開設、国際交流イベントの企画・立案などがある。

四　読書活動・図書室

近年、幼少時期からの読み聞かせ(ブックスタート運動)、学校における「朝の一〇分間読書」運動の推進、成人の読書推進などそれぞれの時期において読書活動の重要性が言われている。

平成五年十月に、生涯学習の拠点としてみそめ館が開館しそれに伴い、図書室をみそめ館に移転した。

その後、年次的に蔵書の充実、司書の設置、小・中学校司書補との連携、町内親子読書会の育成、おはなしボランティアグループの誕生、読書講演会の開催など多岐にわたり、読書活動の推進に努めている。

なお、平成十五年八月には蔵書の登録、点検、整理を推進するためデータベース化を実施した。

また、本町には唯一の読書グループがある。昭和五十六年に誕生した「読書グループひまわり」で、会員数一六名からなる成人女性の集まりである。

親子読書二〇分間運動の推進をはじめ県下に親子読書運動を展開された元教育長・榎薗高雄氏(故人)の影響を受けて結成され、年間様々な活動を行っている。中でも年一回発行している文集「ひまわり」も二三号をかぞえる。また、平成三年には長年の活動が認められ、全国読書推進運動協議会から「全国優良読書グループ」として表彰を受けた。今後益々の活動の発展、充実を願う。

みそめ館図書室の状況

蔵書数（平成十五年四月現在）	二万三八一一冊
町民一人あたり冊数	一・三冊
年間利用者数（平成十四年度実績）	二三八〇人
配本所数	七カ所
年間貸出冊数	六五九三冊
開館一日平均	約一八冊

平成三年　十月　読書グループひまわりが「全国優良読書グループ」の表彰を受ける

平成五年　五月　司書の設置

十月　みそめ館内に図書室移転

平成七年　二月　元教育長の荻田三郎氏より書籍購入の寄付金

平成十二年一月　佐藤山人氏より書籍購入の寄付金

平成十二年　四月　おはなしボランティアグループの結成
「おはなしのじかん」の開催
内容　毎月第四土曜日の午前十時から、読み聞かせ、ゆび遊び、エプロンシアター、紙芝居など
平成十三年　四月　小中学校司書補との合同研修会開始
「朝の十分間読書運動」を小・中学校へ推進
「総合的な学習の時間」関係の書籍購入
小・中学校への団体貸出の開始
県立図書館巡回展示の開催
ボランティアグループによる「緑陰読書」「クリスマスおはなし会」の開催
平成十四年　二月　読書講演会実施　講師松谷みよこ氏
平成十四年　四月　「ブックスタート運動」の推進
保健福祉課の乳幼児健診、ママズスクール時にブックスタート運動の説明、読み聞かせやパンフレット配布
県立図書館巡回展示の開催
平成十五年　二月　読書講演会実施　講師なかえよしを氏
平成十五年　八月　蔵書のデータベース化を実施

五　溝辺町人材育成基金助成金

これまであった人材育成基金を取り崩して、平成十五年四月から、町民が行う研修や地域活性化の事業に対し助成金を交付することになった。

(一)　対象事業

①人材育成に関すること
産業経済、教育文化振興のための研修、社会福祉、生活環境充実のための研修及び青少年の研修、交流事業に関する経費の助成。

②地域活性化対策に関すること
地域興しのためのイベントなどに要する経費の助成。

(二)　助成対象者

町内に居住する個人並びに町内で活動する団体。

(三)　助成金の額

①人材育成に関すること

研修のために必要と認める経費の五割を助成する。ただし、一人につき国外研修は三〇万円、国内研修は一五万円を限度とする。

②地域活性化対策に関すること

事業実施のために必要と認める経費の五割を助成する。

平成十五年六月現在で、三件の申請があった。

六　青少年育成町民会議

昭和五十七年十一月に結成された青少年育成町民会議は、平成四年までは、会の目的達成のために毎年総会で承認を受けた事業を中心に行っていた。

その後、平成五年十二月に設置された「溝辺町生涯学習推進会議」のなかの生涯学習専門部会「すこやかジュニア部会」に移行されたが、平成十四年十二月に生涯学習推進会議の在り方や組織を見直しした結果、この「すこやかジュニア部会」をはじめ四つの部会は廃止された。

しかしながら、町校外生活指導連絡協議会が「青少年育成町民会議」に代わる機関としてその機能を十分果たしていると思われる。

「すこやかジュニア部会」では、青少年書道席書大会と青少年育成弓道大会を実施していた。

青少年席書大会は最初は、町役場や各小学校等で、毎年夏休みを中心に、町内の小・中・高校生、一般の方々の参加のもと行われていた。平成五年にみそめ館が建設されてからはみそめ館で、最勝寺良寛先生、北里洋一先生、岩元典男先生等の出される課題及び指導のもとに、町長賞、文化協会賞、奨励賞等を目指して取り組まれている。平成十六年

青少年書道席書大会

度で第二十五回目を数える実績のある大会である。

青少年育成弓道大会も、溝辺町弓道部の方々の指導のもと、両中学校の弓道場で、町内の中・高校生及び一般の方々の参加を得て行われてきた。平成八年上床公園に弓道場「洗心館」が建設されてからは、ここで行われるようになり、中・高校での本町選手の活躍に大いに寄与している。

七　溝辺町青少年学習事業

(一)　開設の趣旨

未来を担う青少年が学校間や年齢の壁を越え、多くの仲間と触れ合い、お互いに協力し、思いやりを持って接することの大切さを体得するとともに、自分たちの生活する緑豊かな郷土を見つめ直し、我が郷土を愛する心や自然を大切にしていこうとする精神を身につけ、豊かな心を持ったたくましい溝辺の子どもに育つことをねらいとして開設された。

(二)　主　催　青少年学習事業実行委員会

共　催　自治公民館連絡協議会

子ども会育成連絡協議会

高校生父母の会

(三)　学習目標

①　自主的な活動を進めながら、異年齢集団の中でお互いの役割を見極め、責任感、主体性、創造性、郷土愛、自然愛を身につける。

②　地域子ども会のリーダとしての自覚を高め、自主的な子ども会活動を行おうとする態度を養う。

(四)　実施期間

・夏コース　夏休み（四泊五日）

・冬コース　冬休み（四泊五日）

(五)　参加者

・小学五年生～中学生、高校生　約四〇名

・引率者　町内小中学校職員、役場新採職員、幼稚園職員、青年団員、生涯学習課職員

(六)　学習内容

・夏コース　子ども議会（第八回～）、町長さんと語ろう（第一四回～）屋久島での体験学習など

・冬コース　史跡めぐり、九重少年自然の家での活動、スキー体験など

(七)

事業の推移

第261表

年度・回数	名称	場所
昭和62年　(第1回～)	溝辺町少年の船	喜界
平成元年　(第3回～)	〃	名瀬
平成6年　(第8回～)	溝辺町青少年学習事業(夏コース)	屋久島
	〃　(冬コース)	五ヶ瀬(宮崎)
平成11年　(第13回～)	〃　(夏コース)	屋久島
	〃　(冬コース)	九重(大分)

冬コース（九重）

八　子ども会育成連絡協議会

小学校三校の校区ごとに集落を基礎単位とした子ども会が育成されている。各年度の連絡協議会の役員を示すと第262表のとおりとなる。

第262表　溝辺町子ども会連絡協議会

年度	役職名	氏名	所属長
元	会長	横山　公一	陵南小
平成	副会長	荒田　満	溝辺小
	副会長	野村　勝次	竹子小
2	会長	蔵園　和寛	竹子小
平成	副会長	神田橋正弘	溝辺小
	副会長	横山　公一	陵南小
3	会長	小田島信男	溝辺小
平成	副会長	末永　学	陵南小
	副会長	深見　正夫	竹子小
4	会長	笹峯　勉	陵南小
平成	副会長	深見　正夫	竹子小
	副会長	今吉　歳晴	溝辺小
平成5	会長	蔵園　和寛	竹子小
	副会長	今吉　歳晴	溝辺小
	副会長	笹峯　勉	陵南小
平成6	会長	蔵園　和寛	竹子小
	副会長	山崎一二三	溝辺小
	副会長	植木　保	陵南小
	副会長	中尾　勝	竹子小
平成7	会長	蔵園　和寛	竹子小
	副会長	重森　順一	溝辺小
	副会長	植木　保	陵南小
	副会長	仮屋園　孜	竹子小
平成8	会長	蔵園　和寛	据石ヶ岡子ども会
	副会長	重森　順一	高屋子ども会
	副会長	中久保良一	稲荷子ども会
	副会長	有村　博志	石峯(陵南)子ども会
平成9	会長	重森　順一	高屋子ども会
	副会長	今村　正憲	三縄前玉子ども会
	副会長	中久保良一	稲荷子ども会
	副会長	吉村　乃	崎森子ども会
平成10	会長	重森　順一	高屋子ども会
	副会長	佐藤　昭人	有川中央子ども会
	副会長	西野　伸一	据石ヶ岡子ども会
	副会長	豊留由美枝	陵南子ども会

平成11		
会長	重森　順一	高屋子ども会
副会長	岩元　良博	金割子ども会
副会長	重森　義明	高屋子ども会
副会長	植木　保	崎森子ども会
会長	植木　保	崎森子ども会
副会長	田中　慎一	曽我子ども会
副会長	永吉　市男	石峯(溝辺)子ども会
副会長	有村　國展	石峯(陵南)子ども会
会長	植木　保	崎森子ども会
副会長	馬場園　修	永尾子ども会
副会長	八反田竜一	据石ヶ岡子ども会
副会長	馬場　光幸	崎森子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	中吉　一幸	三縄前玉子ども会
副会長	久保　哲朗	大川内岡子ども会
副会長	外山　誠	陵南子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	大園　洋一	下有川切門子ども会
副会長	米松　勝利	据石ヶ岡子ども会
副会長	福盛　忍	陵南子ども会

平成12		
会長	植木　保	崎森子ども会
副会長	田中　慎一	曽我子ども会
副会長	永吉　市男	石峯(溝辺)子ども会
副会長	有村　國展	石峯(陵南)子ども会
会長	植木　保	崎森子ども会
副会長	馬場園　修	永尾子ども会
副会長	八反田竜一	据石ヶ岡子ども会
副会長	馬場　光幸	崎森子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	中吉　一幸	三縄前玉子ども会
副会長	久保　哲朗	大川内岡子ども会
副会長	外山　誠	陵南子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	大園　洋一	下有川切門子ども会
副会長	米松　勝利	据石ヶ岡子ども会
副会長	福盛　忍	陵南子ども会

平成13		
会長	植木　保	崎森子ども会
副会長	馬場園　修	永尾子ども会
副会長	八反田竜一	据石ヶ岡子ども会
副会長	馬場　光幸	崎森子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	中吉　一幸	三縄前玉子ども会
副会長	久保　哲朗	大川内岡子ども会
副会長	外山　誠	陵南子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	大園　洋一	下有川切門子ども会
副会長	米松　勝利	据石ヶ岡子ども会
副会長	福盛　忍	陵南子ども会

平成14		
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	中吉　一幸	三縄前玉子ども会
副会長	久保　哲朗	大川内岡子ども会
副会長	外山　誠	陵南子ども会
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	大園　洋一	下有川切門子ども会
副会長	米松　勝利	据石ヶ岡子ども会
副会長	福盛　忍	陵南子ども会

平成15		
会長	馬場園　修	瀬竹永尾子ども会
副会長	大園　洋一	下有川切門子ども会
副会長	米松　勝利	据石ヶ岡子ども会
副会長	福盛　忍	陵南子ども会

平成16		
会長	福盛　忍	陵南子ども会
副会長	中玉利　正行	三縄前玉子ども会
副会長	今島　利幸	大川内岡子ども会
副会長	甲斐　範昭	麓原子ども会

九　生活学校「白菊会」

昭和五十年発足。当初は町内に居住する五〇歳以上の婦人会員で活動していたが、昭和六十一年に校区婦人会が消滅すると共に、白菊会の活動は会長の所属する大正琴グループの方々が引き継いで活動を行ってきた。

活動内容も会員が少ないために、生活学校の目的である、日常生活に直接携わる女性が、身近な生活課題や地域課題を生活者の立場から学習し、地域の実態をとらえて、具体的に課題を解決していく運動として現在も取りくんでいる。

平成十六年度の活動計画の主なものは

・環境問題として、家庭から出るゴミの資源利用として取りくんでいる。菱刈町のゴミ処理施設「未来館」の視察研修

・家庭でできる環境改善として、「ＥＭぼかし液」作りを体験学習し、利用する

・姶良伊佐地区の他の生活学校との交流集会への参加

・老人介護の実情を学ぶための施設訪問

等を行っている。

生活環境が更に複雑化するに伴い、避けて通れぬ課題は次々と出てくる。これからの生活学校の存在は大きいが、残念なことに町民の認識不足から、会員の増がみられないのが大きな悩みである。

歴代会長

昭和五十年　～昭和五十二年　鳥丸　フヂ

昭和五十三年～昭和五十四年　重丸　ふじ

昭和五十五年～昭和五十七年　岩元　里江

昭和五十八年～平成十二年　松山　絹江

平成十三年　～平成十五年　小原トヨ子

平成十六年　～現在　横山　節子

第六章　文化と史跡

一　溝辺ふるさと祭り

昭和四十九年十一月三日、文化の日に第一回『文化祭』を開催、昭和五十一年から五十六年までは文化協会主催で開催されていた。一方、農産物の生産意欲の向上を図るため、昭和五十四年から、『農村振興大会』を十一月二十三日勤労感謝日に農業祭として進めてきたが、昭和五十七年からこれをとりまとめ、『溝辺ふるさと祭り』として毎年文化の日に開催するようになった。

平成八年一月に、「ふれあい学習五日間」を開催する。内容は生涯学習講座生の作品展示発表及び、芸能発表、家庭教育講演会、青少年育成弓道大会、グラウンドゴルフ大会など多岐にわたり、生涯学習社会にふさわしい催しと好評を得た。そこで、平成八年十一月二日に「第一回素人いきいき芸能祭り」が開催された。これが溝辺ふるさと祭りの前夜祭のもととなる。

町文化協会の主催により、舞踊、三味線、大正琴、太極拳、エアロ&3B体操、カラオケなど生涯学習講座生の学習の成果の発表の機会を設けた。講座受講生はこの日のために練習に励み、当日はどの出演者も真剣に、また楽しみながら発表をしてきた。

なお、平成十二年から前夜祭を含めた十一月二日、三日の両日を「溝辺ふるさと祭り」とした。

昭和五十七年第一回から「テーマ」を募り、応募の中から運営委員会において審査、入選作を発表、表彰した。

開催年度	回数	テーマ	入選者
昭和五十七年	第一回	新生　文化と生活の調和	二見剛史
昭和五十八年	第二回	創造　住民の知恵と生産	岩元華枝
昭和五十九年	第三回	最優秀賞　躍動　豊かな心で活気ある生産	岩元典子
		優秀賞　郷土愛　美と豊かさの充実	上原タマ子
昭和六十年	第四回	生産はみんなの知恵と力から	満塩昌代

昭和六十一年　第五回
建設　住民の力と和で新溝辺　桑畑雅代
昭和六十二年　第六回
飛翔　実りある未来に向かってGO溝辺　山口和美
昭和六十三年　第七回
生産で心豊かな溝辺町　猪俣重博
平成元年　第八回
町制三〇周年の歴史を踏まえ・はばたく溝辺　藤井ルミ子
平成二年　第九回
咲かせよう・二十一世紀へ向け・ふるさとの夢　藤崎勝清
平成三年　第一〇回
豊かな自然の中で心豊かな人間（ひと）を育（はぐく）む溝辺町　有村和久
平成四年　第一一回
みどり豊かなふるさとみぞべ今年は開港二十年　猪俣重弘
平成五年　第一二回
みそめ館　地域文化の発信地　山下英明
平成六年　第一三回
人光るみどり豊かな溝辺町　黒木克子
平成七年　第一四回
輝く未来　夢と希望と郷土愛　向井田邦子
平成八年　第一五回
明日の郷土を育む力　知恵とやる気と創造と　河原絹代
平成九年　第一六回
輝け台地みのりのふるさとみんなの宝　藤崎美恵子
平成十・十一・十二年　第一七・一八・一九回
ほほえみかわし結ぶ手で築こうふるさと輝く未来　白濱さゆり
平成十三・十四・十五年　第二〇・二一・二二回
新世紀力を合わせこころかようふるさとみぞべ　重丸静美
平成十六年　第二三回
はばたけ未来へ！心はひとつかがやく笑顔　ふるさと溝辺　向江雄星

竹子盆踊りの夕べ

「地域の皆様のおかげをもちまして、今年も盆踊りの夕べが開催できることに感謝申し上げます。」竹子盆踊りの夕べ実行委員会西野克伸実行委員長（溝辺町青年団連絡協議会長）の開会の挨拶で、「竹子盆踊りの夕べ」が幕を開けた。毎年、お盆の八月十四日に行われている、この「盆踊りの夕べ」の歴史を振り返ってみる。

昭和五十一年、溝辺町は単年度事業で農山村保育所を竹子と崎森に設置する計画を立てたが、実際設置できたのは竹子だけであった。場所は、竹子共正会の公民館（現竹子小学校長住宅）を使用することになった。設置にあたっては、白蓮保育園（昭和五十三年四月一日発足）をつくるための前提条件をも含み、すべてを高陵寺保育園に委ねられた。

その農山村保育所が開設された最初の年に、竹子の子どもたちに盆踊りを体験させたいという、加来宗暁住職の思いから始めたのが現在も引き継がれ、「竹子盆踊りの夕べ」として行われているものである。

その頃、竹子青年団は、竹子小学校の講堂（現在の竹子小学校正門左側に建っていた。今はない）で、高校生

に柔道の指導を行っていたことから、盆踊りに参加しはじめて、白蓮保育園と青年団との共催で実施するようになった。

内容は、盆踊りのみならず、青年団の資金作りの一助と、来場者に楽しんでいただきたいとのことで、イベント的要素を取り入れ、串団子、焼きとうもろこし、イカ焼き、焼き鳥などの屋台を出すようになった。

今では、青年団の活動の場はもとより、地域の方々のふれあいと憩いの場、そして「お盆」の「定義」と「意義」を確認する大切な場となっている。殺伐とした今の時代、青少年の活躍と地域の連帯感、そして三十年近い歴史・伝統を重んじて、今後更に継承・発展に期待したいところである。

二　文化協会の充実

溝辺町の文化協会が設置されたのは、昭和五十一年十月四日、一八の文化団体によって結成された。目的は、次のように定めてある。

一、各文化団体の活動の推進と助成
二、文化団体の連絡提携
三、文化祭の開催、発表の場の提供
四、郷土文化の継承保存

(一)　活動の特色（概況）

①　溝辺文化創生のため、毎年スローガンを掲げ、具体的実践事項にそって活動をして来た。

文化協会は、町の教育委員会が企画運営している諸行事はもとより、溝辺ふるさと祭り（町民祭）に関わって多彩な活動があり、国際化への取り組みにも見るべき成果を出してきた。それらの活動を（文化情報）として集約する。いわば縁の下の力を発揮する場所であることを自覚して、諸活動、事業の基本としている。

②　文化講演会の開催

定期総会（毎年六月か七月）の折に、公開の文化講演会を企画。講師は、できるだけ溝辺にゆかりのある方をお願いしてきた。平成十三年で一六回を数えている。

③　みぞべスケッチ大会の開催

平成元年、鹿児島県民文化会の秀作美術展来溝を機に、親子触れ合いの場として始められたものである。文化協会、教育委員会、郵便局の共催。町内の各学校美術担当教師が、指導者となり審査する。参加者は、町内外を問わない。大賞は、ふるさと祭りで表彰し「文化みぞべ」の表紙絵として採用する。

④　『文化みぞべ』の定期刊行（毎年一回刊行）

『溝辺町文化協会だより」（昭和五十一年十一月創刊）と「たかや」（わが町の読書観想文集）』（昭和五十七年三月創刊―溝辺町教育委員会編集―）に掲載されてきた文化情報をまとめた「文化誌」である。一九九一（平成三）年創刊現在に至っている。寄稿・文芸・読書感想文・町内小中学校の文化活動・表彰・文化協会の動き・生涯学習課の実蹟・等が主内容である。

⑤　溝辺町文化基金の開設

斎藤茂吉歌碑

ひむがしの空にあきらけき高千穂の
峰に直向ふみささぎぞこれ

（昭和十四年十月元旦高屋山上陵にて詠歌）建立の浄財の一部をもとに、篤志家の寄付を集めながら。文化事業のために有効に活用している。平成八年度、鹿児島県芸術文化奨励賞の副賞（二〇万円）もプールし、記念出版資金等などにあてている。

⑥　「みぞべ文化叢書」の発刊

町民および溝辺町出身者の創作活動を奨励し、将来へ維持して出版される叢書として、平成十一年度より企画されたものである。第一巻として「風やわらかに」が、刊行され、平成十六年度までに左記の第七巻が続刊されている。

○　みぞべ文化叢書

第一巻　岩元喜吉著『歌文集　風やわらかに』　平成十一年十二月二日発行

第二巻　秋峯いくよ著『歌文集　庭椅子』　平成十二年十月二十日発行

第三巻　佐藤山人著『歌文集　短歌のきざはし』
平成十三年一月一日発行
第四巻　二見剛史著『エッセー集　華甲一滴』
平成十三年六月二十一日発行
第五巻　岩元華枝著『歌文集　彩華』
平成十三年八月二十四日発行
第六巻　玉利狂花著『遺句集　家郷』
平成十五年十月三日発行
第七巻　最勝寺良寛著『書作品集』
平成十六年十一月十六日発行

(二)　活動の実績

①　**溝辺町文化講演会**

ふるさと溝辺にゆかりのある方、地域の文化人を招いて文化協会総会の日程にあわせながら文化講演会を開催してきた。そのきっかけをつくって下さったのが有馬四郎町長である。以下講師と演題のみを記しておく。なお、会場は中央公民館（第一回・第二回）、コミュニティセンター（第三回～第六回）、みそめ館研修室（第九回～第一六回）と移動している。それぞれの講演内容は『文化協会だより』『文化みぞべ』の該当年度記録として掲載されている。

第一回（昭和五十八年四月二十五日）
有馬　四郎氏　「隣国中国を訪ねて」
『文化協会だより』一二号に収録
第二回（昭和六十一年五月十九日）
有馬　四郎氏　「アメリカを見聞して」
『文化協会だより』一七号に収録
第三回（昭和六十三年六月十八日）
岩元　勝芳氏　「行政の今昔を想う―家計図づくりのすすめ―」『文化協会だより』一九号に収録
第四回（平成元年六月二十四日）
鳥丸　萩夫氏　「後世に伝える文化」
『文化協会だより』二〇号に収録
第五回（平成二年六月二十二日）
神川輝彦氏「剥岩池と段溝について」
『文化みぞべ』創刊号に収録
第六回（平成三年六月二十二日）
大山千年氏「溝辺に帰って思うこと」
『文化みぞべ』二号に収録

第七回（平成四年六月三十日）
藤谷文孝氏「教育と文化」
『文化みぞべ』三号に収録
第八回（平成五年六月十八日）
岩下豊氏　ふるさと放談「人を動かすことば」
『文化みぞべ』四号に収録
第九回（平成六年六月二十六日）
新納教義氏「地方の豊かさ問い直そう」
『文化みぞべ』五号に収録
第十回（平成七年六月二十四日）
山元正博氏「地ビールと地域文化」
『文化みぞべ』六号に収録
第十一回（平成八年六月二十三日）
佐藤山人氏「現代の健康観」
『文化みぞべ』七号に収録
第十二回（平成九年六月二十二日）
榎園高雄氏「地域の風土と文化」
『文化みぞべ』八号に収録
第十三回（平成十年六月二十日）
岩元昭雄氏「溝辺の子どもから学んだこと
～子育ての基本にかかわって～」
『文化みぞべ』九号に収録
第十四回（平成十一年六月十九日）
種村エイ子氏「輝いて生きるために
～子どもに死を語る～」
『文化みぞべ』一〇号に収録
第十五回（平成十二年六月二十四日）
海江田義弘氏「神様・仏様・お天道様のおはなし」
『文化みぞべ』一一号に収録
第十六回（平成十三年六月三十日）
岩橋恵子氏「フランスに学ぶまちづくり」
『文化みぞべ』一二号に収録

②　みぞべスケッチ大会

○　第一回の記録

平成元年、溝辺で行われた「秀作ギャラリー展」を機会に、本町で初めて実施したのが「みぞべスケッチ大会」である。文化協会役員、社会教育課職員、町内各小・中学校の図工、美術担当の先生方溝辺郵便局員の献身的な努力と御協力により、十月二十一日（日）上床公園で開催された。

午前八時半から受付、九時から開会、二見剛史会長の開会のあいさつに続き、今吉衛町長、村田三夫教育委員長らの激励のことばや、審査委員長・神川輝彦先生（当時竹子小学校教頭）により絵を書くときの心がまえや公園使用上の注意などがあり、幼児から小・中学生、一般男女、高齢者の方々まで、総勢一〇七名が、上床公園のここかしこに場をかまえ、それぞれの目で感じた「溝辺の秋」を画面いっぱいに表現しようと熱心に取り組んだ。

その間、各小・中学校の図工・美術の先生方は講師として、指導・助言にあたっていただいた。

午後三時からの閉会式では、参加者全員に町教育委員会や、溝辺郵便局の隈元為次局長から参加賞が配られた。みんなにこにこ顔だった。

幼児や小学校低学年の子どもたちは、くじゃく、あひるなどの動物や遊具などに題材を求め、高学年になるにつれて、風景や建物の形や色に関心が向いてくるようであった。

第五回みぞべスケッチ大会の模様

スケッチ大会に思う

田上　正人

「育てよう、上床公園で絵心を」というキャッチフレーズが浮かんで来るような、風光明媚な溝辺の地に育つ子どもたちは幸せです。

霊峰高千穂のなだらかな稜線と極を突く俊頂。高屋山上陵をバックにそびえ立つ新装のみそめ館の勇姿、そして十三塚原の一角をしめる鹿児島空港と山並、そこに風まく、文化を運ぶ飛行機の離着陸。またまた目を転ずれば絵の主とも言える錦江湾に浮かぶ桜島のうしろ姿…。ひろい上げれば限りなく重ね合せるスケッチの数々です。

このような恵まれた場所、上床公園内で、キャンバス代わりの画用紙を広げ、親子で運ぶ筆の動きにほのかな愛を感じ、心豊かなふれあいに感動するのは私だけではないと思います。

こうして、去る平成五年十月十七日（日）、おだやかな陽光を受けて、第五回みぞべスケッチ大会は、一五〇余名の親子や一般参加者を加えて行われました。

遠望の霧島連山に挑むお父さん、コスモスのやさしさに魅せられたお母さん。クジャクの羽根の美しさに見とれ、一枚一枚の色に集中する小学生の男の子、画面構成が定まらず、あちこち歩き廻っている女の子…。等々の姿を見つけているうちに、ポツリ、ポツリと雨粒が落ち、慌てる場面もあったが、スムーズに進められました。

それから数時間後の午後三時に集められた作品を、みそめ館のホワイエに並べ、町内小・中学校の図工、美術担当の指導者と共に審査会を行いました。先にも述べましたように、いくら画素材が豊富でも、描く人の心が伝わってこない作品からは、審美感は生まれないようです。

しかし、一点一点の作品の中には、幼児の心、子どもたちの歌や笑いを感じ、大人に近づく感性を見取ることのできる小学校高学年・中学生の筆さばき、そして子どもに負けじと生れつきの素質を発揮して、すばらしい風景画や、花を仕上げた大人の作品にも審査の目はおどらされました。

このことから、よく耳にします「溝辺の文化は停滞している。」とか「スポーツに比べて取り組みがうすい。」等々言われているそうですが、このスケッチ大会で感じる限りにおいては、文化の芽は、子どもたちの瞳の中に芽生え、一般参加者の絵の心からは、みそめ館運営への期待と共に、芸術文化の土壌は造成され、その息吹は生き生きと燃えているように感じます。どうかこれからも、この心を大事にして親子共々がんばってほしいと思います。

最後になりましたが、主催者である町、町教育委員会文化協会の町民各位への働きかけに敬意を表しますと共に、細かな心で終日指導してくださった先生方に審査委員長として心からお礼を申し上げます。今後の溝辺における文化高場施策の充実と発展を夢見、期待しつつ感想とします。

（当時溝辺小学校長）

第263表　みぞべスケッチ大会　大会秀作賞一覧

開催回	氏名	所属
第2回（平成2）	岩元俊彦	幼児
	うとめぐみ	小一年
	内之段佑介	小二年
	万膳可奈子	小三年
	末元志保	小五年
	猪俣重博	一般

別府勇	一般	
上村茂	一般	
上村和子	一般	
二見朱実	一般	
のむら あきひろ	小一年	
沼口みき	小三年	第3回（平成3）
井上可奈子	小四年	
住吉千恵子	小六年	
渋谷まなみ	中三年	
西溜美和	中三年	
永山久子	一般	
佐藤明子	一般	
二見朱実	一般	
池田宏子	一般	
今村 りょうすけ	小一年	
宮原絵梨奈	小二年	
内野眞太郎	小二年	
福永 道	小三年	
植木由美	小六年	第4回（平成4）
佐藤明子	一般	
川床友子	一般	
二見朱実	一般	
猪俣重博	一般	
池田宏子	一般	

松山みき	小一年	
重森かなえ	小一年	
今村亮介	小二年	
清水雄治郎	小四年	
佐藤大祐	小六年	
岩元美由紀	小六年	第5回（平成5）
佐藤明子	一般	
八重尾俊徳	一般	
池田宏子	一般	
二見朱実	一般	

第六回みぞべスケッチ大会から「大会大賞」を設け、『文化みぞべ』の表紙絵に採用することとなった。

第264表　みぞべスケッチ大会「大賞」一覧

開催回	氏名	所属
第6回（平成6）	鎌田　実	一般
第7回（平成7）	内野眞太郎	小五年
第8回（平成8）	二見　朱実	一般
第9回（平成9）	おおくぼひろのり	小一年
第10回（平成10）	井上俊一郎	小二年
第11回（平成11）	村田美和	一般
第12回（平成12）	重丸りさ	小四年
第13回（平成13）	ひだかまりあ	小一年
第14回（平成14）	内村　周	小二年
第15回（平成15）	村岡秀男	一般
第16回（平成16）	馬場千里	中三年

(三) 表彰・祝賀関係

① 鹿児島県芸術文化奨励賞の受賞

平成八年度は溝辺町文化協会の創立二〇周年という節目の年であった。幸運にも、鹿児島県芸術文化奨励賞（総合部門）を受賞することになり、十一月十四日、授賞式に臨んだ。「功績の概要」は次のとおりである。

「昭和五十一年に発足以来、主体的・積極的に活動を続け、ややもすれば遅れがちな文化振興に寄与している意義の大きさと、溝辺町文化基金の創設、『文化みぞべ』の発刊、スケッチ大会や書席コンクールの開催等、地域に根ざした文化活動が、近隣町に大きな影響を及ぼした功績が認められ、今回の受賞の栄に浴されました。」

副賞は後日、文化基金に繰入れ活動資金にしている。

② 創立二十五周年記念式典・祝賀会

平成十四年十二月三日、溝辺町コミュニティ・センターにおいて、文化協会設立二十五周年記念式典・祝賀会が開催された。関係者約八〇名が参加し、四半世紀の文化活動をふりかえり、町の将来を語り合った。初代会長最勝寺良寛氏（書家）と、協会発展に貢献の大きい歌人・佐藤山人氏に感謝状が贈られた。この会は、同年六月、二見剛史会長が鹿児島県文化協会会長に就任されたお祝いを兼ねていた。

なお、記念事業として、『溝辺町文化協会だより（合綴版）』（一～二〇号　一九七六～九〇）の刊行があり、町内外の文化機関・関係者に配布されている。内容目次は同誌のほか『文化みぞべ』第一〇号巻末に「溝辺町文化誌の総目次」の一部として収録されている。昭和後期の溝辺町を文化面から記録された、貴重な資料である。

③ 第三〇回南日本社会教育賞　岩元喜吉氏

平成四年度の南日本社会教育賞を、溝辺町文化協会顧問・岩元喜吉氏が受賞されたことは快事であった。平成五年一月二十六日の第四回鹿児島県生涯学習県民フェアで表彰され、二月一日、上床のコミュニティセンターで盛大な祝賀会を開催、町を挙げて氏の功績を讃えた。

南日本新聞社からの表彰状原文を記しておく。「岩元喜吉殿　あなたは溝辺町の体育協会や文化協会の設立に貢献し、地域の推進役を果たしてきました。また、溝辺町の郷土誌出版に際しては資料発掘に努め、「地つき唄」

をはじめ伝統芸能の復活や民謡の保存継承に尽力されています。俳句同好会に結成や町民歌の作詞など文芸活動にも励んでこられました。ここに第三〇回南日本社会教育賞を贈り業績をたたえます。」

氏は、復員後役場に勤務、社会教育を中心に活躍された。文化協会をはじめ諸団体の設立・育成、発展に献身的な努力を重ねられた功績が県レベルの評価を受けたのである。十三塚特攻隊の記録『鎮魂―白雲にのりて君還りませ』、町文化協会のみぞべ文化叢書第一巻『風やわらかに』、句集『青雨』等の出版も光っている。

祝賀会の模様や氏の功績については『文化みぞべ』第三号（一九九三）や『人輝くまち―溝辺人物小伝―』（二〇〇二）に詳述されている。

④　北里洋一氏・朴大君父子そろって県知事賞

平成五年春、鹿児島県書道会主催の第四六回書道展に溝辺小学校五年、北里朴大君が小学校の部で、父親の洋一氏が一般の部で、それぞれ最高の知事賞を受賞された。父子そろっての知事賞は有史以来の金字塔と称すべく、早速、有志で北里さん御一家を招待し二月二十六日祝賀会が開かれた。発起人は最勝寺良寛・初代文化協会長である。同展審査員長・馬場正則（啓彰）先生からのメッセージも寄せられていた。作品は溝辺町に受賞記念として寄贈された。

(四)　溝辺町文化協会の歴代役員

○会　長

最勝寺良寛　昭和五十一～五十四年度
岩元　保雄　昭和五十五～五十六年度
二見　剛史　昭和五十七～平成十四年度
永山　作二　平成十五年度～現在

○副会長

岩下　晃　昭和五十一～五十六年度
岩元　典男　昭和五十七～六十三年度
岩元　里江　昭和五十八～六十年度
重森　フヂ　昭和六十一～平成元年度
町田　良夫　平成元～八年度
竹ノ内照子　平成二～六年度
川床　トモ　平成七～八年度
永山　作二　平成九～十四年度
北里　洋一　平成九年度～現在
徳永みすず　平成十五年度～現在

○顧　問

岩元　喜吉　平成二年度～現在
二見　剛史　平成十五年度～現在

○監　事

岩下　晃　昭和五十七年～
有村アサ子　昭和五十七年～
国生　康雄　昭和六十年～
岩元　里江　昭和六十一～平成六年度
岩元　忠義　昭和六十三～平成元年度
畑中　幸雄　平成二～三年度
隈元　為次　平成四～六年度
北里　洋一　平成七～八年度
松山　絹江　平成七～十一年度
神田寿美子　平成九年度～現在
川床　トモ　平成十一～十四年度
石原　久雄　平成十五年度～現在

○会　計（昭和五十七年度以降）

岩元　里江　昭和五十七年度
隈元　仁志　昭和五十八年～六十一年度（書記兼務）
七枝　豊　昭和六十二年～平成元年度
川床　トモ　平成二～六年度
神田寿美子　平成七～八年度

○書　記

隈元　仁志　昭和五十七～六十一年度

町田　英司　昭和六十二～平成元年度

大坪　　徹　平成二～八年度

○理　事

昭和五十一年設立当時の文化団体は次の一八で、その代表者が全員理事となる（定期理事会即年次総会）。△書道（最勝寺良寛）、△生花（重森フヂ）、△詩吟（有村アサ子）、△手芸（川床トモ）、△工〔民〕芸（岩下晃）、△民謡（竹ノ内照子、今村日出子）、△絵画（松元鼎子）、△花木（山本継甫）、△芸能（丸山重記）、△文芸（波江野實）、△ラン（国生康雄）、△影絵（加来宗暁）、△栄養改善（野間トモ）、△切手（隈元仁志）、△写友会（大人一平）、△生活改善（杉本すみえ）、△着付（岩元里江）、△コーラス（今吉睦美）

その後入退部を繰り返しながら、全体的には増え続け平成十六年度は二九団体が文化協会に登録している。運営面では、平成十年度から文化ジャンルを念頭においた常任理事制を敷き、役員団の強化を図った。

〈加盟団体の推移〉

昭和十七年度現在（団体名・代表者・順不同）△文芸（玉利卓也）、△書道（最勝寺良寛）、△詩吟（岩元典男）、△着付・茶道（岩元里江）、△舞踊（竹ノ内照子）、△三味線（A）（向江政廣）、△三味線（B）（七枝豊）、△大津絵節（波江野実）、△棒踊り（相良悟）、△大正琴・コーラス（松山絹江）、△レクダンス（今村日出子）、△生活改善（重森早子）、△栄養改善（上田橋治子）、△写真（長野武弘）、△切手（隈元仁志）、△手芸・編み物（川床トモ）、△硬筆・工芸（岩下晃）、△寒蘭・万年青（国生重雄）、△花木（山本継甫）△生花（重森フヂ）

昭和五十八年度以降の加盟団体

△ふるさと水の会（土屋武彦）、△畑中書道教室（畑中幸雄）、△書道晴心会（北里晴山）、△舞踊・寿美鈴会（神田寿美子）、△箏曲・琴（瀬戸山歌寿奈）、△寛友書道会岩元教室（岩元典男）、△SPM葉月会（岩元康良）、△津軽三味線・鈴教室（沼口つや子）、△ハム同好会（隈元為次）、△刀剣同好会（岩元喜吉）、△溝辺たかや太鼓保存会（岩元栄助）、△筑前琵琶（黒木ツタ）、△舞踊・泉流真泉会（泉真三照）、△バンド・エアータウン

（山下順一）、△チャームきもの装塾（藤田恵子）、△池坊華道春愛会（古市広子）、△植物同好会（瀬戸山和子）、△宮城流股旅舞踊（森一信）、△エアロ・3B体操同好会（徳永みすず）、△ひこうきぐも（鶴薗祐子）、△ひまわりグループ（堀乃内美知子）、△池坊永山華道教室（永山久子）、△和紙絵画彩歌詩西野教室（西野喜代美）、△すこやか太極拳同好会（今村日出子）、△絵画同好会（今村勇）、△社交ダンスクラブ（丸山重記）、△長野書道会（長野順子）、△民謡同好会（前田久美子）、△藤間流涼隆会（住吉隆子）、△社交ダンス同好会（二見福美）、△フラダンス（中原麗子）、△アロハみぞべフラダンス（横山節子）、△太極拳同好会（木佐木俊春）、△腹話術（今村日出子）、△レザークラフト（村山みどり）、

※団体名の改称や代表者の交代については割愛する。

設立後半世紀、生涯学習講座に助けられながら、本町にも多彩な文化団体が育成されてきた。他市町との交流を含め、文化活動に熱心な町民は着実に増加している。

(五)　行政と文化協会

溝辺町文化協会は、行政とりわけ教育委員会の社会教育課（生涯学習課）との連携を軸に発達してきた。役員団の中に文化担当の職員が常時加わり、文化協会の諸活動を支援してきた。財政面でも深き理解が示されている。

文化協会を担当した職員は次のとおりである。

西野　隆志（昭和五十七年～五十八年度）
岩元　亨（昭和五十九年～六十年度）
松山　寿（昭和六十一年～六十二年度）
上村　茂（昭和六十三年～平成元年度）
新名　正治（平成二年～四年度）
今吉　晃（平成五年～六年度）
石野田　勇（平成七年度）
岩元　昭雄（平成八年度）
蔵園　輝美（平成九年度）
家村　剛夫（平成十年～十三年度）
町田　公男（平成十四年度～現在）

それぞれの年度に、よき指導者を得て文化活動の舞台造りに寄与された功績は大きい。その背景に歴代教育長・課長の指南を仰いだことはいうまでもない。

三　文化諸団体の育成

(一)　ひこうきぐも

平成六年八月、グリーン文化ホールみそめ館の開館を機に、楽しく、明るく生活できる心の環境をつくるため、芸術文化に触れ、感動を共有できる仲間づくり並びに社会の情報収集や、文化活動の調査研究を目的とするカルチャークラブ（仮称）を、町民に呼びかけて発足させた。

その後、会の正式名称を「ひこうきぐも」と決定し文化協会にも加盟した。活動内容として、

①公演活動の調査、研究に関すること。

②タウン情報等の収集や調査研究に関すること。

③文化活動家、文化グループとの交流活動。

④その他、目的達成に必要な事項。

を掲げ、様々な行事、イベントに積極的に参加し地域興しに貢献されている。発足時は一三名であった会員も、途中若干の増減があったが、現在は、代表者鶴薗佑子ほか一八名を超えている。

発足以来の主な活動内容は次のとおり。

平成六年度　溝辺のことを知ろう「溝辺の民話」発行（募集・編集）

平成七年度　武田鉄矢コンサート（みそめ館自主文化事業のサポート）
影絵劇団発足、ふるさと祭りで初公演他影絵公演一回
西郷どんの夏'95共催
クロスロードフェスタ参加
［南のふるさとづくり推進協議会］加入

平成八年度　地域文化推進事業地区公演運営
イルカコンサート（みそめ館自主文化事業のサポート）
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
グリーンエアポートフェスタ'97参加
影絵公演八回

平成九年度　地域文化推進事業地区公演運営
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加

グリーンエアポートフェスタ'98参加
影絵公演六回

平成十年度

地域文化推進事業地区公演運営
第一〇回「わかば基金」申請、承認を受ける
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
陵南子ども劇場
影絵公演（六回）

平成十一年度

地域文化推進事業地区公演運営
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
キリンビール新聞ＣＭ撮影
ひこうきぐも映画館（ハムナプトラ）
ひこうきぐも公演（大人になれなかった弟たち）
陵南子ども劇場　ガチャゴチャショウ
影絵公演八回

平成十二年度

地域文化推進事業地区公演運営
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
ひこうきぐも映画館（グリーンマイル）
陵南子ども劇場　番ネズミのヤカちゃん
影絵公演六回

平成十三年度

地域文化推進事業地区公演運営
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
ひこうきぐも映画館（ひっとべ）
陵南子ども劇場　とっぴんしゃん
影絵公演八回

平成十四年度

地域文化推進事業地区公演運営
南のふるさとづくり推進協議会研修会参加
グリーンエアポートフェスタ
ひこうきぐも映画館（ハリーポッターと賢者の石）
陵南子ども劇場　消防自動車ジプタ

影絵公演六回

平成十五年度　地域文化推進事業地区公演運営

南のふるさとづくり推進協議会研修会参加

グリーンエアポートフェスタ

陵南子ども劇場　なんなんなんでまん

影絵公演四回

ＮＨＫ厚生文化事業団地域福祉を支援する「わかば基金」支援金をいただいた。

ひこうきぐもは、結成以来約一〇年。その自主活動に対し同基金から「民話や影絵を中心に地域文化の振興に貢献する活動はユニーク」として、全国六一六団体のなかから選ばれた団体のひとつである。

感受性豊かな子どもの心　優しさと楽しさの活動

影絵はみんなの手作りで、舞台・人形・脚本・吹き込み・照明など会員の特技をいかし自主的に参加活動

これらが高い評価となったものである。

文化性が乏しいといわれる溝辺町において、今後の活躍を期待するものである。

(二)　溝辺たかや太鼓保存会

溝辺たかや太鼓保存会は、昭和六十三年八月、溝辺町の町おこし事業の一環として結成され、地域文化の向上と会員相互の連携、融和を図り、もって地域興し、ふるさとづくりに寄与することを目的とした。そして、

①溝辺たかや太鼓の継承保存に関すること。

②溝辺町が主催する行事に積極的に参加する。

③その他文化の振興に関すること。を主な事業とした。

太鼓は、溝辺町が伊集院町にある宮内太鼓楽器店から約一千万円かけて備品購入し、管理活用を保存会に全て一任した。なお、保存会は町から運営費の助成を現在も受けている。打ち子（太鼓の叩き手）は広く溝辺町民から募集し、小学生二名を含む総勢二八名が集まった。折りしもこの年八月に、西郷像除幕式（現西郷公園）が予定されており、保存会の演奏初披露をこの除幕式に合わすべく練習を開始した。

演奏曲の作曲は、当時、溝辺中学校の兼廣晨史校長先生に依頼し、合わせて叩き方（所作）についても、同じく同中学校の山口岑生教頭先生と共に指導を仰いだところである。

発足当初は、太鼓製作が間に合わず車の古タイヤを太鼓に見立てての練習で、練習場所であった当時の町中央公民館（旧溝辺町役場跡上）からは、太鼓の音ならぬタイヤを叩く鈍い音が響いていた。初めの頃はリズムもバラバラであったが、本物の太鼓が到着した頃は打ち子の腕も大分上達していた。

○太鼓明細　六尺締大太鼓一台、二尺五寸宮太鼓一台、二尺宮太鼓二台、一尺四寸宮太鼓六台、一尺二寸締小太鼓六台、ホラ貝一台、鐘一台、（後に一尺二寸のボルト式締小太鼓五台を購入）

西郷像除幕式後は、同年溝辺町畜産振興大会、作曲協会演奏会での演奏を行い、ふるさと祭り出演と元旦の遥拝式における打ち初めは、毎年の恒例演奏として現在も続けている。翌年からは溝辺町夏祭りにも出演依頼があり、同じく毎年恒例として現在も続けている。

ただ、年を追うごとに保存会会員（成人）が減ってきて、現在は小学生一名、中学生二名、高校生八名、成人五名、計一六名の構成になっている。また、男女の比率は、成人は全員男性で、小・中学生及び高校生は高校生のうち一人だけ男性で後は全て女性である。演奏出演のほとんどが、小・中・高校生のみの構成で行っている。

主な活動内容（太鼓演奏）は次のとおり。

平成元年度　町制施行三〇周年記念式典
東京都台東区との友好の夕べ
西郷公園オープンセレモニー

平成二年度　霧島九面太鼓の一員より演奏指導を受ける　西郷公園夏祭り
フラワーホーム敬老の日
林田温泉日本トラベル旅行会
姶良地区芸術祭　溝辺町成人式
グリーンエアポート完走歩大会

平成三年度　龍門滝まつり　溝辺町綱引き大会
竹子コスモスふぇす田　からいも祭り
林田ホテル　鹿児島クボタ

平成四年度　陵北地区夏祭り　西郷公園夏祭り
竹子盆踊りの夕べ　竹子コスモスふぇす田　鹿児島女子大銀杏祭　高陵寺保育園落成式

平成五年度　林田ホテル　陵北地区夏祭り　はらっぱ村のカーニバル　みそめ館落成式　JAあいら　姶良地区青少年育成協議会

平成六年度　カントリーフェスタインみぞべ'94　霧島高原太鼓まつり　陵北地区夏祭り　照国神社初市

平成七年度　陵北地区夏祭り　溝辺カントリーオープンセレモニー　西郷公園菊祭り　かごしまお茶まつり　かごしまの太鼓'96

平成八年度　日本道路公団　陵北地区夏祭り　竹子盆踊りの夕べ　いきいき芸能祭り

平成九年度　竹子盆踊りの夕べ　横川緑風園夏祭り　茶業青年の夕べ

平成十年度　陵北地区夏祭り　竹子盆踊りの夕べ

平成十一年度　町制施行四十周年記念式典　鹿児島県太鼓連合ジュニアコンクール

平成十二年度　鹿児島県太鼓連合ジュニアコンクール　県立桜ヶ丘養護学校太鼓体験学習

平成十三年度　元旦演奏のみ

平成十四年度　焼酎公園GEN夏祭り　加治木喜びの里　県立桜ヶ丘養護学校太鼓体験学習　陵南小学校五年生和楽器体験学習に係る太鼓指導

平成十五年度　フラワーホーム夏祭り　加治木喜びの里　麓原自治公民館十五夜まつり

元旦遥拝式　打ち初め

四　文化財

(一)　文化財の指定

文化財の保護は、文化財保護法によりわが国の歴史文化などを正しく理解、認識し、文化財の保護が適切に行われなければならないとされている。文化財とは①建造物、美術工芸品(絵画・彫刻・工芸品。書籍・典籍・古文書その他)の有形文化財。②芸能（演劇・音楽）工芸技術その他の無形文化財。③衣食住、生業、信仰、年中行事などに関する風俗慣習、民俗芸能などの「無形」とこれらに用いる衣服、器具、家具など「有形」の、町民の生活推移の理解のため欠くことのできない民俗文財。④史跡（貝塚・古墳・都城跡・城跡・旧宅）名勝（庭園・橋・峡谷・海浜・山岳）⑤天然記念物（動物・植物・鉱物）など学術上価値の高い記念物に分かれている。

このような文化財の中から特に溝辺町で指定し、その文化財の保護をして、町民の財産であることを自覚し文化的活用に努める必要から、昭和五十三年溝辺町文化財保護条例が制定され、昭和五十七年六月一日第265表の一から五までの物件が、さらに平成三年十一月八日に六から九までの物件が、溝辺町文化財として指定された。

なお、2の鷹屋神社の檜については、平成五年八月九日襲来した台風七号により倒木し現在は消滅している。

第265表　溝辺町指定文化財

番号	種別	名称	所有者	管理者	場所
1	史跡	溝辺城跡	麓公正会	同左	麓4644-1他
2	記念物	鷹屋神社の檜	〃	〃	麓4260
3	〃	鷹屋神社銀杏	〃	〃	〃
4	有形民俗文化財	祝儀園田ノ神	祝儀園集落	〃	竹子祝儀園
5	〃	石原の田ノ神	石原集落	溝辺町	中央公民館
6	有形文化財	金山橋(第3橋)	溝辺町	同左	竹子上牟田
7	記念物	段溝跡	並松博他	〃	竹子野坂
8	〃	野首の墓石群	岩元晴美他	〃	麓野首
9	〃	瑞泉山心慶寺跡	麓公正会他	〃	麓中丸

(二)　埋蔵文化財

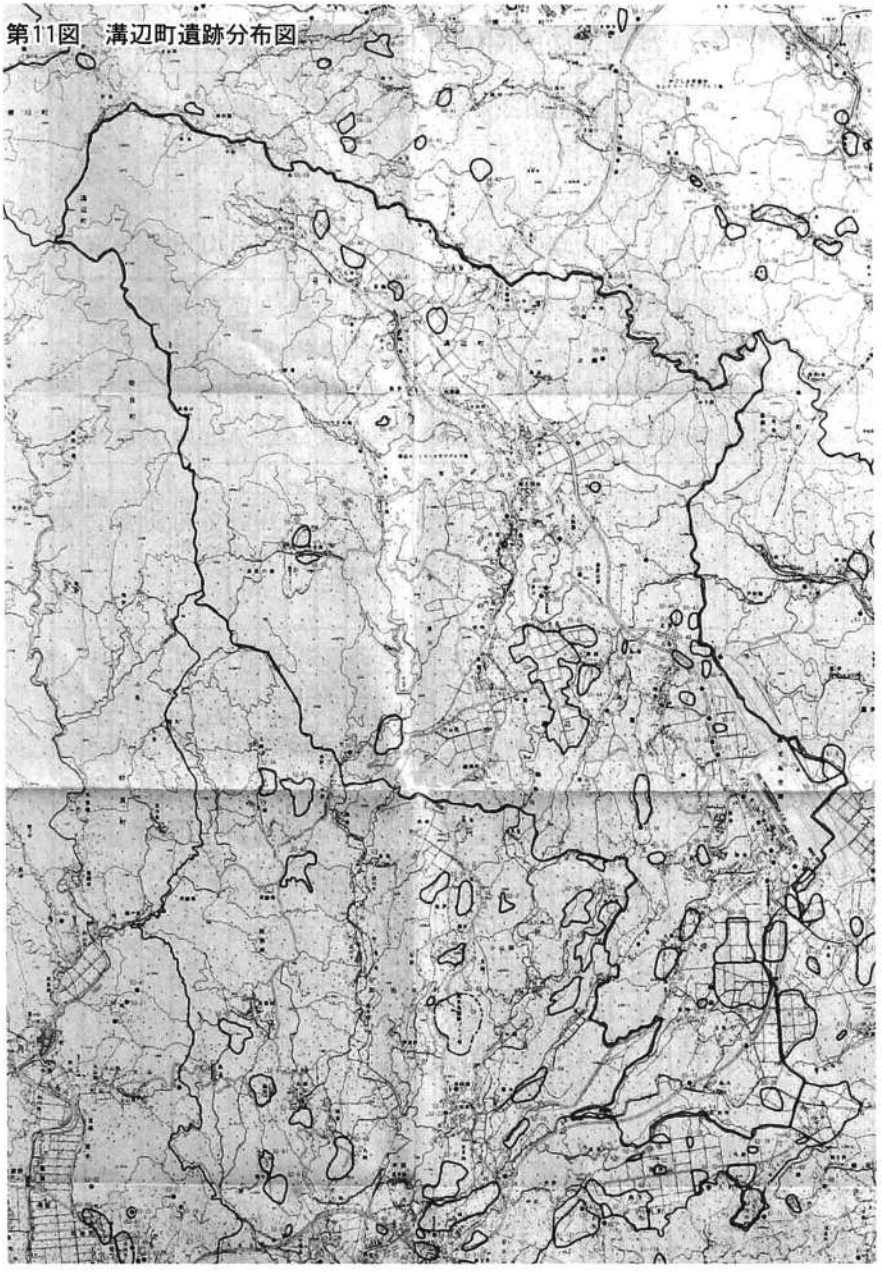
溝辺町における埋蔵文化財については、空港建設や九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査（鹿児島県教育委員会が実施）が、初版及び続編一に記述されているところである。埋蔵文化財の発掘調査・保護・啓発普及を図るため、平成八年度に埋蔵文化財専門員の配置を行い、本格的な発掘調査を行ってきた。詳細については、各埋蔵文化財発掘調査報告書を参照していただくとし、遺跡の概要について第266表に示す。

なお、本町の遺跡の分布状況は、第11図及び第267表のとおりである。

参考図書　溝辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(一)
収蔵遺跡　南十三塚C遺跡
溝辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(二)
収蔵遺跡　水尻原A遺跡
水尻原C遺跡
南十三塚原遺跡
南十三塚B遺跡

第266表　遺跡概要

遺跡名		水尻原A（みずしりばるエー）	水尻原C（みずしりばるシー）		南十三塚原（みなみじゅうさんつかばる）	南十三塚B（みなみじゅうさんつかビー）	南十三塚C（みなみじゅうさんつかシー）
所在地		溝辺町麓	溝辺町麓		溝辺町崎森	溝辺町崎森	溝辺町崎森
遺跡番号		55-45	55-44		55-25	55-36	55-37
北緯		31°48′15″	31°48′41″		31°46′36″	31°46′54″	31°46′20″
東経		130°41′25″	130°41′36″		130°42′43″	130°42′46″	130°42′30″
調査期間	確認調査	平成10年1月19日～2月16日	平成10年1月19日～2月16日		平成7年7月17日～8月8日	平成8年11月12日～11月25日	
	全面調査	平成11年7月5日～8月6日	平成11年7月5日～8月6日		平成10年5月18日～5月29日	平成9年2月17日～2月21日	平成12年2月4日～2月29日
調査面積		125㎡	440㎡		45.7㎡	72㎡	242㎡
調査原因		県営畑地帯農道網整備事業					県地方特定道路整備事業
種別		散布地	散布地		散布地	散布地	散布地
主な時代		古代	縄文時代	古代	縄文時代 古墳時代	縄文時代	古墳時代
主な遺構		－	土坑 ピット 焼土	－	－	－	－
主な遺物		土器	押型文土器 撚糸文土器 手向山式土器 石坂式土器	土師器 須恵器 内黒土師器	石鏃 成川式土器	中原式土器 石坂式土器	成川式土器



第11図　溝辺町遺跡分布図

第267表　溝辺町遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物等
1	石峰	麓石峰	縄文(早)	押型文土器・縄文(前・後)土器・チャート質石器
2	菅ノ口	有川菅ノ口	縄文	石斧、土器片
3	木佐貫原	麓木佐貫原	縄文	還状石斧、磨製石斧、石鏃、石匙
4	麦牟田	有川麦牟田	縄文(前・中)	岩崎下層式、塞之神式並木式土器
5	竹山	有川竹山	縄文(前)	石鏃、石、石斧、吉田式土器
6	据石ヶ岡	竹子据石ヶ岡	縄文(前)	押型文土器
7	中野	麓中野	縄～歴	縄文式土器片、弥生式土器、土師器須恵器片、石鏃黒曜石片
8	橋ノ口	麓橋ノ口	〃	縄文式土器、弥生式土器、土師器
9	石原	有川石原	縄文・弥生	縄文式土器弥生式土器片
10	桑ノ丸	崎森桑ノ丸	縄～歴	縄文式土器片、弥生式土器、土師器
11	長ヶ原	麓長ヶ原	〃	縄文式(前)土器、弥生式土器、土師器
12	七ツ次	麓七ツ次	〃	縄文式(後)土器、弥生式土器、土師器
13	木屋原	麓木屋原	〃	縄文式(前・早)土器、弥生式土器土師器、須恵器片、青磁片
14	枦場	麓枦場	〃	縄文式(前・後)土器、弥生式土器、土師器、須恵器
15	東原	崎森東原	〃	縄文式(前・後)土器、弥生式土器、土師器、石鏃
16	山神	麓山神	〃	縄文式(前・後)土器、弥生式土器、土師器、須恵器、青磁
17	曲迫	麓曲迫	〃	縄文式(後)土器、弥生式土器、土師器、須恵器
18	倉ノ山	有川倉ノ山	弥～歴	弥生式土器片・土師器片
19	菅ノ口A	有川菅ノ口	弥	弥生式土器
20	菅ノ口B	有川菅ノ口	弥	弥生式土器
21	柳ヶ迫	麓柳ヶ迫	弥～歴	弥生式土器・土師器
22	松木原	麓松木原	〃	弥生式土器・土師器
23	葛根塚	麓葛根塚	〃	弥生式土器・土師器
24	松ヶ迫	麓松ヶ迫	〃	弥生式土器・土師器
25	南十三塚原	崎森南十三塚	縄・古	成川式土器
26	十三塚原第二地点	鹿児島空港内	弥	弥生式土器
27	向井田	三縄向井田	弥	弥生式土器

28	高松山城跡	三縄高松		
29	高松城跡	有川竹山		
30	玉利城跡	崎森玉利		
31	溝辺城跡	麓城山		
32	笹段	有川笹段	縄・古	縄文式・成川式
33	丹生附	有川丹生附	古墳	成川式
34	榎原	崎森榎原	古墳歴史	成川式・土師器
35	西原	崎森西原	古墳歴史	成川式・土師器
36	南十三塚B	崎森南十三塚	歴史	桑ノ丸タイプ
37	南十三塚C	崎森南十三塚	古墳	成川式
38	南十三塚	崎森南十三塚	縄文	縄文時代早期
39	竹子原A	竹子宮川内	縄文	
40	竹子原B	竹子石井口	縄文	
41	竹子原C	竹子宮脇	縄文	
42	竹子原D	竹子宮原	縄文	
43	草水原	麓水尻原	古代	土師器
44	京ノ峯	麓水尻原	縄文古代	平栫式土器、山形押型文土器、楕円押型文土器、土師器、内黒土師器、須恵器
45	水尻原	麓水尻原	縄文	平栫式土器、山形押型文土器、楕円押型文土器
46	北麓原A	麓北麓原	古代	
47	北麓原B	麓北麓原	古代	
48	北麓原C	麓北麓原	古墳	
49	北麓原D	麓北麓原	古代	
50	北麓原E	麓北麓原	古墳	
51	麓原	麓麓原	古代	
52	五右ェ門塚	麓五右ェ門塚	古墳	
53	木佐貫原B	麓木佐貫原	古墳	
54	後ヶ原	麓鳥ヶ原	古墳	

(三)　鷹屋神社の棟札

（本文は平成九年三月発行の『文化みぞべ』第七号に掲載された岩元昭雄氏の文章である。）

はじめに

平成四年秋、川内市の郷土史研究家、江之口汎生さんが溝辺町に来られ、江之口さんは『高屋山陵孝』（明治四年刊）や「三國名勝図会」などを調べるうちに、内之浦にある高屋神社や溝辺の鷹屋神社の社殿の奥に無造作に置かれている二枚の板をみつけ、ぬらしたタオルでほこりを拭いていくうちに、ほこりの下からうっすらと墨で書かれた文字が見えてきた。

その時、調査に加わった人々は、この板切れの文字がそれほど貴重なものとは考えていなかった。それでもなんとか読み取ってみようと、その板切れを写真に撮り、いろんな人に見てもらい、溝辺町教育委員会や文化保護審議委員会でも力を尽くしたが、解読はできなかった。

最後に板は県の歴史資料センター黎明館へ持ち込み調査資料科の課長、長谷川宏さんのお世話もあって、小池一徳さんが読み取り、出村卓三さんが第一歩の意味付けをなされた。

この解読と意味付けの作業が進む過程で、この板切れはだんだん重く貴重な宝物に変化しつつあり、この二枚の板は『棟札（とうさつ）』といい、建築物の棟上の時に建物とその工事内容・願文・経文（偈句―げく）・施主（スポンサー）・工事年月日・工匠名（工事担当者）などを書いて棟木に打ち付けた木札で、いわば建築記念銘文というものである。

多くの棟札には、武運長久、天下泰平、五穀豊穣、息災延命、火災消滅などの願文が並べられている。棟札を作成することは、寺社の造営と同様に国家の安泰、領主や村の繁栄を祈願する重要な作業であったと考えられる。

発見されたこの二枚の棟札とも書かれた年代がはっきり記入されており、一枚は正保(しょうほう)四(一六四七)年、もう一枚は宝暦(ほうれき)十二(一七六二)年である。百年以上も隔たった時間を超えて、一つの社にまつわる二枚の棟札が同じ場所に現存していたということは、奇跡に近い。しかも今まで郷土の文献にわずかに残る人名や、かすかな言い伝えとして語られていた人の名が、薄れてはいるが、いわば墨痕鮮やかに残っていた。

このことは、文献資料の希薄な溝辺町の郷土史研究に、

確かな「物」で検証できる新たな分野が開けたことを意味します。今回解読された二つの棟札は、当時の村落組織や麓の人数、名前等のよくわかる貴重な資料である。これを調べていくと、近世から明治にかけての村落の変遷が分かってくる。同時に溝辺町だけではなく、近世薩摩藩の「門切り」制度や郷土の実態を解明する歴史研究資料としても、貴重な資料になるものである。

まだ、研究は始まったばかりで、多くの人の関心と協力で、溝辺の歴史が一歩一歩解明されていくことを期待したいものである。

以下の説明では、六四頁以降の資料を参考にしてほしい。

正保四年棟札について

A面(1)―「封」四文字

棟札の四隅にある「封」四文字は、災いを封じるという意味で書かれた、祈祷の慣例的書式である。この棟札は社殿造営の完成に当たって鷹屋大明神の別当寺の僧（修験者）によって書かれたものと推測され、その当時が心慶寺だったのであろうか。

A面(2)―標題的な部分

「奉造立鷹屋大明神両善神王宝殿一宇」＝江戸時代は神社のことを大明神ともいい、「鷹屋大明神」は鷹屋神社のことである。鷹屋神社の門（出入口）を守る二つの神（両善神社）の社殿一宇（一棟）を建てるに当たって願を掛けるという意味である。

「大壇邦大梵天王」と「大願主帝釈天」を併記するのは、大宇宙を支配する二つの神に守られていることを表現したものである。これは修験道系の人が作成する棟札の基本的な様式である。

A面(3)―願文の枕「四行二〇字」

これは願文の枕にあたる部分で、形式的な決り文句だったのでしょう。

「聖主天中天」＝（天地諸々の神々）

「迦陵頻伽聲」＝（極楽にいるという想像上の鳥の声）

「哀愍衆生者」＝（一般の人々＝村人・民衆たち）

「我等令敬礼」＝（私どもは敬い申し上げます）

大意は「衆生を救うため宇宙のすべての神々に我等は謹んでお礼申し上げる。」という意味で、このような経文（偈句）は法華経などからとった例が多そうである。

A面(4)―願文の本文

これは社殿寄進にあたっての願文で、その大意はおおよそ次のとおりである。

天照大神に、天地がいつまでも変わらないように、今の状態がいつまでも円満であるように願うものである。同時に地頭伊集院宮内少輔忠勝、曖岩元平左衛門尉篤重、並びに溝辺講の衆生各々は、①息災(無事)、②延命(長生き)、③子孫繁昌(一家繁栄)、④武運長久(戦いに勝つ)、⑤領内安全、⑥万民豊楽(みんな豊かで楽をする)、⑦四海太平(世の中平和)、⑧皆令満足(何事も満足な状態)、⑨如意成就(思いが実現する)、⑩心身堅固(心身健康)、⑪悉地円満(全ての場所が円満にいく)をお願いいたします。

願文の中の、二、三の語句の意味は既ね次のとおりである。

「金輪」＝太陽。

「聖皇」＝天照大神。

「地頭」＝伊集院宮内少輔忠勝。(藩主の名代としてその地の軍事・行政。司法・人事を掌握する役職で、いつもは城下に移住し、めったに所領地に来ることはなかった。藩の重職を兼務することが多い。)

「曖（あつかい）」＝岩元平左衛門尉篤重。(郷士の年寄で郷政を総括する役職)

「溝辺講衆中」＝溝辺の郷士（武士）組織の者たち。

A面(5)―直接造営の仕事をした人たち。

社殿造営（工事）に携わった神官や神社関係の人たちであろう。

右大宮司＝神主。

本大宮司＝神官。

下の「封」は、上部の「封」と照応する。

B面―はこの社殿造営の企画を推進した主だった人々の名簿。

B面(1)―これも祈願や奉納の場合の一形式である。

「水災」（水害）、「火災」、「風災」（風の害で当時も台風に悩まされていたのです。）から逃れたいという願いだ。

「一結講衆」＝この企画に参加した講の者全てという意味。平生の講ではなくこの造営に当たって結集した講であろう。札下隅の「諸衆」「敬白」と照合する。

「正保四丁亥年」＝西暦一六四七年で、今から三六〇年

前に書かれたことが明白である。

「丁亥年」＝ひのとゐの年。「九月吉祥日」＝九月のめでたい日。

B面(2)―「岩元小左衛門」から「藤田蔵之助」までは苗字があります。これは当時の武士の戸長が二〇名いたということで、溝辺郷に藩の軍役に応ずる武士の戸数が二〇軒だったことを意味すると思われる。

B面(3)―「有馬六兵衛尉」の「尉（じょう）」は平安時代からの役人（今の公務員の三等官にあたる）の一官位の呼び名だ。「尉」の付いた人と付いていない人にどんな違いがあったのであろう。一般には郷士の年配者に付けた例が多いそうである。

B面(4)―「源四郎」から「助市」までの三五人は、苗字（姓）がなく、薩摩藩独特の農民支配の行政組織「門」の代表（名頭という）たちと思われる。これから当時溝辺のこの一帯には三五の「門」があったと推察される。「門」はほぼ四～五軒が一組に組織されていたから、農家戸数は役一七五戸程度だったのであろう。

B面(5)―大工＝（武士）建物を作る。小工＝建築にかかわる大工以外の仕事をした。例えば、壁―左官、造作―細工師等。

宝暦十二年棟札について。

これは社殿改築（御造替）の際の寄進に関する記録だ。A面には改築の年と此の事業を進めた人々の役職名と氏名が記され、B面には改築の経費を寄進した多くの人々の名前が記されている。

A面(1)

「宝暦十二年壬午天」＝西暦一七六二年、二三四年前。みずのうえうまの年。

「御造替二付寄進」＝改築に当たっての寄付。

A面(2)―この改築を進めた人々の役職と名前で役職の内容は次のとおり。

「曖」＝「あつかい」と呼び、郷政の中心になる役職で、普通は郷士の年配者がなった。その土地の支配者的存在で、村長といった人物。大きな郷では二～四人の集団でこの役を果たしていた。

「与頭」＝「くみがしら」と呼び、麓郷士で組織する軍事集団のリーダー。薩摩の郷士は通常は農業に従事し、いざという時は武士の役目を担っていた。軍役に出る場合に郷士を指揮した。

通常も郷士を配下にし、さらに二才（にせ）や役のない郷士も配下にしていた。

「横目」＝「よこめ」と言い、治安を司り、今の警察・検察と似た役目と同時に、郷全体の経済統制にもかかわり、酒の製造販売なども管理し税を取り立てたり庶務の役も果たした。

以上三役を「郷三役」と呼ぶ。これらの人々が政治を行った場所を「地頭館（地頭仮屋）と言うが、溝辺郷の仮屋は今の役場の駐車場の辺りにあったと思われる。詳しくは「溝辺町郷土史」の九〇～九一頁を参考にしてほしい。

「竹木見回」＝各家に柿一本、ミカン一本ずつ植えさせ届け出させたり、山の竹や木材の管理から、それぞれの家の庭木の一本一本まで調べ税を掛けたりする役だ。竹や木一本切ったりするのにも許可が必要で、島津藩の厳しい財政事業と統制をしのばれる。

「普請見回」＝道路、河川など郷土全体で普請をするときの監視役。神社の普請も担当した。

「筆者」＝書記の役目。記録係。

「取締」＝風紀係のような役目。密偵や取締り。

「庄屋」＝郷内のそれぞれの地区には武士も農民も一緒に住んでおり、武士は移動で他所からの出入りもあるが、農民は定住し、その定住している人々の代表の役と、農民の代表の役を兼ね、主に地郷士がこれを勤めた。「麓」に対し「在」の旧家の当主などがなることもあり、「在」の区長てき存在であった。

溝辺町郷土史（九二頁）では、慶応元（一八六五）年当時「曖四人、見回三人、与頭四人、牛馬改役二人、横目三人、普請方見回役一人」と記されている。

B面(3)―「岩元甚右衛門」

この人はA面の役職者には例記されていない。特別な役職や地位には無かったと思われる。しかし「曖の竹下興左衛門」や「与頭の岩元佐金」が三百文「横目の上原辰右衛門」百三十二文などと比べると「銭壱貫文」と寄進の金額がずば抜けて多額だ。さらに「右同母」、さらに「岩元甚右衛門下人与左衛門」というように、この人物にゆかりの人が別々に寄進しているのを見ると、この「岩元甚右衛門」という人物は、鷹屋神社と深い関わ

りを持つ人物ではないかと思われる。

B面(4)―の増加が意味するものは？

前の棟札が、正保四（西暦一六四七）年に書かれてから、一一五年後の宝暦十二（西暦一七六二年）に本殿の改築があったと思われ、この棟札はその時書かれたものだ。その間に郷士、すなわち軍役に従事する武士の戸数がどれぐらい増えたかがこの記録から推測される。一段の岩元甚右衛門から七段の「岩元右衛門」までに、一一〇名の名前が記されている。その中から女性や「心慶寺祥天和尚」や「岩元甚右衛門下人与左衛門」「大定院即印坊」など、明らかに軍役に関係なさそうな人を引いても、一〇四名の名前が見える。正保四年の棟札にはこのような武士が二〇名ほどだから、一一五年間に、いざと言う時に、直ちに組織される兵力となる武士が五倍に増えたことになる。

島津藩は総人口に対して武士の数が非常に多かったと言われるが、この間の島津藩の歴史を解明するのにも貴重な資料ではないだろう。

B面(5)―女性が寄進した記録の意味？

人名の中には「〇〇之母・〇〇之妻」といった記述が一〇ヶ所余りある。女性の地位が低かったと思われる当時に、これだけの女性が、夫や息子とは別口に寄進をし、それが記録されているのは珍しいのではないか。

B面(6)―「水尻橋之口庚甲講物」

「庚甲講物」とは「二才組講（にせ＝若ものの講）のこと」ではないかと思われる。個人的に寄進をする財力の無い若者は、今で言う青年団のような組織として寄進をしたのだろう。

B面(7)―「諸中宿」

＝「中宿」は「なかやどい」と言い、薩摩藩が、武士から没落しかけた人たちを田舎に送って荒地を開墾させ、その期間は租税を免除し、立ち直らせる制度をとったもので、立ち直った後もそのままそこに住みつく人もいれば、元の所に帰る人もいた。八段から十二段にかけてこのような人が八五人も記録されていることは、溝辺に未開拓の荒地が多くあり、藩の政策である中宿で相当多くの武士が移住したと推測される。しかし、その詳しい理由、どこから移住したのか、他にどのような受入れの条件があったか等々、多くの疑問や研究の課題が残る。溝辺町は、近世に他所から移住してきた人々によって、次

第に人口が増えていったことを示している。

ここにある苗字で七段までには無くて現在も溝辺町内にある苗字がある。そのルーツがここあたりだったのかも知れない。

B面(8)―十三・十四段の「竹子村」について

この二つの段の人名の上には、「並松之」・「岩崎之」・「祝儀園之」といった、現在の地名や苗字で残っているものが付いている。これは「門」の呼び名である。

「門」の代表を「名頭」といい、当時竹子に二二ほどの「門」があったことを示している。一つの「門」は四軒から五軒の農家で形成されており、百戸ほどの農家があったと推測される。「門」の呼び名がそのまま地名や苗字として残っていることを、現存する資料で証明する非常にまれで貴重なものである。

なお、竹子地域の「門」だけが寄進をしたとは思えないが、他の有川・麓・崎森などの分も、どこかに残っているのではないだろうか。それとも、門割制度は水田耕作地の多い竹子地区だけで行われていたのかも知れない。これを機会に他の大字の記録や郷土史物語などを比較しながら、調べてみる必要があろう。

B面(9)―

宝暦十二年という年は、木曽川の治水工事のために、薩摩藩の島津藩全体が極端な窮乏の状態にあった時期である。この時期に、村をあげてこのような改築のための寄進が行われたことは、鷹屋神社が溝辺の人々にとってどのようなものであったのかなど、この棟札はいろいろな思いを私たちに投げかけて来る。

むすび

この棟札の解読に力を貸してくださった、黎明館の出村先生は、「これは、溝辺郷だけではなく、薩摩の近世史を調べる上からも、大変貴重な歴史資料である」と言っておられる。この棟札の掘り起こしは、溝辺の郷土史研究が、科学的な資料に基づく研究として、新たな深まりを見せるであろうことを感じさせる、大きな発見だ。

郷土史などについては全く無知な私が、図らずも報告の筆を執ることになった。様々なご批判をお待ちするとともに、黎明館の諸先生方、町文化保護審議会委員会の方々、生涯学習課のスタッフなど関係された方々のご協力に深い敬意を表す。特に出村卓三先生には数々のご教示、ご指導をいただきました。深く感謝するものである。

『正保四年棟札　A面』

封

大檀那大梵天王

奉造立鷹屋大明神両善神王宝殿一宇

大願主帝釈天王

聖主天中天
迦陵頻伽聲
哀愍衆生者
我等令敬礼

右意趣者為金輪聖皇天長地、御願円満
當地頭伊集院宮内少輔忠勝▲岩元平左衛門尉篤重
殊者溝辺講衆中各々息災延命子孫繁昌武運
長久領内安全万民豊楽四海太平一一求願
皆令満足如ょ成就心身堅固悉地円満

右大宮司
宮地源左衛門兼將
本大宮司
中原甚作教秀
田上次郎左衛門
岩本主左衛門篤昌
吉原内蔵丞篤次
徳田善右衛門盛能

封　封

『正保四年棟札　B面』

(1)　(2)　(3)　(4)　(5)

正保四　丁亥年

(2)←┤岩本小左衛門
薗田久左衛門
同名助右衛門
有馬六兵衛尉
同名五郎衛門
岩重磯衛門
窪田源衛門
鳥井伝左衛門

(3)
野添権左衛門尉
鳥井助兵衛尉
下嶋与七兵衛尉
下村久左衛門
瀬戸口藤右衛門
塚田主斗介
隈本権之允
藤井源左衛門

(4)←┤　├→(2)
吉左衛門尉
慶右衛門尉
彦兵衛尉
源四郎
藤田蔵之助
藤井与左衛門尉
竹下清右衛門尉
中原作蔵

市左衛門尉
助左衛門尉
助四郎
源助
休蔵
武蔵
作蔵
長吉
源左衛門尉
弥左衛門尉
源兵衛尉
助吉
仲左衛門尉
孫右衛門尉
十助
次之助

大右衛門尉
与右衛門尉
弥右衛門尉
休兵衛尉
次之作
市右衛門尉
権右衛門尉
休左衛門尉

内蔵助
与助
源左衛門尉
与市左衛門尉
助作
蔵石衛門尉
助市

大工
赤塚主膳正
竹下杢右衛門尉
大内山藤兵衛尉
小工
村田九衛門尉

諸衆
敬白

(1)　火災
水災
風災
一結講衆
九月吉祥日

『宝暦棟札　A面』

(裏)　(1)　(9)

宝暦十二年壬午天

奉御造替ニ付寄進

十二月二十日

(2)
曖
与頭
右同
横目
竹木見廻
普請見廻
右同
筆者
取締
庄屋

竹下與左衛門
岩元佐金
岩元甚左衛門
上原辰右衛門
岩元岩右衛門
宗像小左衛門
牧田六郎
外山幸兵衛
岩元平六
岩元権右衛門

『宝暦棟札　B面』

「一段」

一　錢壱貫文　岩元甚右衛門
同　同三百文　右之母　(5)
同　同五百文　岩元周左衛門
同　同五百文　岩元甚太夫
同　同五百文　岩元六太夫
同　同三百文　心慶寺　祥天和尚
同　同三百文　竹下興左衛門　(5)
同　同百文　右之母
同　同三百文　岩元甚五右衛門
同　岩元権右衛門
同　岩元勘兵衛
同　岩元佐金
同　同百文　岩元平六
同　同弐百文　右之妻　(5)
同　岩元甚左衛門
同　宗像舎人
同　岩元岩右衛門
同　宗像小左衛門
同　同百四拾八文

「二段」

同　同百四拾八文　田上五次右衛門
同　同百三拾弐文　上原辰右衛門
同　同百文　岩元喜平太
同　岩元周五郎
同　外山幸兵衛
同　岩元源五右衛門
同　田上次郎兵衛
同　岩元平助
同　倉元源右衛門
同　横山助右衛門
同　横山助武衛門
同　竹下興次右衛門
同　寺田仲左衛門
同　前田覚右衛門
同　町田覚右衛門
同　大定院即印坊
同　町田休右衛門
同　上原八左衛門

「三段」

同　同百文　村田次右衛門
同　沼口甚六
同　宗像猪之助
同　岩元五郎左衛門
同　田上八郎左衛門
同　同四拾八文　寺田主左衛門
同　寺田仲次郎
同　野間平兵衛
同　寺田武兵衛
同　花堂武左衛門
同　同十三文　右之母
同　岩元喜八
同　竹興次右衛門　池上長左衛門
同　同四拾八文　同苗十左衛門
同　外山甚右衛門
同　(3)　岩元甚右衛門　牧田六郎
同　外山十次郎
同　下人与左衛門　(5)

「四段」

同　同四拾文　岩元新左衛門
同　同三拾弐文　前田利右衛門
同　前田五郎
同　久保田勘左衛門
同　国生伝左衛門
同　国生六左衛門
同　村田清右衛門
同　沼口休左衛門
同　牧田弥右衛門
同　倉元堅之丞
同　横山伊左衛門
同　岩元喜三右衛門
同弐拾四文　野間仁左衛門
同　上原藤次郎
同　野間七兵衛
同　外山十兵衛
同　田上次郎左衛門
同　国生仁左衛門

「五段」

同　同弐拾四文　倉元武三右衛門
同　久保田弥左衛門
同　神田橋新助
同　神田橋慶右衛門
同　国生六之丞
同　野間源左衛門
同　横山佐太夫
同　岩元長蔵
同弐拾弐文　宗像新助
同拾六文　前田源助
同　村田茂太夫
同　久保田幸兵衛
同　郡山権右衛門
同　同苗喜右衛門
同　同苗与左衛門
同　神田橋新兵衛
同　国生喜右衛門
同　国生次兵衛

「六段」

同　同拾六文　花堂休右衛門
同　前田弥平次
同　村田三右衛門
同　横山善助妻
同　岩下郷兵衛母　(5)
同拾三文　宗像金蔵
同　野間幸太夫
同　溝口新助
同　同苗喜兵衛
同　久保田藤兵衛
同　薗田次右衛門
同　国生宇右衛門
同　郡山太次右衛門
同拾弐文　町田武兵衛
同　沼口武兵衛
同拾文　村田九左衛門
同九文　同苗満右衛門
同八文　花堂休八

「七段」
同八文　花堂戸兵衛
同　花堂喜左衛門
同　同苗善七
同六文　横山稲右衛門
同　花堂休左衛門
同　岩元平右衛門
(6)⟶(4)⟶
同弐貫文　水尻橋之口庚申講物

「八段」
(7)
諸中宿
銭三百文　朝隈利右衛門
同弐百文　福屋七右衛門
同百文　鳥井孫七
同　甲斐甚左衛門
同　大山五郎左衛門
同　鳥井正左衛門
同拾三文　宮崎正左衛門
同百文　右之母　鳥井藤左衛門
同　宮田藤右衛門
同三拾弐文　有馬四郎右衛門
同　右之妻　右四郎右衛門母
同百文　中村市郎左衛門
同　荒武周次郎
同　大山佐平次
同八拾文　猪俣十兵衛　元新蔵

「九段」
同六拾四文　大山次郎右衛門
同　有馬助右衛門
同　二見休兵衛
同　有馬分右衛門
同四拾八文　松元仁右衛門
同　猪俣直右衛門
同　萩原長右衛門
同四拾文　海老崎彦市
同　久木田喜右衛門
同三拾弐文　壱岐休左衛門
同　児玉長右衛門
同　大山源太
同　今村休七
同拾三文　有馬喜藤
同　右母
同三拾弐文　佐藤覚七
同　鳥井藤兵衛
同　蠣木甚兵衛

「十段」
同三拾弐文　鳥井藤五右衛門
同　久保田源六
同　大迫覚右衛門
同弐拾四文　鳥丸源七
同　鳥丸源六
同　二見喜左衛門
同　永田稲右衛門
同　二見次右衛門
同　恒吉関八
同　朝隈主右衛門
同　津曲宇太夫
同　野間八兵衛
同弐拾文　岩切次郎兵衛
同百文　右之妻
同拾六文　荒武十左衛門
同　岩下休次郎
同　萩原六右衛門
同　海老原三右衛門

「十一段」
同拾六文　岩下慶右衛門
同　猪俣十左衛門
同　竹下休蔵
同十三文　美坂与左衛門
同　萩原仲右衛門
同　宮路才右衛門
同五文　本吉五兵衛
同　横山権四郎
同　横山七右衛門
同百文　横山七右衛門
同　江藤牧右衛門
同　黒田半左衛門
同　益山長左衛門
同拾弐文　緒方助右衛門
同拾文　竹之内清右衛門
同八文　萩原納右衛門
竹下市左衛門
飛松太郎右衛門
久木田三七母

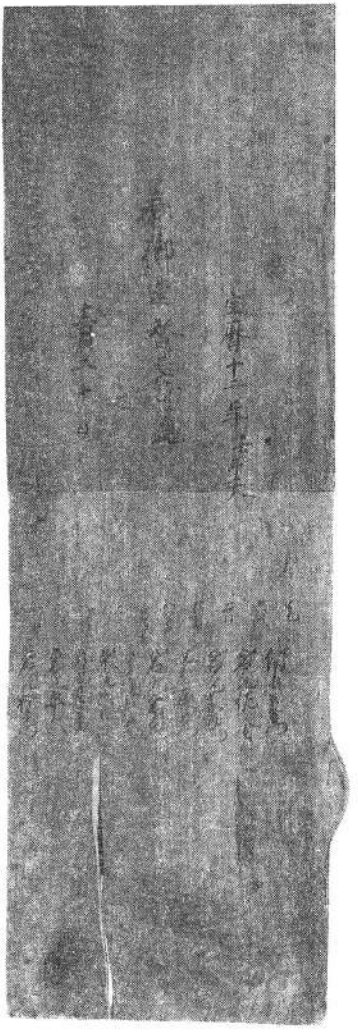
「十二段」
同八文　古藤半左衛門
同　緒方慶右衛門
同　佐藤伊右衛門
同　谷山三右衛門
同　堀之内権八
同　古藤半次郎
同五文　美坂三五郎
同　田中甚左衛門
同百文　古藤半兵衛
同　谷山休右衛門
同　壱岐周兵衛
同拾三文　中原甚作
同　同苗拾郎
同三拾弐文　隈元八左衛門養母
⟶(7)　児玉八郎右衛門

(8)

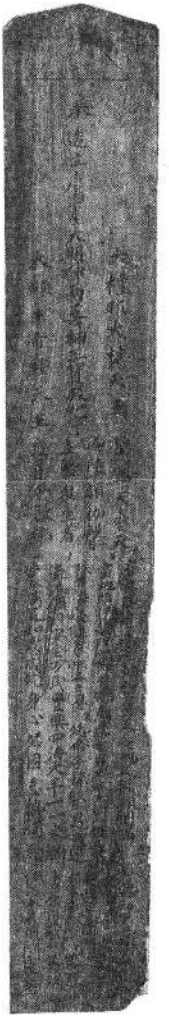
「十三段」
一　錢廿弐文　竹子村　剥岩之　長左衛門
一　同　並松之　源八　同所之　長右衛門
一　同廿四文　岩崎之　源右衛門　榎園之　慶八
一　同　上別府之　長左衛門　並松之　八郎
一　同　才土之幸左衛門　中吉之　長蔵
一　同　同所之三之丞　上久保之　六左衛門
一　同　同所之　蔵右衛門　中村之　長次郎
一　同　田中之　与七　上牟田之　清吉
一　同　祝儀薗之　清八　二月田之　与左衛門
一　同　中吉之　六左衛門

一　同
一　同拾六文
一　同
一　同
一　同
一　同
一　同拾五文
一　同

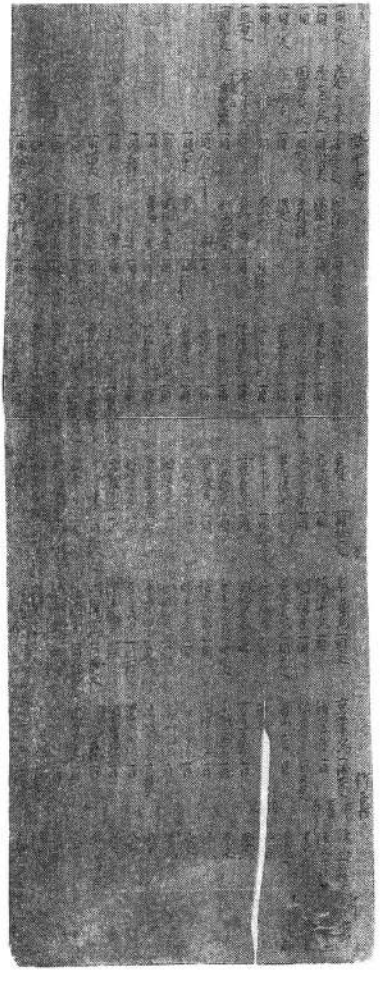
「十四段」
一　同拾三文　中村之　七郎
一　同拾弐文　馬場之　長之丞
一　同八文　剥岩之　源之丞
一　同　同所之　清助

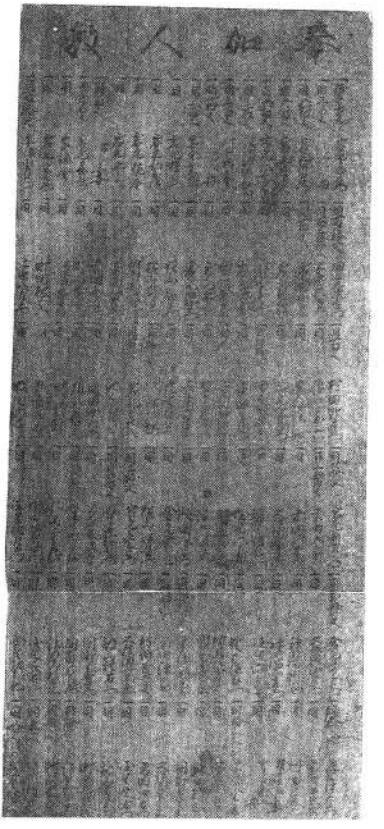


宝暦棟札　A面



正保四年棟札　A面





宝暦棟札　B面

(四)　十三塚史跡公園

旧十三の塚は、鹿児島空港の南端より更に五〇〇m程南西の方向に点在していた塚跡に、農業構造改善の際コンクリート柱を建てたものである。これは昭和十二年十二月、崎森青年団の善意で実施された。現在は、十三塚の由来を記した第十三号碑と二、三の碑が残るのみとなっている。以下昭和九年、野田昇平氏（加治木町出身）の実施踏査報告書より抜粋する。

十三塚は、国分鹿児島神宮北方台地十三塚原の中央道路に沿って略南北の線に現存するもの五箇を数えたり。更にやや不明なるも存在せるを認むべきもの二箇、不明なれども存在せるを予想せられるもの四箇、計十一箇を数えたり。もし最初に十三箇現存せるものとすれば二箇の位置は全く不明なり。これは現存塚の両端に沿いて存在せるものと思われる。全部の塚は一直線上に並列せるものに非ずくして、くの字形に屈曲せる線上に並列せるも大体の方向は高屋山陵の方向に向へることが注意すべきことなり。各塚の間隔は不定なれども十間及至十五間位の間隔を以ってほぼ直線上に並列す。一、二、三号の三箇は、東南より西北の線に並べり。而して一号、二号は、やや不明なれどもその痕跡充分に認められる。一～二号の距離は十四間、二～三号の距離は十間なり。三号及至九号の内正確にその存在を認められるもの五箇は正しく南北の線に沿うて一直線に並列す。三～五号の距離は二十五間その中間に四号の存在を予想さる。四号の位置は不明なり。五～六号の間隔は十五間、六～七号の間隔は十五間なり。七～九号の間隔は五十間なればその間に少なくとも三箇の塚あるを予想される。（一間は六尺、一尺は約三十cm）

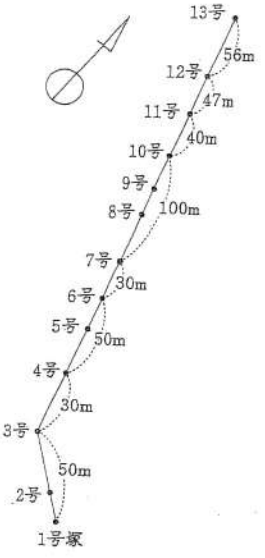
各塚の高さは三尺位、経一間位の小塚なれども周囲は畑地なれば多年削小せられしものと思わる。建造当事は相当大なる円墳なりしならん、三号墳の基部を少しく発掘して弥生式か斉部土器の破片数箇を得し外何等の遺物を認めざりき、当時発掘の土器は加治木町郷土館の陳列棚の中にあり。これ等の土墳は埋葬墳に非ずして仏教伝来以来神仏混淆思想の産物供養塚の類なるべきはその名称によりて明らかなり。十三塚と称するものは我が国各地に現存することによりても明らかなり。と、

古老の伝えによれば長承元年、今よりおよそ七八〇年前（平成十六年より八七二年前）その正統を争い敗れた

宇佐八幡から国分八幡を焼討すべく、一四人の密使をつかわし国分八幡を焼かしめたところ火焔は天をおおい、朦々たる黒煙は自ら「正八幡」の文字を成して現れた。驚き恐れた密使は逃れてこの地に至り一人殪れ、二人殪れ続いて一三人に及び、僅かに一人が宇佐に帰りて事の次第を報告したと云う。土地の人は之をあわれみ、その場所に塚を盛り、その数一三であったので十三塚という、云々。

第12図は昭和五十二年十月文化財保護審議会委員の岩元時義氏を参考人として、農業構造改善事業後の標柱をもとに当時の想定図を作成したものである。

第12図　旧十三塚の位置想定図



農業構造改善事業の実施により、その旧跡を失うことになったので、平成二年三月、記念碑と共にこの地に当時の縮尺（第12図旧十三塚の位置想定図）をもって原形を保存し、十三塚史跡公園として整備した。史跡見学はもとより、休憩所としての利用や、中秋の月見会など町内外から多数訪れている。

○名　　称　十三塚史跡公園
○所 在 地　崎森字南十三塚３２１４番地
○面　　積　１,０５７㎡
○付帯施設　東屋、駐車場

(五)　久木田築之助翁胸像

竹子集会センターの敷地の一角に胸像が建立してある。

久木田築之助の胸像である。碑文に書かれてあるとおり竹子共生会を創立され、『山には木を里には人を』を会是として会有林の整備、産業の振興、人づくりに努力され、その理念は今も脈々として生かされている。

竹子の偉大な指導者久木田築之助翁のブロンズ像建立の話が立ち上がり、平成十四年三月二十八日除幕式のはこびとなった。

資金は財団法人竹子共正会が三二〇万円を投じ建立。

建立にあたり建立委員会設立、委員長に延時力蔵　委員に長野春政　久木田憲昭　田中勝　下久保良憲　岩崎勝馬　田淵徹　長野久　村田哲二があたり、郷土訓『山には木を里には人を』基本に、現在も会有林の施業管理・簡易水道の維持を行う一方、公民館運営審議会においては地区民総参加の各種行事も実施している。

碑文の全文を原文のまま掲載した。

碑　文

竹子地区民が郷土の師と仰ぎ慕っている久木田築之助翁は宮川内久木田家に明治七年二月十五日生を享け幼少から聡明で利発に富み神童と呼ばれその将来に大きな期待が寄せられていた。

竹子小学校を卒業し更に加治木村柁城小学校補習科で学んだのである。

その当時、加治木の青年は「青雲舎・有為舎」で勉学や討論会の開催、剣道・柔道に励み示現流で身体と精神の鍛錬を行い修養に打ち込み気力に満ちた毎日を過ごしていることに感動し、学業を終えて郷里竹子に帰った築之助青年は、竹子の青年達が明治二十七・八年の日清戦争の勝利による戦勝に酔いしれ、田舎で何の刺激も無く夜は竹子中央の上寺説教所で夜遅くまで馬鹿話に花を咲かせそのまま宿泊し翌朝帰宅するのが常であったこと、毎年打ち続く旱害によって水不足を来たし水田への水引きのことで上方限下方限は反目し水の一滴は血の一滴と言われ対立は年々激化し極めて深刻な有様であった。

この二つの事を非常に憂えた久木田青年（二〇才）は村田経助（二二才）、斎藤栄助（二六才）、村田定左エ門

（二一才）、長野七郎（二一才）、沼口源内（二九才）、竹内彦太郎（二六才）等の先輩同輩と幾回となく懇談し納得賛同を得て竹子一円の青年有志を以って、明治二十九年九月二十八日竹子青年共会を創設しその会長に推され解決すべき地域課題の多いことを知り青年の力だけでは解決に至らないと判断し上原矢左エ門、宗像林角、原田尚健、壹岐矢太郎氏ら先輩有志者と話し合い翌明治三十年十月には青年の二字を削除し竹子共会と名称を改名し区民総意に依って会の運営を行う組織に変更し荒廃した道路の改修、稲荷神社の修築等の事業に乗り出したのである。

然し忽ちにして資金財源面で行き詰まり、共有財産の必要に迫られ旧島津藩時代の衆力山を基礎にして官有林の払い下げに奔走した。

当時官有林の払い下げ事務は県庁で行われていた為、交通機関も発達していなかった事から、早朝暗いうちに宮川内の家を出て徒歩で加治木港まで行き加治木港から船で鹿児島に渡り県庁で交渉を行った。

度重なる交渉で県庁内は又竹子の久木田が来たと県庁職員の注視の中で交渉に当たりその熱意が県庁を動かし官有林の払い下げに成功したのである。

然るに払い下げ賃金や交渉費用等の捻出には大変な苦労があった。

払い下げ後の会有林は三百五十町歩にも及び、会運営の基礎となり造林事業を会是となし「山には木を里には人を」の基本理念を掲げ地域振興の基を為す財源措置が講じられたのである。

久木田築之助翁は青年共会長、共正幹事、会長職を明治三十六年から昭和十七年まで通算一九年間、発足当時初から五一年間会の運営に心血を注がれると共に、明治三十四年二七才にして溝辺村一級議員に選ばれ新憲法公布の昭和二十二年までの四六年間村会議員として奉職されその内昭和九年から昭和十七年の二期八年間村長として又溝辺村報効農事組合長として農民の指導機関として役割並びに溝辺村産業組合長としての翁の職見、弛みな情熱を傾注し村政発展に寄与された。

又明治四十年から昭和十七年までの三五年間姶良郡畜産組合評議員、同組合議員、姶良家畜保健組合評議員を歴任し更には明治四十二年から三期にわたり姶良郡会議員として姶良郡政に貢献された。

惟うに弱冠二二才から七三才までの五一年間郷土竹子区民の融和親睦を旨とし次代を担う人づくりの基礎である竹子小学校の教育環境の整備拡充敬神宗祖の精神を区民の融和の拠り所として稲荷神社の修築、隼人、日当山、山陵、竹子、永野を結ぶ県道昇格運動、里道の拡張工事、畜産を始めとする産業の振興、全国に先駆けての昭和三年十一月十五日に第一回敬老会の開催等、竹子の発展を主軸におき村政にまた郡関係の要職に優れた職見と指導性を発揮されたのである。

中でも畜産振興には特に意を払い、自らも夫婦して牛馬を飼育し改良に傾注され郡内で始めての夫婦揃っての郡畜産組合長から表彰を受けられ新記録を作られたのである。

昭和二十二年公職を勇退されてから昭和三十三年十一月三日八四才で逝去されるまで地元の竹子青年壮の指導に生涯を捧げられたのである。

翁が残された足跡は余りにも大きく其の理想とされた竹子地域社会の構造は財団法人竹子共正会に脈々として引き継がれており我々は翁の築かれた功績に感謝し地区民の親睦融和を基に、森林、林業の振興を図り自然環境を生かした産品の創出、人情味豊かな区民性を醸成し想像力に富んだ人づくりに財団法人竹子共正会が先頭に立つ事を約し、此処に偉大な先人久木田築之助翁を称え碑文とします。

（記述責任　理事長　延時力蔵）

平成十四年　三月二十八日

財団法人竹子共正会　建立

昭和15年据石ヶ岡にて撮影

溝辺村立青年学校
学校長　飯野武夫
溝辺村長
久木田筑之助
溝辺村立竹子尋常高等小学校
訓導　松田善治

(六)　愛郷平和祈念塔

愛郷平和祈念塔建立の経緯

平成十三年十二月十四日、町内五大字の役員で構成する溝辺町土地総代、氏子総代会の総会が、三二名の参加を得てコミュニティセンターで開催された。

この席に、当時の有村久行助役が出席され挨拶のなかで、岩元町長が、今吉元町長からの申し送り事項の一つであった『大川内の慰霊碑保存と鳥居の復元を、この際大字によって実施していただき、恒久平和を願う場所として整備していく事を協議して頂きたい』との事であった。五大字役員は、今日のように平穏に暮らせるのも、日本が戦争を放棄し、平和のために努力しているからであり、戊辰戦争から、第二次世界大戦終結まで幾多の戦いがあり、その度ごとに、この溝辺からも多くの若者が愛する家族を残し、懐かしい故郷を後にして戦場に赴かれ、三〇四名の尊い生命を捧げられ、この大川内岡に御霊を祭り、毎年四月に戦没者追悼式が行われている。

慰霊碑の保存と恒久平和を願う公園整備は現代に生きる我々の努めであるとして、五つの大字と町内各種団体と共に、事業を進めることが協議され、早速大字会長会が開催され、町民の募金で事業を行うことから、用地の所有者は、大字麓となっているのでこの際町への寄付を重森会長にお願いした。

重森会長は、早速大字役員会を開催賛同を得て、無償譲渡する決定を頂いた。

これにより、町遺族会、町自治公民館連絡協議会、町社会福祉協議会、各大字、有志の方々で保存整備委員会が設立された。

当座の準備資金に当てるため、各大字から三万円の寄付をいただき、これにあわせ広く町民に呼びかけ寄付金を募ることとした。

保存整備委員会の委員長は大字会長会の世話役であったことから、竹子大字会長の延時力蔵氏が就任した。

募金の目標額は三〇〇万円とし、自治公民館長、自治会長の協力により、一般寄付金一、九三八件一、〇二七、五五〇円、特別寄付金一二三件一、三五五、五〇〇円が寄せられた。

この浄財をもとに、現在にふさわしい『モニュメント』とすることとなり、数回にわたり委員会、モニュメント検討委員会を開催し両手を天に向かって差しのべ、両の

手の平に平和のシンボルである白鳩を向かい合わせ、胸のあたりに町花である梅の花を配し、ふるさとを愛し恒久平和を願う思いから『愛郷平和祈念塔』を彫りこみ基礎には亡くなられた三〇四名にちなみ、三〇四個の玉石を埋め込むこととなった。

モニュメントは、総事業費二、二〇〇、五〇〇〇円で、豊かな経験と優れた技術をもつ戦没者の遺族である川口石材店川口光雄氏が制作され、八月十五日終戦記念日に建立した。

元今吉町長　前岩元町長　現有村町長と三代にわたる慰霊碑保存整備と、恒久平和の願いがここに成就した。

大川内岡慰霊碑保存整備委員会

委員長（財団法人竹子共正会理事長）　延時力蔵
副委員長（溝辺町遺族会壮年部会長）　有村秀忠
委員（有川同志会長）　村田芳孝
委員（三縄自彊会長）　迫田一雄
委員（麓公正会長）　重森吉利
委員（崎森共志会長）　笹峯護
委員（溝辺町遺族会長）　森田恵美子
委員（溝辺町自治公民館連絡協議会長）　今島光
委員（社会福祉法人溝辺町社会福祉協議会長）　松山淳一郎
有志　岩元喜吉
有志　岩元勝芳
有志　上原正大
有志　長谷川喜一
顧問（溝辺町長）　有村久行
顧問（溝辺町助役）　重丸紘美

(七)　十三塚原海軍特攻慰霊銘碑

上床公園では、特攻碑保存会による慰霊祭が、毎年四月三日に行われ、遺族をはじめ戦友や、志有るものが、往時を追慕し平和日本の礎として散った英霊に感謝の誠を捧げ心から冥福を祈っている。

一、鎮魂『白雲にのりて』特攻誌の発行

昭和から平成へ、世の中は目まぐるしい程の変遷をくり返して、昔日の影はない、世代と共に、ものの考え方も、そして心の在り方まで、変わって行くように思われる。

そこで、特攻碑保存委員会の意向で、十三塚原特攻隊の記録を残すべく、本誌『白雲にのりて』の鎮魂誌の編集をはじめたが、戦時中の機密に属するもので、資料や記録など皆無に等しかった。しかしながら、今ここで分かるだけでも、書き残さなければ年を経る程に資料もなくなり、当時を知る人の手がかりも少なくなって、編集が困難になると思われたので、少ない資料を基にして、敢て本誌の編集に着手したものである。

幸にして多くの遺族の方々から、貴重な遺書や写真など御提供を頂いたり、又特攻関係生存者や、当時の関係者の方々から、自らの体験を綴った手記をも寄せて頂いた。

そして平成二年に編集に着手した鎮魂誌『白雲にのりて』は、約一年半の歳月を要して平成四年二月に特攻碑保存会によって出版できたのである。

太平洋戦争の是非を論ずるとか、特攻を賛美するとかいうものではない。歴史的事実を記録にとどめ、美しい山河ふるさとの「平和」への資となることを願ってのことである。

幸にして、資料も整い、内容もいくらか納得のいくもので、対外的にも好評を得ている。当初五〇〇部を印刷、再版三百部更に再版を幾度か重ねて、今回（平成十五年八月）五〇〇部を重版し希望者の要望に応えている。僅かながら本代益金は、毎年の慰霊経費の一部として加えられている。

二、第二国分特攻基地関係戦死者名簿

昭和二十年三月十八日に始まった国分（第一、第二）基地からの特攻出撃は、六月三日九九艦爆六機の出撃を最後にし、一六回、四〇五機の多きにのぼった。

第二国分基地関係（三月十八日、十九日、二十日は第一国分を含む）の戦死者は推定一七一機、二一七程である。

このほかに、特攻機の直掩機として、或いは来襲の敵機激撃の空中戦において、また特攻にも劣らぬ熾烈な通常攻撃において散華した勇士の多数あったことも忘れてはならない。

第二国分基地関係戦死者名簿（三月十八日、十九日、二十日は第一国分基地を含む）は次の通りであり、銘碑の建立は平成九年四月三日である。

第二国分基地関係戦死者名簿

（三月十八・一九・二十日は第一国分基地を含む）

※　鹿児島県出身者

隊名機数	月日	出撃場所出撃基地	階級	氏名
菊水彗星隊	3・18	九州南東海域	中尉	平田　博一
			中尉	岩上　一郎
			中尉	野間　茂
彗星二七		第一国分	中尉	寛応　隆
		第二国分	少尉	田島　一男
			少尉	木村　潔
			少尉	久保田　秀生
			少尉	堀井　正四
			少尉	小山　康衛
			少尉	野宮　仁平
			少尉	葛和　善治
			少尉	田中　精之助
			※少尉	畠中　良成
			上飛曹	西島　忠治
			上飛曹	湯浅　正三
			上飛曹	猿渡　弘
			上飛曹	滝　理吉
			上飛曹	石井　隆
			上飛曹	松原　清
			上飛曹	小崎　朗
			一飛曹	植村　平
			一飛曹	佐々木　栄治
			一飛曹	江崎　志満夫
			一飛曹	佐藤　清
			一飛曹	市川　末人
			二飛曹	小野塚　一江
			二飛曹	勝俣　市太郎
			二飛曹	金山　一雄
			二飛曹	益岡　政一
			二飛曹	市毛　喜代夫
			二飛曹	助田　義一
			二飛曹	山下　利之
			二飛曹	中川　茂男
			二飛曹	古長　正好
			二飛曹	小野　庄治
			二飛曹	岡本　寿夫
			飛長	藤園　勝
			飛長	黒田　和三郎
			※飛長	白川　一夫
			飛長	三鬼　昭一
			飛長	小綱　十九雄
			大尉	柏井　弘
			大尉	川口　富司
			大尉	中村　恒夫
			中尉	坂田　明治
			中尉	藤田　春男
			中尉	山路　博
			中尉	天野　一史
			少尉	斎藤　幸雄
			少尉	夏目　康
			少尉	高梨　総理
			少尉	出島　広良
彗星二三	3・19	九州南海域		
		第一国分		
		第二国分		

彗星一七	3・20	九州南海域	少尉 福西 一隆
			少尉 川畑 弘保
			飛曹長 山下 敏平
			飛曹長 西口 速雄
			上飛曹 関矢 忠雄
			上飛曹 飯塚 英一
			上飛曹 宮下 万次郎
			上飛曹 北村 良二
			上飛曹 千野 五郎
			一飛曹 木村 福松
			一飛曹 山口 春一
			一飛曹 竹川 福一
			一飛曹 長谷川 次郎
			一飛曹 大屋 武
			※飛長 山元 当四郎
			飛長 上田 元太郎
			飛長 石黒 喜八
			飛曹長 熊沢 孝
		第一国分	上飛曹 森下 亮一郎
			上飛曹 大谷 吉雄
			上飛曹 佐藤 甲
		第二国分	一飛曹 谷本 七郎
			一飛曹 栗沢 栄吉
			一飛曹 槇田 利夫
			一飛曹 福下 良和
			飛長 中島 茂夫
			飛長 生稲 康夫
			飛長 根上 義茂
			飛長 宮本 才治朗

		第一正統隊	飛長 原田 幸
	4・6		飛長 寺道 良美
		沖縄北中飛行場沖	中尉 桑原 知
			中尉 横山 忠重
		第二国分	中尉 牛尾 久二
		九九艦爆一四	※中尉 前橋 誠一
			中尉 和田 喜一郎
			少尉 高橋 元一
			少尉 加藤 三郎
			少尉 桝江 秀男
			少尉 本田 実緒
			飛曹長 森山 唯雄
			飛曹長 千葉 正史
			飛曹長 沓名 達夫
			上飛曹 加藤 啓一
			上飛曹 石川 宗夫
			上飛曹 駒井 重雄
			二飛曹 利根川 吉郎
			二飛曹 山内 文夫
			二飛曹 中本 昭二
			二飛曹 武田 武雄
			二飛曹 岩松 利光
	4・6	第一草薙隊	中尉 高橋 義郎
		九九艦爆一六	中尉 作田 幹雄
			少尉 阿部 英治
			少尉 松本 厚
			少尉 坂本 充
			※少尉 時任 正明
			少尉 中村 盛雄

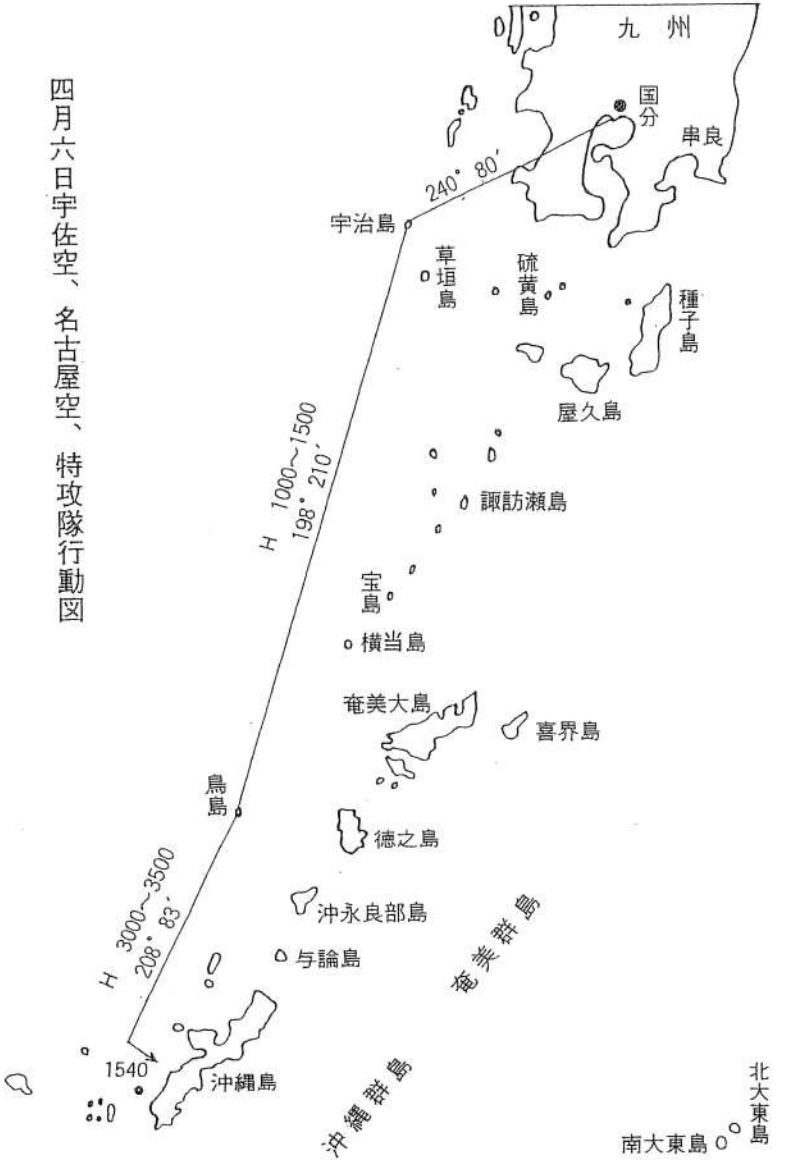
第一八幡護皇隊 九九艦爆一七	4・6	沖縄北中飛行場沖 第二国分	上飛曹　小鷹　時雄 一飛曹　後藤　友春 一飛曹　水品　清 一飛曹　太田　潔 一飛曹　中西　三津夫 二飛曹　柏村　成太郎 二飛曹　網田　浩之 二飛曹　大田　鎮雄 二飛曹　船生　敏郎 二飛曹　小田　好朗 二飛曹　桜井　利喜一 二飛曹　今井　敏夫 二飛曹　五十川　武夫 二飛曹　斎藤　義正 二飛曹　三井　位 二飛曹　吉岡　隆成 二飛曹　鈴木　孝一 二飛曹　長谷川　喜市 二飛曹　佐山　一 中　尉　寺内　博 中　尉　土屋　大作 中　尉　円並地　正壮 中　尉　糀本　武次郎 少　尉　末藤　肇 少　尉　富坂弥右ヱ門 少　尉　酒井　勗 少　尉　幾島　達雄 ※少　尉　上野　晶惟 少　尉　白崎　雅亮
第三八幡護皇隊 九九艦爆一九	4・6	嘉手納沖 第二国分	少　尉　杉本　貢 少　尉　古市　敏雄 一飛曹　生井　長三郎 一飛曹　鈴木　芳蔵 一飛曹　北川　義助 二飛曹　瀬川　長造 二飛曹　椋木　慶 二飛曹　堀川　功 二飛曹　大沢　政勝 少　尉　松葉　進 少　尉　高橋　健男 少　尉　萩原　巌 少　尉　大木　勇蔵 少　尉　渡辺　政則 少　尉　箕村　正男 少　尉　伊藤　英次 少　尉　石田　力雄 少　尉　島　澄夫 上飛曹　木村　一郎 一飛曹　新井　堤 二飛曹　富山　枝 二飛曹　浅見　育三 二飛曹　久保　督男 二飛曹　大橋　芳明 二飛曹　山本　昭男 二飛曹　名和　貞二 二飛曹　石川　耕弘 二飛曹　宮田　正義 ※二飛曹　桐野　秋弘

第二正統隊 九九艦爆 六	4・28	沖縄周辺 第二国分	二飛曹 財部 武夫 二飛曹 尾浪 富夫 二飛曹 耕作 精一 ※中尉 後藤 俊夫 少尉 久保 強郎 少尉 熊井 常郎 少尉 山下 久夫 少尉 小野 嘉市 上飛曹 緒方 忠幸 一飛曹 片寄 従道 一飛曹 阿部 一之 二飛曹 福田 周幸 二飛曹 漆谷 康夫 二飛曹 伊藤 宣夫 二飛曹 小野 義明 中尉 永尾 博 中尉 渡辺 淨 少尉 村田 定雄 少尉 菊地 利夫 ※少尉 厚地 兼之助 少尉 江澤 敏夫 少尉 笠原 越朗 少尉 奥村 周一 少尉 近藤 清 少尉 吉武 淑郎 少尉 久保 登美夫 少尉 正木 蕃 少尉候 鹿野 茂 少尉候 大塚 晟夫
第三草薙隊 九九艦爆 一四	4・28	沖縄周辺 第二国分	

第三正統隊 九九艦爆 一	5・25	沖縄周辺 第二国分	少尉候 遠藤 武徳 少尉候 萩田 祥敬 少尉候 宮内 栄 少尉候 吉田 弘資 少尉候 吉田 武夫 少尉候 下地 恵尚 一飛曹 上村 須佐夫 二飛曹 竹村 久志 二飛曹 梅沢 一二三 二飛曹 寺戸 安和 二飛曹 井上 信高 二飛曹 犬飼 茂二 上飛曹 安斎 岩男 一飛曹 鹿島 昭雄 中尉 関島 進 少尉 野津 誠 少尉 前山 富士生 上飛曹 鳥山 政幸 一飛曹 服部 英昭 一飛曹 南里 勇
第四正統隊 九九艦爆 六	6・3	沖縄周辺 第二国分	

第13図　第二国分基地から出撃した特攻隊の行動図である。

四月六日宇佐空、名古屋空、特攻隊行動図



第七章　社会体育

一　溝辺町体育協会

昭和三十七年に、体育・スポーツ振興計画の立案、技術指導と助言、スポーツ大会の開催などスポーツに関する意欲と町民の融和、体力の向上健康で明るい郷土作りを目的に、溝辺町体育協会が設立された。

加入競技団体も十二種目だったが、その後グラウンドゴルフ、硬式テニス、ゴルフ、クレー射撃が加わり、庭球もソフトテニスと改められた。

姶良地区体育大会では、十六前後の種目に出場し、例年Ｂクラスに定着している。

県民体育大会には、陸上競技、ソフトテニス等の種目を中心に、毎年十名程度が姶良地区の代表として活躍している。

市町対抗駅伝競走大会では、平成六年度からＡクラス入りし四年連続総合三位の結果を残した。

駅伝競走大会

昭和四十九年に溝辺町青年団が、青年団活動のひとつとして町内一周の駅伝競走大会を主催した。

職場地域グループ参加者も多く盛会だった。

しかし、交通量の増加、青年団員の減少による役員確保の困難などで、青年団主催による開催は極めて難しく昭和五十六年で中止に至った。

昭和五十八年に自治公民館制度発足、昭和五十九年二月十一日自治公民館連絡協議会主催による地区公民館対抗による駅伝競走大会が復活した。

この駅伝競走大会も道路交通規制や、選手選考の難しさなどで、平成六年第十二回をもって中止となった。

その後、体育協会主催による竹子小学校を主会場に、規模を縮小し、地域職場グループなどによる健康づくりや仲間づくりを目的に、竹子小学校中心の周回コースで実施されている。

役員体制

体育協会の役員は、各競技団体の代表者、その他の団体、学識経験者から構成され、第268表のとおりである。

また、昭和五十四年からの新組織体制から役員としてご尽力いただいた地区公民館長は、平成十二年度の総会より勇退していただいた。

理由としては、地区公民館駅伝競走大会の中止によるものである。

○歴代会長は次のとおりである。

・三代　昭和五十九年～平成三年　今吉　耕夫

・四代　平成四年　～平成八年　福永　忍

・五代　平成九年　～平成十年　神田橋景光

・六代　平成十二年　～現在　末重　良規

※平成十一年は、職務代理者　末重良規

第268表　溝辺町体育協会理事名（平成15年度）

		種別	氏名	チーム数	人数
理事	各競技団体	ソフトボール	横山　秀行	5	75
		バレーボール	長野　清則	6	70
		ゲートボール	重森　吉利	22	270
		軟式野球	岩下　剛司	2	40
		弓道	満塩　郁夫		25
		陸上競技	中山　誠		
		剣道	松元　深		7
		ソフトテニス	松下美千代	1	20
		卓球	森　輝明		25
		バドミントン	伊澤　裕		10
		サッカー	蔵前　義一	1	20
		グラウンド・ゴルフ	清本　千春	10	158
		ソフトボール女子	向井田雅昭	1	15
		ゴルフ	末重　忠義		200
		硬式テニス	佐藤　昭人	1	10
		クレー射撃	沼口　輝実		5
	その他の団体	スポ少本部長	清本　昌宏		
		自公連代表	長野　清則		
		体育指導委員代表	長野　清則		
	学識経験者	教育委員長	松山淳一郎		
		教育長	壹岐　修		
		校長会会長	鈴木　哲也		
		社会体育有志指導者	末重　良規		
		社会体育有志指導者	福永　忍		

二　体育指導委員会

体育指導委員は、スポーツ振興法により社会的信望がありスポーツに関する深い関心と理解を持ち、及びその職務を行うのに必要な熱意と能力を持つものの中から委嘱するとなってる。

平成十一年度の法改正以前は、教育委員会が任命するとあったが、地方分権による体育指導委員必置規制の弾力化が図られた。

溝辺町における体育指導委員は昭和五十年四月発足し最初に　菊浦明治　前田文夫　竹下睦旺　上屋和夫　中村歳文　今吉耕夫　福永　忍　野村　恵　萩原　豊　森口　誠　川原清美　の各位が任命され、体育指導委員連絡協議会も組織されている。

制度発足以来約三〇年になろうとしている現在、活動内容もスポーツ人口の減少により、町民の健康づくりを視野に入れた活動に変わりつつある。

このような中でスポーツ行事等の支援、ニュースポーツの普及等を中心に出前講座の取り組みがおこなわれるようになった。

体育指導委員の表彰

九州地区体育指導委員功労者表彰

昭和六十三年度　今吉耕夫
平成十五年度　野村文子

県体育指導委員功労者表彰

昭和五十六年度　今吉耕夫
昭和五十九年度　福永　忍
平成五年度　野村文子
平成八年度　神田橋景光
平成十年度　長野清則
平成十三年度　岩元忠記
有村友志
西　四雄
重丸静美

三　町民体育祭

溝辺町は、町の活性化と町民のふれあいや、町民の体位向上、総親和を図るとともにスポーツを通して明るい郷土の建設をすすめる目的で、町民体育祭を計画し、昭和三十八年十一月三日溝辺中学校校庭で、第一回大会が秋晴れの中開催された。

中でも剣道大会、角力(相撲)大会、バレー大会等が人気を集めて観衆拍手の中に熱戦が続けられた。

採点種目は婦人のお手玉競争、ＰＴＡの各校区対抗の綱引き、年齢別校区対抗リレーなどで大いにもりあがった。

第一回大会は、溝辺校区が優勝した。

昭和四十九年からは完成した町総合グラウンドに会場を移し実施してきた。

その後もプログラム等の工夫で毎年実施してきたが、昭和五十八年自治公民館制度発足により、自治公民館連絡協議会主催となり地区公民館対抗となった。

しかし、各自治公民館でも運動会が開催されるようになり、各自治公民館の運動会が盛んで、町の体育祭は参加者も少なく盛り上がりもなくなり、役員　選手だけの大会となってしまった。

昭和六十年、第二十三回町民体育祭のあと、今後のあり方を協議した結果、三年に一回開催することとなった。

第二十四回は、昭和六十三年十月十日体育の日に開催された。

年号も平成となり、次回の開催について協議の結果、町民体育祭は中止することに決定し現在にいたっている。

球技大会については、現在も開催されている。

自治公民館対抗球技大会
（ソフトバレーボール）

四　駅伝競走大会

溝辺町における駅伝競走大会は、溝辺町制施行十周年記念事業のひとつとして、昭和四十四年四月一日旧中央公民館をゴールに大字対抗で実施された。

優勝は、三縄　二位麓　三位有川B　四位竹子　五位崎森　六位有川Aの記録がある。

その後、青年団の主催による町内一周駅伝競走大会が、職域　グループ　同好会などの参加を得て開催されてきたが、役員不足や、選手の確保がむずかしくなり、中止に至った。

自治公民館制度発足により、地区公民館対抗による町内一周駅伝競走大会が開催されるようになったが、道路規制や選手選考がむずかしく、本大会も中止となった。

地区公民館対抗町内一周駅伝競走大会の中止により、平成七年度から、町内企業　職場　学校　スポーツ少年団　同好会などのチーム編成で健康づくりを目的とした、駅伝競走大会を開催した。

コースは竹子小学校を中心としたコースで、その後、国道五〇四号線の交通事情を考慮し、第七回大会から周回コースに変更した。

また、第三回大会からは、従来どおりゴールした時点での順位を競う競技のほかに、チームの申告タイムを競う申告タイム制の種目も設けた。

第269表　地区公民館対抗駅伝競走大会年次別成績表

大会回数	開催年月日	参加チーム数	成績		
			優勝	準優勝	第３位
1	昭和59. 2.11	13	竹子 A	崎森 A	有川 B
2	昭和60. 1.20	13	陵南 A	崎森 A	麓 A
3	昭和61. 1.19	12	有川 A	崎森 A	陵北 A
4	昭和61.10.26	10	麓 B	陵南 A	有川 A
5	昭和62.11. 1	10	有川 A	陵南 A	麓 B
6	昭和63.11. 6	9	麓 B	崎森 A	有川 A
7	平成元.10.29	12	有川 A	崎森 A	麓 A
8	平成 2.10.28	12	有川地区	崎森地区	麓地区
9	平成 3.11.24	12	有川地区	陵北地区	麓地区
10	平成 4.11.22	12	有川地区	陵北地区	麓地区
11	平成 5.11.14	12	有川地区	麓地区	陵北地区
12	平成 6.11. 6	12	有川地区	陵南地区	陵北地区

※第８回大会から各地区２チームずつ参加し、２チームの合計タイムで順位を競った。
※交通事情によるコースの確保が困難になったことと、地区によっては選手の確保に苦慮し、２チームの参加が極めて困難になったこと等の理由から、第１２大会で幕を閉じることとなった。

五　グリーンエアポート完走歩大会

鹿児島の玄関口、みどり豊かな空港の町、増健の町「みぞべ」を舞台に、スポーツを通じて人と人との出会い、町内外の地域間交流を深めるために、走っても歩いても良い完走歩大会として、昭和六十二年三月十五日(第三日曜日増健の日)第一回大会が開催された。

参加人員　六九四人。メイン会場は上床公園、以後交通規制やコースの不適当などの経過を経て現在に至っている。

第一回大会からの経過。

回数	開催日	コース(一〇kmのみ)
第一回	昭和六十二年三月十五日	国道五〇四号線上床公園入口スタート、北原石峯空港地下トンネルを過ぎ折り返し、コミュニティセンター前ゴール
第二回	昭和六三年三月二十日	コミュニティセンター前スタート・水尻　水尻バス停・北原・石峯・高速取り付け道路・陵南中・空港入口・山陵前・コミュニティセンター前ゴール
第三回	平成元年三月十九日	総合グラウンド・公園入口・北原(右折)・石峯(重森商店左折)・陵南中裏門・西郷像・(左折)・空港入口・北原・公園入口ゴール
第四回	平成二年三月十八日	第三回コースと同じ
第五回	平成三年三月十七日	第四回コースと同じ
第六回	平成四年三月十五日	第五回コースと同じ
第七回	平成五年三月二十一日	第六回コースと同じ
第八回	平成六年三月二十日	第七回コースと同じ
第九回	平成七年三月二十六日	

この回よりグリンエアポートフェスタとなり、完走歩大会とともに国際文化交流の祭典としてカラモジア祭りとあわせ開催された。この回よりコースの変更があり、スタート・ゴールとも空港近くの西久大倉庫前の鹿児島空港ビルディング広場に会場を移し、上床公園からはシャトルバスで選手の送迎を行い、閉会式、抽選会、文化交流の催しなどは上床

公園で行った。

第十回　平成八年三月十七日
第九回と同じコースと行事

第十一回　平成九年三月十六日
第十回と同じコースと行事

第十二回　平成十年三月十五日
この回よりエアポートフエスタの運営も難しく、再び元のエアポート完走歩大会となり、コースは、九回と同じで西久大倉庫前スタート空港地下道を抜け三km　五km　一〇kmの折り返しコースで実施。

第十三回　平成十一年三月二十一日
上床公園スタートゴール　一〇km房山の町界付近折り返し、五km水尻原基幹農道折り返し、三km修道院の方に下り左折し国道に出て上床公園ゴール。

第十四回　平成十二年三月十九日　第十二回と同じ
第十五回　平成十三年三月十八日　第十四回と同じ
第十六回　平成十四年三月十七日　第十五回と同じ
第十七回　平成十五年三月十六日　第十六回と同じ
第十八回　平成十六年三月二十一日
第十七回と同じ

各年度の参加数は別表（第270表）のとおりである。

第270表
グリーンエアポート完走歩大会参加者数
（人）

回数	参加者数	町　内	町　外
1	694	353	341
2	768	405	363
3	711	421	290
4	990	564	426
5	911	549	362
6	828	511	317
7	782	506	276
8	883	569	314
9	951	390	561
10	979	366	613
11	902	376	526
12	825	327	498
13	607	324	283
14	553	273	280
15	681	314	367
16	718	293	425
17	766	317	449
18	728	320	408

第271表　自治公民館対抗球技大会年度別成績表

年度	回数	総合成績			バレーボール		ミニバレーボール		ゲートボール50歳代		ゲートボール60歳代		ゲートボール70歳以上	
		優勝	準優勝	第3位	優勝	準優勝	優勝	準優勝	優勝	準優勝	優勝	準優勝	優勝	準優勝
昭和58	1	－	－	－	玉利	陵北	陵北	稲荷	－	－	－	－	－	－
昭和59	2	－	－	－	玉利	十三塚	論地	下有川切角	－	－	－	－	－	－
昭和60	3	陵北					論地				宮久		水尻横頭	
昭和61	4	玉利	三縄	石原	玉利	金割	西原	陵南	石原	玉利	玉利	大川内岡	三縄	水尻横頭
昭和62	5	石原	玉利	石峯	玉利	据石ヶ岡	石原	西原	十三塚	陵北	石峯	三縄	大川内岡	陵南
昭和63	6	陵北	玉利	十三塚	玉利	十三塚	西原	陵北	桑坂	十三塚	陵北	上石原	据石ヶ岡	石峯
平成元	7	陵北	玉利	下有川切門・石峯	玉利	陵北	玉利	西原	鍋麓原	三縄	陵北	石峯	下有川切門	十三塚
平成2	8	石峯	玉利	大川内岡	玉利	金割	石峯	陵南	大川内岡	下有川切門	石峯	十三塚	三縄	宮久
平成3	9	玉利	石峯	上石原	玉利	石峯	石峯	鍋麓原	大川内岡	鍋麓原	玉利	石原	上石原	永尾
平成4	10	十三塚	鍋麓原	三縄・金割	玉利	金割	鍋麓原	西原	三縄	大川内岡	石峯	十三塚	十三塚	三縄
平成5	11	下有川切門	玉利	石峯	玉利	下有川切門	陵南	西原	下有川切門	稲荷	宮久	石峯	桑坂	三縄
平成6	12	十三塚			玉利									
平成7	13	鍋麓原	玉利	石峯	玉利	十三塚	西原	鍋麓原	三縄	曽我	下有川切門	鍋麓原	水尻横頭	石峯
平成8	14	玉利	石峯	大川内岡	玉利	金割	玉利	鍋麓原	曽我	石峯	石峯	大川内岡	大川内岡	玉利
平成9		台風のため中止												
平成10	15	石峯	玉利	石原	上石原	稲荷	石原	玉利	石原	鍋麓原	下有川切門	陵北	十三塚	石峯
平成11	16	陵北	三縄	十三塚	西原	上石原	石原	玉利	十三塚	上石原	陵北	鍋麓原	大川内岡	三縄
平成12	17	三縄	稲荷	玉利	上石原	大川内岡	玉利	宮久	三縄	大川内岡	麓原	稲荷	稲荷	石峯
平成13		雨天のため中止												
平成14		雨天のため中止												
年度	回数	優勝	準優勝	第3位	ソフトバレーボール		グラウンドゴルフ男性		グラウンドゴルフ女性		ゲートボール			
平成15	18	麓原	水尻横頭	石峯	陵北	曽我	石峯	麓原	麓原	水尻横頭	水尻横頭	稲荷		
平成16	19	麓原	石峯	石原	十三塚	据石ヶ	麓原	石峯	麓原	稲荷	石原	宮久		

※バレーボール欄及びミニバレーボール欄の　　は、種目をグラウンドゴルフ競技に変更し、実施したことを示す。
※ゲートボール各年代欄の　　は、50歳代を男性の部、60歳代を女性の部、70歳代以上を混成の部にそれぞれ変更し、実施したことを示す。

六　溝辺町における社会体育施設

近年、社会人における健康の増進や嗜好とグループ交際の場として公設体育施設の整備が求められ、公認プールを除き、大概な施設はおよそ整備されたが、その後、全天候型の多目的交流施設の上床どーむの完成をみた。

施設ごとの内容は次のとおりである。

○総合体育館

平成四年度

総合体育館トッププライト遮光工事

五、七九八、九〇〇円

第四六回県民体育大会（開催地区：姶良地区）において、本町総合体育館バドミントン会場となる。

総合体育館の天井部分の出窓は競技に支障をきたすため遮光工事がなされた。

○総合グラウンド

平成八年度整備事業

①上床公園体育施設リフレッシュ工事

（一工区）　三、二九六、〇〇〇円

バックネット立て替え工事

（一工区）　五、三五六、〇〇〇円

グラウンド芝張り替え

②総合グラウンド倉庫新築工事

（設計管理委託）　七一〇、七〇〇円

工事費　八、八五八、〇〇〇円

平成九年度整備事業

側溝排水対策　八二九、五〇〇円

平成十二年度整備事業

①総合グラウンド及びテニスコート照明タイマー盤取り替え工事

二、二〇五、〇〇〇円

利用者の照明取り扱い方法をコイン方式からカード式へ移行

②総合グラウンド改修工事

四、七〇〇、〇〇〇円

ＡＢ両コートの土を入れ替えて排水　対策及び施設の向上を図った。

昭和四十九年の完成以来、町民のスポーツ活動の中心

となっている総合グラウンドは、五十三年度にナイター照明施設の整備もなされ、多くの方に利用されている。

また、施設の有効利用とスポーツ活動の充実を図るためにそれまで四月一日から十月三十一日までしか利用できなかったナイター施設も、平成九年度から年間を通じて利用できるようになった。

平成八年度には野外ステージの整備がなされ「ふるさと祭り」「夏祭り」「グリーンエアポート完走歩大会」などに多くのイベントに利用されている。

○テニスコート

平成十年度整備事業

テニスコート改修工事

（一工区）　二四、九九九、〇〇〇円

土から人工芝へ移行

（二工区）　一、九九五、〇〇〇円

＊起債外：審判代他工事費

平成十二年度整備事業

照明施設の取り替え

総合グランドの欄に記入

平成十年度改修工事によりコートが人工芝に整備がなされてから、利用者が増えてきている。

理由：雨が降ってもぬからないためにすぐに利用できるため。

地区内にナイターで利用できるテニスコートが少なく町外の利用者も多い。

○弓道場

平成七年度整備事業

溝辺町弓道場「洗心館」

①設計管理委託　三、五五三、五〇〇円

②工事費　六九、八三四、〇〇〇円

敷地面積　一六六五・三三五㎡

構造規格　鉄骨造平家建て、一部　木造平家建て

建築面積　射場　三一三・八六㎡

的場　四三・二〇㎡

矢取道　三四・五〇㎡

合計　三九一・五六㎡

延床面積　射場　二八二・〇〇㎡

的場　四三・二〇㎡

矢取道　三四・五〇㎡

合計　三五九・七〇㎡

それまでは、旧中央公民館を利用していた。

弓道を通じて青少年健全育成をはかっている。

（生涯学習推進協議会・すこやかジュニア部会での弓道大会等）

○ゲートボール場

平成六年度

①工事費　九九、三九五、〇〇〇円

上床公園整備一工区

一、六一六、〇〇〇円

上床公園整備二工区

一五、九〇一、〇〇〇円

上床公園内道路整備

一四、九九八、〇〇〇円

一六面（八面×二）

○グラウンドゴルフ場

平成九年度

①グラウンドゴルフ場整備事業

三九、三一二、〇〇〇円

平成十三年度

①グラウンドゴルフ場便所・休憩所新築工事

四、八三〇、〇〇〇円

社団法人日本グラウンドゴルフ協会認定コース（承認番号第七七号）

（認定期間：平成十二年七月二十二日から平成十七年九月三十日まで）

全一六ホール

全面張り芝のくせのないコースで、安定したラウンドを楽しめる。

東に霧島の霊峰、南に空港、錦江湾、桜島を一望できる景勝の地にある。

男女年齢を問わずに誰でもできるニュースポーツとして普及してきた。溝辺町グラウンドゴルフ協会もでき、体育協会にも加入して協会人口も増えてきた。（平成十五年度・一五八名）

○スポーツ公園

平成九年度、青少年の健全育成と町民の健康増進・体力づくりを目的として、アスレチック遊具等を設置した「溝辺町スポーツ公園」が建設された。

［施設の概要］

・所在地溝辺町有川一一七番地二七

・敷地面積　一三、八〇〇㎡

・遊技施設（アスレチック遊具）

ローラースライダー五二m・スカイロープ一基（二連）・マルチクライム一基・ハングアスレチック一基・アスレチックベンチA一基・ストレッチベンチB一基・ストレッチベンチC一基・擬木ステップ五三段・山登り一基・草スキー場五〇m（幅八m）

・スポーツ施設

ジョギングロード四三四m・ローラースケート場三一八㎡

・付帯施設

トイレ（大便器二・小便器二）・管理道路二七六m・流末排水路八〇m・駐車場十五台・木柵三八一m・東屋一棟・水飲み一基・外灯四基・木製案内板一基

・事業費　一四一、九三〇、〇〇〇円

［財源内訳］

・国庫補助金　六〇、七〇五、〇〇〇円（補助事業名～電源地域産業再配置促進費補助事業）

・起債　五六、〇〇〇、〇〇〇円（国民年金融資）

・基金　二四、五〇〇、〇〇〇円（社会教育施設等建設基金）

・一般財源　七二五、〇〇〇円

［供用日及び供用時間］
・一月一日から六月三十日まで及び九月一日から十二月三十一日までは、午前八時三十分から午後五時までとする
・七月一日から八月三十一日までは、午前八時三十分から午後七時までとする

○児童公園
平成九年度、幼児・児童が家族連れで楽しむことを目的として、じゃぶじゃぶ池・遊具等を設置した「溝辺町児童公園」が建設された。
［施設の概要］
・所　在　地　溝辺町麓三三九一番地
・敷地面積　一、〇〇〇㎡
・施設内容
　じゃぶじゃぶ池一一〇㎡・せせらぎ（流水路）三八ｍ・大型コンビネーション遊具
・事　業　費　五二、九〇〇、〇〇〇円
［財源内訳］
・基　　金　三八、五〇〇、〇〇〇円
・一般財源　一四、四二〇、〇〇〇円

○野外ステージ
平成八年度、溝辺町営運動施設の付属施設として、地域社会の交流活動並びに生涯学習の推進を図ることを目的に「溝辺町野外ステージ」が建設された。
［施設の概要］
・所在地　溝辺町麓三三九一番地
・敷地面積　二、八五三㎡
・構　　造　木造平屋建
　ステージ棟　二〇〇㎡
　管　理　棟　八五㎡
・事業費　四九、三四二、〇〇〇円
［財源内訳］
・県費補助金　六、〇〇〇、〇〇〇円
・起　　債　三六、三〇〇、〇〇〇円
・一　般　財　源　七、〇四二、〇〇〇円

○上床公園キャンプ場

上床公園キャンプ場は、昭和六十年三月、公共観光施設整備事業で、上床公園の西斜面の広葉樹林を利用し建設された。

しかし、キャンプ場としての設備・環境など、時代のニーズに合わず、利用件数、利用者数とも減少し、平成七年には利用件数三件、平成八年には利用者なしとなり、以降活用はなされていない。

野外ステージに水洗トイレが布設されたことにより、キャンプ場の汲み取り式の便所は平成十五年に取り壊された。

このような状況によりキャンプ場としての利用活用はできないため、平成十六年三月「溝辺町上床公園キャンプ場の設置及び管理に関する条例」を廃止した。

○多目的交流施設「上床どーむ」

環境と調和した循環型社会に向けて、人や環境に優しく再生産可能な天然資源である木材の環境利用を推進していくため、展示効果やシンボル性が高く波及効果が期待できる多目的交流施設を地域材を利用し、地域材の利用促進を図りながら、天候に左右されることなくスポーツやイベントなど実施して、町民の交流を促進しようと建設された。

施設は、上床公園のゲートボール場上段に建設された。

施設の内容は

敷地面積	四、七〇〇㎡
延床面積	二、九一二・七六㎡
建築面積	三、〇六七㎡
主要構造	鉄筋コンクリート造―一部木造
最高高さ	一二・九六m
アリーナ床	砂入り人工芝
総事業費	三二一、〇五〇、〇〇〇円
工事費	二二九、九五〇、〇〇〇円
完成	平成十六年二月

第272表　運動施設等の利用状況　（単位：件，人）

区分／年度	総合体育館		総合グラウンド		テニスコート		キャンプ場	
	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員
平成元年	734	20,178	172	16,777	482	2,391	11	536
平成2年	693	25,696	308	11,992	521	2,621	10	301
平成3年	627	27,365	231	12,253	326	1,709	13	282
平成4年	757	24,243	268	12,748	312	2,317	5	132
平成5年	765	25,342	356	16,459	361	1,645	2	81
平成6年	632	23,133	387	19,183	365	1,485	6	120
平成7年	845	24,365	371	11,277	443	2,015	3	54
平成8年	765	19,968	361	9,843	404	2,195		
平成9年	897	21,063	409	19,251	378	1,902		
平成10年	981	20,561	464	12,436	404	3,052		
平成11年	1,012	21,508	404	10,614	790	5,288		
平成12年	783	17,917	296	9,986	792	4,896		
平成13年	931	17,018	340	9,697	998	5,375		
平成14年	907	17,847	297	11,899	819	4,641		
平成15年	1,103	22,190	441	13,633	905	5,121		

第273表　運動施設等の利用状況　（単位：件，人）

区分／年度	グラウンドゴルフ場		ゲートボール場		弓道場		上床どーむ	
	件数	人員	件数	人員	件数	人員	件数	人員
平成元年								
平成2年								
平成3年								
平成4年								
平成5年								
平成6年								
平成7年								
平成8年			39	3,765				
平成9年			48	4,486				
平成10年			21	2,955	260	1,096		
平成11年	174	5,983	27	3,253	252	1,642		
平成12年	182	5,511	31	4,129	200	1,050		
平成13年	219	5,266	32	3,603	216	1,061		
平成14年	392	8,391	32	3,311	105	712		
平成15年	685	9,474	14	1,777	469	1,718	77	859